

戦争体験と平和への想い



小学校高学年版

「戦争体験と平和への想い」

小学校高学年版

はじめに

人吉市では、終戦後六十五年を経過した今、戦争体験者の高齢化とともに、戦争を知らない世代が増加しています。戦争の悲惨さを風化させないために、戦争を実体験された方々から貴重な体験談をお聞かせいただいて、記録に残し、後世へ語り継いでいくために、昨年度から「戦争体験と平和への想い緊急調査事業」を進めてまいりました。

聞き取りの中では、苦しみに耐えてこられた当時の状況や、とてもつらかった当時の思いが蘇った方もおられたことと思います。しかし、二度と起こしてはならない戦争の悲惨さを、後世に伝えていかなければという想いで、このような貴重なお話をお聞かせいただきました。世界では、今この時も紛争が絶えず、罪のない子どもたちまで亡くなっている状況があります。戦争によってもたらされるものでいいものは、何ひとつありません。

ぜひ、この本を読んで、戦争の悲惨さを感じていただき、二度とあのような惨事を起こさないよう胸に刻んでいただきたいと思います。

私たち一人ひとりが戦争のない世界を願い、他人を気づかいながら平和で豊かな生活を築いていきたいと思います。

最後に、今回、戦時中の体験を語っていただきました方々に対しまして、心から感謝とお礼を申し上げます。

平成二十三年三月

人吉市長 田 中 信 孝

目 次

訓練も受けないまま第一線に		愛 甲 数 馬	1
母の愛が支えた引き揚げ体験		伊 久 美 寛 志	4
いただいた命で笑い声の絶えない人生を		岩 本 泰 典	7
終戦直後の混乱と食糧難		大 園 武 義	10
食糧難の中で働いた日々		大 竹 千 ヨ カ	13
フィリピンの中生活を経て帰国		尾 崎 正 行	16
台湾から命からがら引き揚げる		木 原 和 恵	23
シベリアで過酷な労働に耐える		木 本 敏 雄	27
夫の戦死後、子ども三人を育てる		黒 木 イ ト ノ	30
敗戦後、国民の必死の働きで復興した日本		佐 無 田 穆	34
分散教育と防空壕掘り		白 濱 陽 三	38

二度としてはいけない戦争		瀬戸 致行	41
奉仕作業と学徒動員の女学校時代		田中 キクエ	45
卒業式の当日に受けた空襲		田山 尚	49
忘れられない悲惨な東京大空襲		田山 光則	54
武器も食料も薬もなく歩き続けた戦場		築地 堅	60
空襲警報で駆けつけた学校		築地 美津子	63
国民の心をズタズタにした戦争		土屋 歳明	67
勉強や進学もかなわなかった戦時下		津茂谷 マサ子	70
父の戦死後、母子二人でけん命に生きる		徳田 清則	73
終戦前後にソ連の収容所へ		那須 信敏	76
動員学徒で県外の飛行機製作工場へ		西峯 多木次	79
軍国主義の下、受けられなかった授業		野中 藤夫	82
三十六歳で召集された父の無念な死		濱口 敏行	86
飛行機組み立てで過ごした五ヵ月		林田 典子	90

日本を守った先人を忘れずに		早田 亮彦	93
学徒動員先で病気になり帰宅		春口 照代	96
弱音をはずかず戦後を乗り越えた母		東 和子	99
佐世保の海兵団で受けた厳しい訓練		東 一穂	102
軍人の父を亡くし必死で働く		深水 和子	105
南方で戦死した夫と弟		前田 ゆか志	108
下益城の開拓団で満州へ		丸田 ヤエ子	111
旧ソ連収容所で過酷な抑留経験		丸目 光喜	114
戦争で暮らしが一変、家業を手伝う		三倉 重成	118
三ヵ月の結婚生活。待ち続けた戦後		溝下 榮子	122
戦前・戦後の苦難を経験して		蓑毛 英一郎	126
厳しい食糧事情で運動場も畑に		三原 重信	129
三度の召集で戦地を転戦		宮崎 繁	132
戦傷を負っても懸命に生きた夫		宗村 香	136



敵機来襲
空襲警報発令の時。防空壕の中。耳と目を手でふさぎ、尻を上げて腹を上げて、ひざを曲げうつ伏せっている様子。

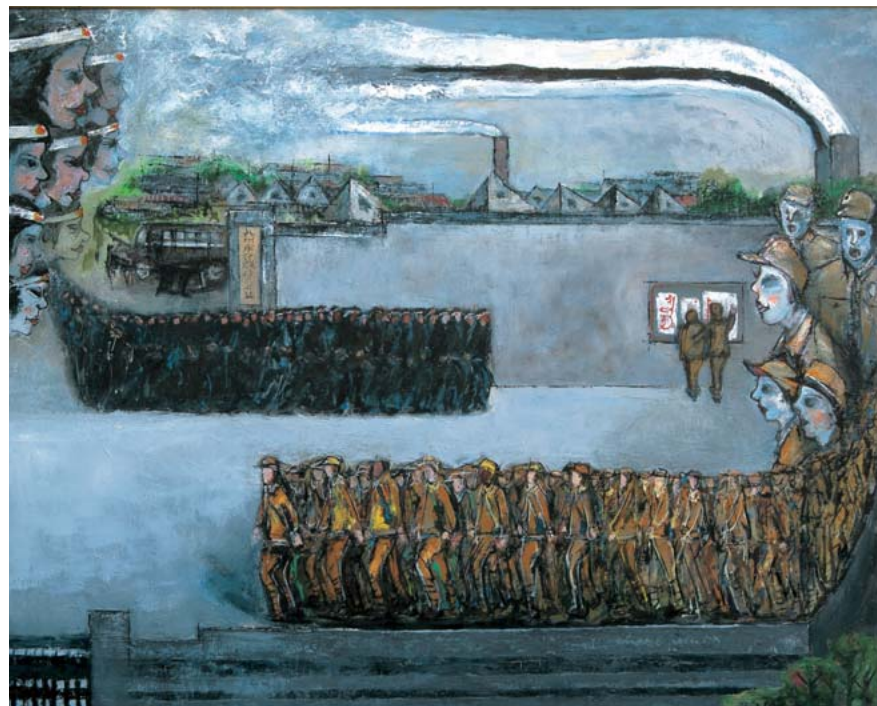
「動員学徒追想画
～その時私は中学三年生でした」より

西峯多木次

戦争への思いつづった三通の手紙	村	上	和	男	140
主計士官として軍事物資を管理	村	田	泉		143
兵士、機関士として戦争を体験	元	田	袈	見	146
戦争に翻弄 ^{ほんろう} された青春	山	田	次	男	149
ひさんだった戦時下の教育	山	中	朋	子	155
教師として戦前・戦後を生きる	山	本	ヒ	サ	158
来た道、これからの行く道	山	本	泰	弘	161
心を大切に人を大切にして生きよう	横	川	克	己	164
様々な工夫をした戦時下の生活	吉	澤	テ	ル	167
戦争は今でもゾツとする体験	吉	田	政	人	170
球磨川べりで機銃掃射にあう	吉	村	惣	四郎	173
旧制中学校	黒	肥	地	改太郎	179
『太平洋戦争』と人吉市民の暮らし	前	田	一	洋	192
戦争と子ども達					



藤の花



勤労働員交代の朝



大村工場
うしろは工場の爆撃による火災による赤。
その頃私たちは、戦闘機の部品作りのための基礎錬をしていた。



しょうろう流し



リュック背負って面会に

リュックは帯の芯で作った。着物をもんぺにする。自分の部落で親が寄って話し合っ、今度は誰が行くと決めて、日曜日に来てくれた。人吉を夜行で発ち、博多に到着く列車に乗って。



死者への哀悼

S19.10.25 日 B29 が7、8機やってきて大空襲をうけ、工場は火の海となり、御船中と、宇土中の生徒十数名の死者が出た。



部屋長集合

個人に送ってきた差し入れは没収される。そして皆にわけ与えるため、先生が部屋長を集めて目の前で一つずつ分け与える。それらを部屋にもって帰ってわけてやる。あまり送ってこないところもあった。



日曜日の思い出

食堂にカレーなど売ってあった。並んで買い、食べると次の食堂に並んだ。家からもってきたお金は、内ポケットにぬいつけた腹巻の中にあった。工場で働いたお金はもらったことはなかった。面会の時、母がある食堂に話をたのんで、もらってきた米を炊いてもらうことができるようになった。夜フロに行く時間に行って食べた。私の食料基地。



ひもじい 腹いっぱい食べたい
 弁当をゆすると空くので、朝ごはんを残しておいてそれに飯をつめた。昼の残して夕食に食べた。
 ひもじい。腹がへった。やまもりのごはんに、魚やいもや野菜や果物を腹いっぱい食べたい！！こんな思いの毎日だった。育ち盛りの我々には堪えねばならない、つらい試練だった。



町の風呂屋で
 週二回、町の風呂屋に行く。
 同じ浴そうで海軍と入るが、我々はいもこじである。夕食後、いっせいに入って、時間で交代させられた。



鍛冶屋

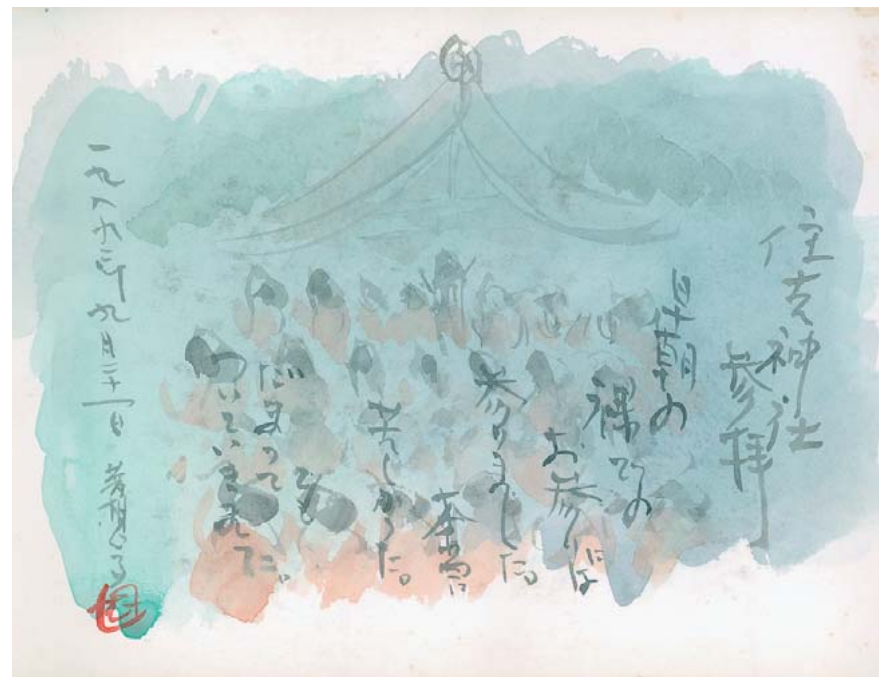
私の実家が鍛冶屋だったせいか、鍛冶屋の募集があって申し出たら、私と江口君が選ばれた。

冬は火があり暖かい。

鉄を入れてナマスところ。

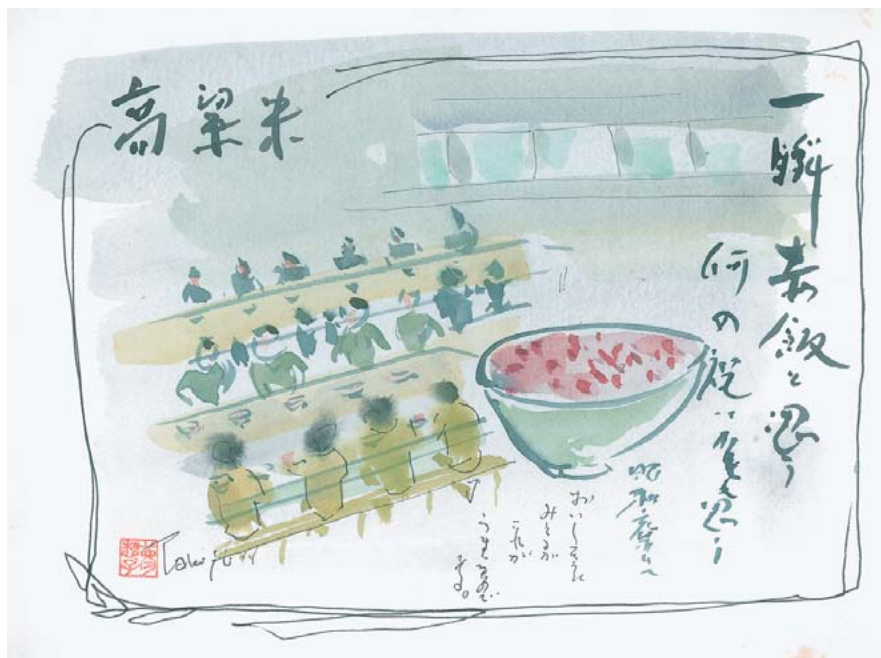
職員が2人おられ、その人たちがいい人達だった。

鉄板をやいて、弁当に水を入れて米をのせておくとごはんができる。それを食べさせてくれた。



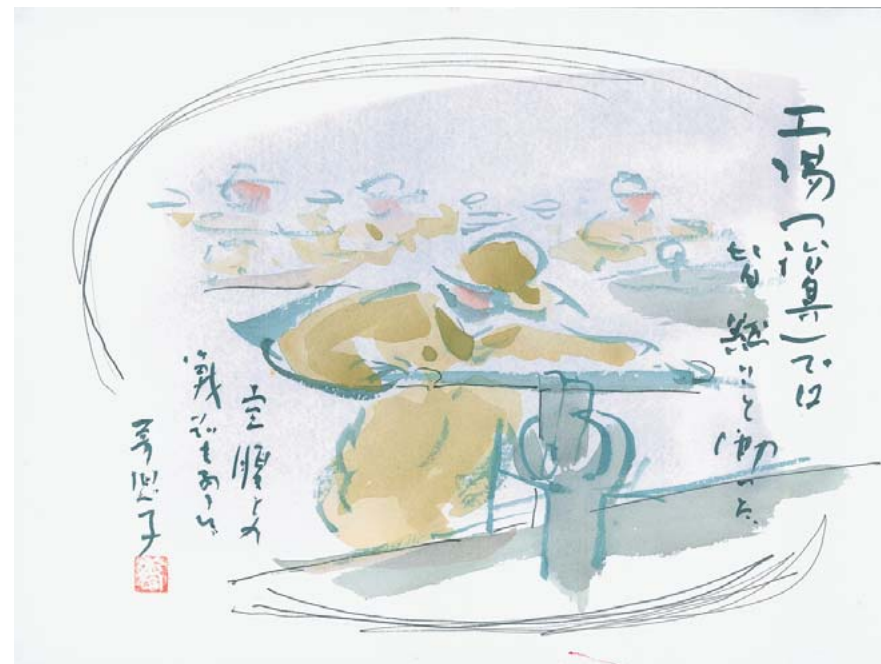
早朝裸での神社参拝

校長先生が神主さんだったことで、朝めし前に2K位のところにある住吉神社に参らされた。朝暗い内に（6時すぎ）起きて、全員裸で隊を作りかけ足で行った。毎日である。



高粱（こうりゃん）米

ある朝高粱米という赤いごはんがついで並べてあった。赤飯かなと思い、何のお祝いだろうと食堂に行った。が、水気がなくポロポロしておいしいものではなかった。すり切り一杯しか食べられなかった。



工場にて

部品作り
万力でしめてヤスリをかけているところ。
皆黙々と働いた。
空腹との戦いでもあった。



阿久根高女の生徒

工場への道で、時々阿久根高女学校の生徒に会った。女生徒は夜勤の帰り、気合いが入っていた女性にはわが家からもってきたものを食べて、あまりひどい思いはしなかったそうだ。(後の同級会で聞く)
人吉で同級会をした時、女生徒も来られた。10人位。

訓練も受けないまま第一線に

愛 甲 数 馬

大正九年生(下田代町)

私は大正九年(一九二〇)、藍田村下田代(現人吉市)に七人兄弟の長男として生まれ、昭和十七年(一九四二)二月二十日、日本から中国へ渡って戦っていた軍隊の中の第三十七師団に入隊しました。

第三十七師団は、昭和十四年(一九三九)三月に編成された陸軍部隊の一つで、五月に中国の塘沽^{タンク}に上陸。中国北部の晋南地方(山東省南部)の警備に就いていました。歩兵連隊は第二二五・第二二六・第二二七の三連隊で、昭和十五年以降、熊本県出身者は第二二五連隊に、宮崎県出身者は第二二六連隊に、鹿児島県出身者は第二二七連隊に補充されたので、第二二五連隊は熊本県出身者が多く郷土色の強い連隊でした。昭和十九年はじめまで晋南地方の防衛や敵の討伐^{とうばつ}(「従わない者を討つ」)作戦にあたり、その後、中国大陸の北部から南部にかけて行われた大陸縦断作戦に就き、終戦時には先頭はマレー半島、主力部隊はタイに到着していました。私は初年兵(入隊して一年以内の兵)訓練などを特別に受けることもなく中国に渡り、第一



線の勤務に就きました。当時は八路軍（中国共産党軍）の討伐が目的で、各地の戦闘に参加しました。昭和十七年八月に一等兵となり、十八年二月に上等兵に。九月には天津の特別警備隊に転属となり、第二二五連隊とは別の指揮のもとに入りました。特別警備隊は憲兵（軍事警察をつかさどる兵科）とは別組織でしたが、北京や天津で共産党軍を見つけるために各地を巡回し、敵兵がいると思われる集落を調べる任務をしました。

当時の中国は、広い集落全体を土壁で取り巻いて防御する造りになっており、集落と集落は相当はなれていても地下のトンネルでつながっていました。そうした集落に警備活動で行く時

は、小銃^{じゅう}などは持たず短銃^{たんじゅう}だけを持参。トンネルを発見しても物そうだから中には入らず、どうしても調べる必要がある時は、トンネル内にガスを吹き込むこともありました。疑わしい者をとらえると、両手を後ろに結びつけてつり下げたり、あお向けに寝かせて次々と水を飲^ぐませる拷問^{ごうもん}などで情報を得るのを見たことがあります。

昭和二十年八月、伍長^ごに昇進。八月十五日に終戦になったことは知っていましたが、所属していた特別警備隊は武装解除（降伏者、ほりよなどが、その兵器を強制的に取り上げられること）を行いません。以前と同じく中国共産党軍と対抗するため、中国国民政府軍の軍隊と思われる中国人部隊と一緒に、天津を中心に鉄道や鉄橋の警備に当たっていました。その後、昭和二十一年一月に帰国することになり、武器を返納。二月一日、長崎県大村港に上陸して復員（召集を解かれて帰郷すること）しました。

復員してみると留守の間に母親が亡くなり、父親が弟妹の面倒をみながら農業をしていました。家族の世話をすることも急がれたので、復員して二週間後の二月十四日に結婚しました。

母の愛が支えた引き揚げ体験

伊久美 寛 志

昭和八年生（瓦屋町）

私は朝鮮の元山（現北朝鮮）で生まれ、父は朝鮮鉄道に勤めていました。当時、朝鮮は日本が統治していて、国家公務員だった父は四十歳過ぎで年金がつく時に退職。電気工事うけ負業を始め、事業家としての地位を築きました。昭和二十年九月、私は、母、姉、弟と四人でロシア軍から逃げるため南下しました。母がやみ船を手配し、四十人くらいが乗って出港。やみ船といっても木製のほかけ船で、ちようど北上してきた枕崎台風の影響で船は大破して水びたしになり、流されて死を覚悟して親子四人ロープで体を結び合いました。

夜が明けて北朝鮮の保安隊に連行されその後、天理教の道場に收容されました。そこには、引きあげ列車に乗る昭和二十一年五月までいましたが、食うや食わずの集団生活に加え、伝染病の発しんチフスが流行。シラミがうつす病気で、わが家も家族全員がかかりました。最初に姉、次に母がかかり、四十度の高熱が一週間ほど続いてゲラゲラと四六時中笑いが続きました。二人が治った後、私がかかりましたが、母や姉とは異なるしよう状で、こしがぬけて歩けなくなり、はってトイレに行きました。弟も同じように歩けなくなり、かみもぬけ、残っ



たかみは茶色に変色。熱は引きあげまで続きました。この伝染病で多くの日本人が亡くなりました。

ある日突然、北朝鮮が日本人を追い出し始めました。貨車に乗せられ海岸線を南下すると中で機関車が消え、私たちは置き去りになったのです。そこから私たちは徒歩で南下をし始めました。初めは四、五十人の集団でしたが、十数名に分かれ人目につかないよう夜、歩いてひ難しました。ある時、「こっちに来いよ」と声が出て行ってみると丸はだかにされた、という人もいました。母は病み上がりの弟をおぶって歩き、食うや食わずで野宿する中、母自身もきついのにどれだけ無理をしただろうと、その

当時を思い出すと今でも涙が出ます。一週間近く歩いたある朝、米軍のトラックに出合い、三十八度線をこえたとわかりました。

そこには日本人が集まっていた、たまたま肥料を下ろしに来た船に乗ることができ、釜山へ。釜山の収容所で博多からの引きあげ船で帰国しました。

父は静岡、母は八代の鏡出身だったので、私たち四人は父が静岡に帰っていると思い、博多から静岡に向かいました。が、父は静岡にはおらず、昭和二十年四月に軍隊に徴兵されて八月にソウル勤務になっていたことから、終戦となり帰宅するつもりでした。しかし三十八度線のためそれが出来ず私たちより早く日本に帰り、八代にいたのです。朝鮮では父の仕事の関係で電球が倉庫に山積みされ、それを食料や生活用品と交かんして生活にはまったく不自由しませんでした。帰国してからは食料不足で苦勞し、朝鮮の暮らしとは正反対の生活でした。その後、父は知り合いのさそいで昭和二十二年に人吉で電気工事店を始めました。

私は学制改革で人吉二中の一回生となり、昭和二十五年四月に人吉高校に入学。中三の終わりからじゅう道を始めましたが、GHQ(日本を占領していた連合国軍総司令部)はクラブ活動での武道を禁止していました。高二の時に武道解禁となり、三年で二段に昇段。じゅう

道部キャプテンになり、県大会で二回、準優勝しました。

今の子どもたちは精神的、肉体的に自分をきたえるチャンスがないので、学校のスポーツクラブなどの集団生活を通して、仲間を助け合う精神を学んでほしいと思います。母の愛情をひしひしと感じながら、三十八度線を助け合ってこえた引きあげ体験は、私の人としての現在の大きな支えになっています。

いただいた命で笑い声の絶えない人生を

岩 本 泰 典

昭和十一年生(九日町)

私の人吉東小学校時代は戦時下で、四年生の時が終戦でした。校舎の玄関横には二宮金次郎の像があり、登校時は校門から、天皇陛下のお写真がある「奉安殿」へ最敬礼していました。運動場では高等科の生徒がグライダーの訓練を受けていましたが、ある日、操縦を誤って並木にぶつかり、こわれてしまいました。

九日町でも各家庭に防空壕がほられ、空襲警報で壕に入り一家が肩を寄せ合うのは子ども心には楽しいものでした。街ではグラマン戦闘機の機銃掃射も始まり、高原飛行場に落ちた

爆弾の振動で、壕^{こう}のかべからコンクリート粉がサラサラと落ちます。学校は分散授業となり、授業の合間にB29やグラマンのエンジン音をレコードで聴き、その遠近音で避難を判断しました。

市内の家は海軍の兵隊さんの宿舎に使われ、わが家にも二十人近い兵隊さんが宿はくしました。毎朝、高原からトラックがむかえに来て、食事は球磨川ほとりの散歩道路で準備。調理作業を見ていると、担当の兵隊さんが生のカライモで飛行機や軍かんを作り、軍かんマーチを歌いながら私たちの口に入れてくれました。

戦災が広がり九日町から薩摩瀬へそ開。ここも分散授業で、用件があると本校の西瀬小学校に球磨川を渡って行きます。西瀬橋は水害でこわれており、生徒は船に乗り六年生が櫓^こをこぎました。

やがて、九日町の家半分と土蔵が球磨川への避難路として強制疎開^{そかい}で取りこわされ、数日後に終戦となって親や祖母は悔やんだそうです。終戦後、代償として人吉城址^{ぼうえきじょう}の防空壕^{ぼうくうこう}に使われた白砂混じりの板が数十枚届きました。

終戦の玉音放送は雑音のひどいラジオで聞きました。ソ連軍が満州で日本人にひどいこと

をしているとうわさがあり、その兵が人吉へもやって来ると聞かされ、相良村四浦初神への疎開を準備します。実際には、アメリカ兵も家に遊びに来たりで何事もありませんでした。進ちゅう軍の兵隊さんが集うクラブが九日町にあり、十輪車と言っていたトラックで木上高原から毎晩のようにやって来ます。帰りには子どもたちが「ギブミアチョコレート」と言っている群がり、あまい物はカライモしかなかったころ、あの、あま苦い味は忘れられません。

戦中戦後の食料難は大変で、祖母に連れられ食料と交かんする着物をリヤカーに積んで行ったり、球磨川で流れてきた一枚の菜っ葉を持ち帰ると母が喜んでくれたりしました。学校では給食が始まり、かんづめの牛肉にマカロニが入り野菜をにこんだ物や、だっ脂粉乳が出され、帰りは一人ひとりにかん油が渡されます。新制中学になると食料事情も少し良くなり、コッペパンが一個十円。ジャムパン、クリームパンは同じ十円でも小さくて腹が満たされません。新制中学校は校舎がなく人吉高校に間借りしていました。

人吉高校卒業と同時に大阪船場へ修行に行きました。担任は大学進学をすすめましたが、商家のあと取りに大学は無用と祖母が反対。両親とも養子だったので祖母に従わねばなりませんでした。修行は三年でしたが、けがの連続もあり一年三カ月で連れもどされました。

この聞き取り調査のおかげで、良き時代に生きてきたと気づきました。少し上の先ばいは戦場へ行きましたが、私の世代は衣食住の心配は親任せ。戦後は経済の発展で欲しい物が手に入りました。良き時代に生かされましたが、死よりも生きることの大変さをおくればせながら知りました。これからの人たちには、せっかくだいた命ですから、笑い声の絶えない人生であってほしいと思います。

終戦直後の混乱と食糧難

大園 武義

昭和六年生（願成寺町）

私は宮崎で生まれ、父の転勤で四歳から六歳まで満州で育ちました。川幅が一・五キロもある鴨緑江わうりょくこうが満州と朝鮮の国境で、朝鮮の日本人小学校は船で三十分かけて通学。冬になると川がこおり、そりを使いました。国境の町では、満州の安い野菜を買いに来る朝鮮人や朝鮮の安い衣類を買う満州人の姿があり、日本人は自由に税関を通れましたが、朝鮮・満州人は厳しく取り締まられました。

昭和十三年、父が満州から出せい。私の家族は母と妹と弟の三人で着の身着のまま帰国し、

山田小学校に在校していました。昭和十九年四月、県立人吉中学校入学。授業は軍事教練があったり、男手がなくなつた農家の応えんに行ったりで、二年になると分散教育で地区ごとに分けられました。四、五年生は動員されました。また、相良村の青年学校（今の相良南中学校）に集まり、飛行機の燃料になるといふ松の根ほりに働かされました。夏休みに川辺川で泳いでいると、高ん原の海軍飛行場をこうげきに來た米軍機の機銃じゅう攻撃を受け、恐怖のあまり川に潜ったこともありました。

昭和二十年八月十五日の玉音放送は青年学校のラジオの前で正座して聞き、日本が負けたとわかると青年学校の校長先生が号泣しました。翌日、私は高ん原で海軍の兵隊が引き払つた後の物資を住民がぬすんでいる光景を見てびっくり。帰宅して「お母さん、どろぼうしよるよ!」と叫びました。高ん原の防空ごうの地下には海軍のしん具や食料品がたくさんあり、悪い事と知りながら母と私も毛布を持ち帰りました。身を守るため鉄ぼうも持ち帰ると、相良村長だった祖父に、進駐軍から武器を集めて差し出せと命令が出たので、戻すように言われました。家族は持ち帰った毛布を駐屯している兵隊の牛缶と交かんし、家族の命をつなぎました。祖父がじゅう医だったので家族で倉にあったブドウ糖も飲んだりしました。

そのころの日本人は食べ物にうえていて、人中の教室や農家の倉庫には軍の食料が保存されていました。人々は「農家の倉庫を開けろ！」と押し寄せ、よく暴動が起きました。保安隊ができると治安も良くなりましたが、時おり米兵が遊びに来て女の子がいる家族は心配でした。ガムやキャンディ、十輪車(ダンプカー)やジープも進駐軍が来て初めて見聞きしたものです。

相良から人中(人吉高校)までは四キロの道を地下たびやげたで徒歩通学し、げたの鼻緒が切れると鼻緒の穴に石をつめ鼻緒が動かないようにしたものです。時々、五木行きの木炭バスが坂道を登りきれずにいるのを人中生が押して手伝い、お礼に乘せてもらったりしました。弁当は配給の大麦で、大麦は雑すいにしないと食べられないため飯ごうを持参。湯前線組は白米の弁当で、とてもうらやましかったものです。

授業では進駐軍の命令で教科書をすみでぬるのが大変で、米軍司令官のピーターソンが人中に視察に来た時は、廊下を皮ぐつで音を立てて歩くのが異様な感じでした。人中五年の時に男女共学になり、旧制中学を卒業し人吉高校三年に編入しました。その後、病気で受験期に休みましたが代用教員の試験に合格。小・中学校に勤めながら受験勉強をして大学に通い、

教員免許を取りました。大卒後は市内の小学校で教鞭きょうべんをとり、最後は人吉東小の校長で四十年の教員生活を終えました。

私が育った時代は今のようには豊かではなく、食べ物も生活用品もなく、儉約の時代で、それが当たり前と思っていました。今は時代が変わり物が豊かになりましたが、物を大切にする心、感謝をする心を忘れないでほしいものです。

食糧難の中で働いた日々

大竹 チヨカ

昭和四年生(西間下町)

私は昭和四年に西村(現錦町)に生まれ、十一年に尋常小学校(旧制小学校)に入学しました。翌十二年、二年生のとき日中戦争が始まり、戦争が二年、三年と長引くにつれ、子ども心にもこれは大変なことになったと思ったものです。兵隊さんの出征しゅつせい(＝軍隊の一員として戦地に行くこと)も多くなり、学校挙げて武運長久ぶうんちやうきやう(運が強く命が永らえること)祈願のため、護国神社へ毎日お参りに行きました。

昭和十六年(尋常小六年)には、第二次世界大戦に突入し、戦時体制へと進んでいきました。



村からは若者たちが次々と兵隊として召集され、残った者は老人と女性、子どもばかり。父も一時期、沖繩に徴用工（ちようようこう）（Ⅱ国から強制的に工場などでの作業をするよう呼び出される人）として召集されましたが、無事に帰ってきました。

私は尋常高等小学校を卒業して二年間、青年学校に通い、その後人吉の洋裁学校に二年間学び、技術を身に付けました。戦争は長期化し、激しさを増すばかり。若い私は出征兵士宅の農作業の手伝い、イモ畑の草取り勤労奉仕など、一生懸命に働きました。高原では飛行場造りにたくさんの方が集められ、徴用工の朝鮮の人たちや、戦火を逃れて沖繩から疎開（そかい）（Ⅱ戦争の被害を少なくするため集中している人口や建物を

分散することとして来た人も働いていました。私も飛行場造りの仕事で賃金をもらいましたが、顔見知りでない人たちと仕事するのは、こわくもありました。

そのころから、食事はわずかな米粒の中にイモや大根を入れて量を増やしたごはんやだんご汁、カライモはねったんぼ、米は石うすで粉にしてだんごにするなど工夫していましたが、十分な食べ物もなく、つらい思いをしました。さらに、出征兵士の見送り、戦死者の遺骨の出迎えなどで駅に向かう日も多くなっていました。軍国の花よめとして結婚式の翌日に夫を出征兵として送り出し、二度と会うこともなく戦争未亡人となった方もたくさんおられます。そのような苦しい生活の中でも日本の勝利を信じ、老人をはじめ私たち子どもも敵の上陸に備え毎日、竹やりの練習に励んだものです。

昭和二十年八月十五日、天皇陛下の無条件降伏のお言葉がラジオから流れると、体が震えて涙が止まりません。日本が戦争に負けるなんて夢にも思っていませんでした。その時、私は十六歳でしたが、敗戦国となった日本にアメリカ兵が来たら、私たちはどうなるかといういろいろな情報におろおろするばかり。しかし、アメリカ兵が笑顔で私たちにあく手してくれたときは、ほっとすると同時に、つらかった戦争は本当に終わったのだと実感できました。

けれども、それからの生活は困難そのものでした。まず、食べ物がありません。その日その日にやっとイモやコーリヤンなどを主食にしました。農家の人たちは何とかありますが、町中の人は遠くへ買い出しに行くなど苦労していました。やがて、出征していた兵隊さんたちが復員して農作業に就く方も増え、生活も少しずつ安定してきて、村の人にも、やっと笑顔が見られるようになりました。戦争のない平和な世の中がいかに大事か、今しみじみと思ひ出します。

フィリピンの山中生活を経て帰国

尾崎 正行

大正十二年生（上原田町）

私は大正十二年（一九二三）、中原村原田（現人吉市上原田町）に七人兄弟の長男として生まれました。昭和四年、中原村立（現人吉市立）中原小学校に入学。昭和十二年三月に中原高等小学校を卒業し、この年に新設された球磨郡教育支会付属教員養成所に入所。昭和十四年三月に卒業すると、「中原興村塾」の正塾生となりました。

「中原興村塾」は昭和十二年、若竹又男陸軍少将が私財で建てた宿舎に、小学校卒業以上



程度の男子を集めて訓練を行った塾で、宿舍住み込みの正塾生と家から通って来る通塾生がいました。昼間は周辺の土地の開墾や食料生産にあたり、夜は座禅や「論語」の講読など、勉強と労働を伴う修養の塾でした。

中原小学校には戦前、複葉の戦闘機がありました。この戦闘機は航空機畑で活躍した若竹少将が昭和七年前後に中原小学校に寄贈したものです。中原小学校に飛行機があることは郡内に有名で、各地からの見学者も多かったと聞きますが、戦争末期、金属回収で分解して回収されたようです。

私の経歴（軍歴）は次のとおりです。

若竹少将の薫陶くんとうのもとで生活し、飛行機への

憧れが強くなる。興村塾に六カ月ほど学び昭和十四年十月一日、東京陸軍航空学校第四期生第八中隊に入隊。十五年十月、所沢陸軍航空整備学校(埼玉県)に入校。十六年九月に少年飛行兵として陸軍上等兵となる。十七年五月二十九日、所沢陸軍航空整備学校少年飛行兵の教育課程を修了し、陸軍兵長に任じられる。卒業に際して成績優秀につき「航空総監賞」銀時計が授与された。

以上、昭和十七年五月の熊本日日新聞に写真入りで記事が出ています。

「兄弟揃って空の勇士―航空総監賞拝受の光栄に輝く」の見出しで「人吉市中原区上原田町出身尾崎正行兵長は少年航空兵として二十九日名誉ある航空総監賞を拝受した。兵長は中原国民学校卒業後若竹少将の興村塾に入所……所沢陸軍航空整備学校に入学したもので、実家には父親馬勝氏・母親ひさのさんのほか弟妹六人があり、次弟一之君は昨年三月同航空学校に入学し、兄弟揃って空の勇士を志している……」。二歳下の弟、一之は偵察機搭乗員となり南方ニューギニア方面で戦死しました。

私は所沢陸軍航空整備学校卒業と同時に、飛行第一戦隊付きとなりました。同日、明野陸軍飛行学校(三重県)で機種改変(部隊の飛行機を新しい機種に換えること)中の第一戦隊に

着陸し、戦隊本部付きを命じられます。明野飛行学校では試験飛行・連絡飛行など約三十時間の搭乗を経験しました。

昭和十七年七月十三日、明野飛行場を出発し空路、上海、広東、サイゴン(現ホーチミン市)着。八月二十日、シンガポール経由でスマトラ島に到着。その後、ビルマ(現ミャンマー)、バンコク、ハノイ、ボルネオ島、ジャワ島、トラック島(現ミクロネシア、チューク諸島)、ラバウル(パプアニューギニア領)などを飛び回る日が続き、十二月一日、陸軍伍長に昇進。昭和十八年八月一日、機種改変のためラバウルから船で日本へ。九月、機種改変を終了すると再び朝鮮や満州に飛び、十二月一日、陸軍軍曹に昇進。二十五日、帝都(東京)防空のため千葉の柏飛行場に戻りました。

昭和十九年七月二日、柏飛行場で試験飛行の試運転中、エンジン部分を整備していてプロペラで前頭部を負傷し、柏陸軍病院に入院。八月一日、戦隊がフィリピンへ転進することを聞き、治療途中で自己退院し空路、明野飛行場・大刀洗飛行場・上海・台中(台湾)・広東經由でルソン島(フィリピン)へ。八月二十日、サンマリアノ飛行場に着きました。

その後、フィリピン北部のツゲガラオ飛行場で勤務していましたが、空襲が激しく飛行機

も全滅状態。カガヤン川右岸のシエラマドレ山脈の山岳地帯で、自給生活に入りました。食料補給は全くありません。東京航空学校第一期の先任（先輩）を隊長とし、二十人余で昼は山に潜み、夜中になるとカガヤン川を泳いで渡ります。左岸のアメリカ軍の陣地に切り込み攻撃をし、食料などを奪っては山に戻るという生活で、山中では蛇、トカゲ、カエル、その他、草でも木の実でも食べられる物は何でも食べました。

フィリピンでは、昭和十九年十月ごろからアメリカ軍が上陸作戦を開始。陸海空軍ともに日米間の激烈な戦闘が続き、日本の航空機はほぼ壊滅状態となり、アメリカ軍の圧倒的な戦力に日本軍の劣勢は明らかでした。昭和二十年二月、マニラもアメリカ軍の手に落ちました。六月二十八日にはアメリカ軍によってルソン島の戦闘終了が宣言され、日本軍は山岳地帯に立てこもっている状態でした。

山中で生活した正確な日数は分かりません。山中では、破壊された飛行機から取り出した無線機を大切に持ち歩いていました。電源には飯ごうを数個並べ、その中に尿を入れ中に竹を焼いて炭にした物を立て、銅線をつないだ「小便電池」を作り、それを電源として短波放送を聞いていました。しかし、外部の状況は全く不明です。

昭和二十年の八月以降かと思いますが、アメリカ軍の飛行機が盛んにビラを撒き、それらを見て隊長が判断。十月十三日、終戦になったと知り、全員で白い布を掲げてアメリカ軍のもとに出ました。その場所がどこかは記憶になく、そこからトラックに乗せられマニラのキャンプに収容されました。それまで身に付けていた武器は、各自が手榴弾二発・短銃・軍刀で、小銃や機関銃などの武器は何も持っていませんでした。収容所で武装解除し、着ていた服もすべて没収。パンツとランニングシャツ、タオル一枚が与えられました。

十一月五日、日本への復員が決まりマニラ港に集結。二隻の日本船がいて、その一隻に、同郷人吉の知人が乗り組んでいて「尾崎さんじゃないですか」と声をかけてきました。こんな所で知った人に会うとはと、大変驚きました。その船に乗り十一月十五日、鹿児島県の加治木町（現在の姶良市加治木町）に上陸しました。船中はそうでもなかったのが、パンツとランニングシャツ一枚で加治木に降り立った時は、さすがに寒いものでした。

列車で人吉に着き、どのように歩いたのか十軒町（現人吉市紺屋町の一部）あたりで「メゴ」に野菜を入れ担いで歩く女性とすれ違ったように覚えています。家に帰り着き、しばらくしたら母親が帰って来て、町でおまえと出会ったのではないかと言われ、あの時、すれ違った

のは母親であったか何とも不思議な気持ちでした。しかし、パンツにランニングシャツ姿で荷物も持たず、顔中ヒゲだらけの私を見た母親も、はつきり自分の息子とは分からなかったのでしょうか。全く裸一貫の復員でした。復員を知った近所の先輩が訪ねて来て、着る物がないことを知り青年学校の服を持って来てくれました。

実家は製材業で、戦前は南満州鉄道用の坑木などを扱っており、復員後は家業を手伝いました。敗戦後、球磨郡は塩不足が深刻で、荒尾市長を辞して人吉へ帰っておられた若竹少将や味岡良戒氏など数名の人たちが昭和二十二年ごろ、人吉市協同製塩組合を設立。芦北郡田浦で製塩業を始めました。私は田浦製塩工場の工場長として田浦に移り住んで働きましたが、昭和二十四年六月に日本専売公社が発足し、塩の専売制が本格化。製塩組合は事業を終えることになり、田浦から人吉に帰って中原農協に勤務しました。

復員後一番目に特に感じた事は、食糧難と物資不足の事でした。遠い道程を経て物々交換の為、葦北海岸方面より塩を背負って、途中取締り（食管法・物資取締り）に会う事をおそれてか、子供を背負った様にして一軒一軒をまわり歩く姿を見て、我等復員軍人数人で相談し若竹、味岡両氏に頼んで、製塩組合設立に及んだわけでした。

また、場所を田浦とした理由は、海水濃度（ボーメ〇・二八〇・三）燃料の供給、資財、人員、交通の便等の為でした。

これもひとえに、田浦の方々の御了解のたまものと深く感謝致しておる次第です。

台湾から命から引き揚げる

木原 和 恵

昭和三年生（願成寺町）

私は台湾で生まれました。父は台北州庁に勤めていました。小学生の頃はのびのびとん気に過ごしていました。支那事変から大東亜戦争が起ると、女学校では軍事教練や部隊の清掃、飛行機の防弾ガラス用の雲母（うんも）を薄く剥（は）がす作業の毎日で、そんな中で授業が行われていました。

生活面では、父の仕事のお陰で食べ物に苦労することはありませんでしたが、台北市内に居ては危ないと郊外に疎開（そかい）しました。そこは小高い所にあり、グラマン機から爆弾が落とされた台北市内の様子がよく見えました。

昭和十九年三月 女学校を卒業し、その頃はアメリカ軍の空爆がひどくなっていました。



卒業式の帰り道、空爆で死んだ中学生の遺体が道端にありました。母は、私が「卒業式から無事に帰って来られるだろうか」と心配していたそうです。

女学校卒業後は役所に勤めましたが、戦火はますますひどくなる一方で、爆弾がサツサツと雨が降るように落ちて、グラマン機の急降下で防空壕に飛び込むことも度々ありました。防空壕に逃げ込んだ女学校の先生が爆風で亡くなるということもありました。

昭和二十年八月十五日、終戦の詔勅を役所で聴きました。灯火管制がなくなつて、「もうガラスに障子紙を貼ったり、明りが外に漏れないように電球を黒い布で覆ったりする暗やみの生活

をしなくてもよく、屈辱的な生活は終わった」と、うれしく思いました。でも、内心、そのような思いを抱く自分を「非国民」と後ろめたくなり思い直したりもしました。

しかし、終戦になると暴動が始まり、ピストルの音が恐ろしく感じられ、「早く、日本本国へ引きあげたい」と願いました。父母は引きあげの準備を急いでおり、そのような時、父の知人だった山奥に住む高砂族（台湾に昔から住んでいて顔などに入れ墨をしている）の方（見かけはひげづらで怖い感じでしたが日本に友好的）が大事にしていた筆筒を背負って持ち帰られた光景が今でも忘れられません。

いよいよ引きあげの日がきて、身ひとつで両手に持てるだけの荷物しか持ち出せないため、母はアルバムから私達兄弟や家族の写真の剥いで持って行けるよう用意していました。外には港までのバスが待っていて、気が動転していた私は母に、「急いで、急いで！」と、急がせたばかりに、母はせっかくなとめておいたその家族写真を忘れてしまいました。このことを今でも思い出すと涙が出てきます。「母に悪いことしたなあ。急いで何て言わなければよかった」と。そのため私が今持っている三歳の時の写真は、叔母からもらったものです。引きあげ船は台湾のキールンから出港し、ふたつの船に分かれて乗船しなければならないと

聞いた母は、「家族はひとつ、一緒の船に乗れるように」と懇願しました。母のお陰で私たち家族は後の同じ船に乗ることが出来ました。前に出た船は襲撃され沈没したそうです。

昭和二十一年三月、台湾を引きあげることが出来ました。船の中では、同船していた心ない復員兵から金品を盗まれる引揚者も多く、和歌山の田辺港で上陸すると、アメリカ軍からDDT（ジクロロジフェニルトリクロロエタン・殺虫剤、農薬）を頭から浴びせられ、とても屈辱的な思いをしました。田辺から父の本籍地の静岡県伊豆までは、押し合い^へ圧し合いの汽車を乗り継ぎ向かいました。伊豆では代用教員として国民学校の教員をしましたが、ノミが原因の風土病で包帯だらけで通勤したこともありました。その頃、あまりの辛さに母に一層死んだ方がよかった、と言ったことを今でもはっきり覚えて居ります。その後二年間の代用教員を勤め、昭和二十三年父の仕事の関係で人吉に移り住みました。

今、しみじみ思うことは、子どもたちには私が体験した恐くて辛い思いは絶対にさせたくないということです。平和のありがたさを感じる現在です。

シベリアで過酷^{かこく}な労働に耐える

木 本 敏 雄

大正十三年生（南泉田町）

私は昭和十七年三月人吉中学を卒業し、同四月、陸軍士官学校に入学しました。二年の予科を終え、三年目からは陸軍航空士官学校に進学しました。同校には整備科・航法科・操縦科とあり、私は操縦科の爆撃機を選びました。本科は二年課程でしたが繰り上げとなり、昭和二十年四月、満州での訓練が始まりました。練習機はドイツのユングマンを使い、昼夜問わず、休みなしの訓練が連日続きました。

先輩らは台湾からフィリピンに南下してレイテ作戦を展開しており、その戦闘では操縦科の三分の二の先輩たちが特攻隊員として亡くなりました。

八月九日、日本と不可侵条約を結んでいたソ連軍が参戦し満州に侵攻してきました。その数日後の八月十五日、終戦を大連近くの飛行場で知りました。終戦の報を受けて、満州の戦線にいた日本軍の部隊長らが終戦会議を行うため、八月二十日頃、新京（現在の長安）に集まり、私も新京に飛びました。既に新京の制空権はソ連軍にあり、ソ連のミグ戦闘機が新京

の上空を旋回していました。そのような状況下、新京から逃れる日本軍のいくつかの部隊は運よく飛行機で飛び立つことができました。我々の部隊も飛行機のエンジンをかけたまま部隊長の到着を待っていましたでしたが間に合わず、ソ連軍将校にエンジンを止めさせられ、捕虜収容所に監禁させられました。

十一月、捕虜になった日本の兵は五十人ほどを一組にして、車内を二段に仕切った貨車に乗せられ、ソ連シベリア地方の炭鉱の町チェレムホーボに連行されました。その日は、みぞれ混じりの冷たい雪が降っており、とても寒く、日本兵の捕虜を詰め込んだ貨車は延々とつながって発車しました。

収容所では、捕虜になった日本軍の将校と兵士とが分けられ、将校は現地での作業の指揮に当たられました。作業は地上と地下に分かれ、地上作業とはソホーズ(国営)やコルホーズ(村営)の農場整備や道路清掃をしました。この作業には身体が弱い人が主に従事しました。私は炭鉱で石炭の選別や運搬をする地下作業となりました。シベリアは資源が豊富で炭層が厚くダイナマイト爆破して採掘しました。作業中に落盤で胸まで埋まって救出されたこともあります。収容所は不潔で南京虫の害で痒さ^{かゆ}に悩まされました。また、寒さで風邪をこじ



らせて肺炎になる人や、栄養失調で亡くなる人も大勢いました。収容所での食事は黒パン、カーシャ(えん麦のおかゆ)、肉の入ってないスープだけで、そんな食事で寒さと重労働によく耐えたものだとも自分ながらよく思います。

昭和二十三年の初め、日本軍捕虜は帰国のため大きな都会に集結させられました。我々はイルクーツクの近くに集結しました。そこではまだ家屋造りの作業をさせられました。道路の整備作業もソ連の民間人と一緒にしました。ある時、ソ連の人が「ドイツ人はかわいいそうだ」と言っていたことがありました。それは日本人捕虜より与えられる食事が三割ほど少ないからだそうです。その理由は「ヒットラーがレニングラー

ドやスターリンググラードを攻撃したから」でした。シベリアでは六〇七万人の日本人捕虜が亡くなりました。

十二月、いよいよ帰国の時が来ました。ナホトカから舞鶴港へ着き、故郷の岩野に帰郷しました。当時、日本はマッカーサーの公職追放令で日本軍で将校の地位にいた人と共産党員は公務員になれませんでした。二年間静養後、昭和二十六年、中央大学三年生に編入しました。途中、肺結核で再び静養し二十九年卒業しました。昭和三十六年、願成寺郵便局開設と共に人吉に戻り、同局に勤めました。

私は日本に帰国でき幸せだったと思います。

夫の戦死後、子ども三人を育てる

黒 木 イトノ

大正七年生（大畑町）

私の夫は学校にはあまり行けませんでした。芝居などは一度で覚えるような人で、浪花節が上手でした。結婚して五、六年の昭和十八年十月、召集令状が来ました。翌年四月に次女が誕生しましたが、その年の九月、夫はフィリピンのマニラで三十二歳で戦死。私は

二十六歳でした。

夫は大工だったため、中隊の移動の前に次の駐屯地に行き兵舎を作っていた時に撃たれ、即死状態だったようです。作業をしていた五人中四人が死亡し、位牌は届いたものの遺骨はなく、子どもたちは長年、「お父さんが死んだ証拠にはならない」と思っていました。後になって、部隊長さんからの手紙も届きました。

昭和四、五十年ごろ、その隊長さんが本渡の信用組合の理事の方と分かり、息子夫婦が訪ねて行きました。隊長さんは、はっきり覚えておられず、手紙も自分が書いたものではないと言われました。ただ、「確かにこういうことがありました」とおっしゃったので、隊の兵隊さんの代筆だったのかもしれない。

夫は幼いころから漆田の旧家に働きに出ており、勉強したり文字を習う機会はないと思っていましたが、戦地からマメにはがきが届きました。わかりやすい文で生活上の指示や自分の近況が書いてあり、往復はがきで来るため、私も近所の方に代筆を頼んで返事を出していました。次女誕生の際も、自分が出征したから「征子」と名付けてほしいと書いてあり、命名を知らせた次のはがきには「征子ちゃん元気でしょうか」と名前を入れてありました。

規定の郵便物であれば、戦時中とはいえ当時もきちんと配達されていました。

夫の戦死後、三人の子どもを一人で育てました。幸い、米や野菜を作ってはいましたが、食べる米がなくても供出しなければならぬ厳しいものでした。自宅近くの大畑小学校には日本兵がたくさんいて、高原の飛行場を作りに来ているようでした。各家庭からも班ごとに一人ずつ、高原に奉仕作業に行っていました。兵隊さんのおかずの材料（トイモやカボチャ、カライモなど）を班長さんが集めて持って行っていました。

都会から衣類を持ってきた人と、米や野菜を交換したこともあります。交通手段が鉄道しかなかったため、大畑駅で降りて山道を下って来られていたようで、鹿児島など県外の人が多いようでした。「指宿から来た」という人もいました。駅への道も人がやっと通れるくらいの狭い急勾配の山道で、夫が坂道で馬を引いている写真が今も残っています。

夫が出征する二、三年前に炭焼き小屋を作りましたが、木の立て込み（炭焼き窯の中に木を立て並べる作業）をして焼くばかりにしたところで召集され、一度も炭焼きができないまま戦地へ行ってしまいました。小屋を作った時に借りたお金を返すため、馬を処分するよう戦地からはがきで指示があり、近所の人に頼んで馬を売ってもらいました。終戦後、鹿児島か



ら引きあげてくる米兵が学校付近にいましたが、それまで聞いていた怖い人ではなく、子どもが通りかかるとコンペイトーを分けてくれるような優しい人たちでした。

昭和二十九年、学校の授業料が百円くらいのところ（昭和二十七年の米俵一俵・六十キログラムの価格が三千円ほど）、免田にいたおばさんが私に仕事を探してくれました。免田に田植えに行くとき日当が五十五円くらいで、とても助かりました。また、営林署の苗作りの手伝いに行っていたかもしれませんが、戦後十年ぐらいたってからは来なかったようです。卵やバナナも貴重品で、病気の時しか子どもの口に入らない

くらい高価でした。子どもが小学生のころの弁当は日の丸弁当で、皆、腕で弁当を隠すようにして食べていたそうです。衣類は木綿製が多く、モンペ、ゲタ、ゴム草履、ゴム靴が流行していました。

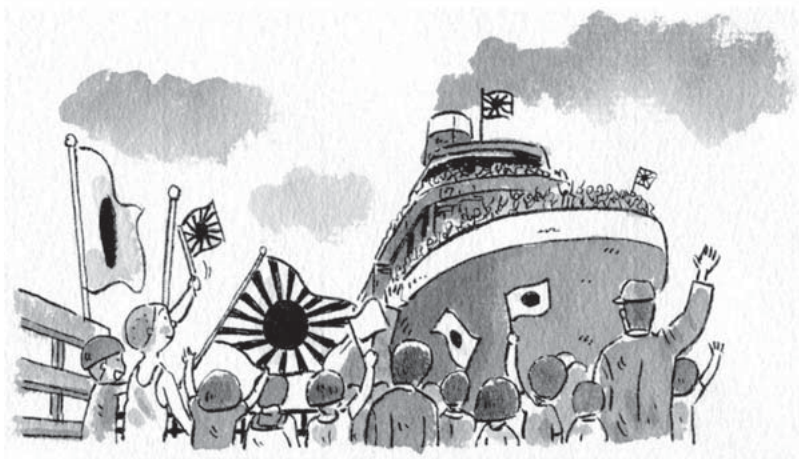
敗戦後、国民の必死の働きで復興した日本

佐無田 穆

大正十五年生（七日町）

昭和十二年、日中戦争が始まった時、私は天草の本渡北小学校五年生でした。町内から若者が出征し、私たち小学生は旗を振って港まで見送り船が遠くなるまで手を振りました。翌年、父の転職で満州（中国の東北部）に移住。昭和十六年十二月八日、大東亜戦争（だいつうあせん）そうい太平洋戦争の当時の日本側の呼び方）が始まりました。

昭和十七年三月、私があまり健康でなかったため弟と二人、祖父母兄弟がいる人吉に帰ることになり、人吉中学に転入。その後、鹿児島高農（現鹿児島大学農学部の前身）に進学しましたが、毎日が午前中授業で午後は五時まで四時間の農場実習。寮の食事は毎食、ドンブリ一杯の麦飯、にしめ、たくあん、栄養バランスもとれず、空腹で学業どころではありませんでした。



昭和十九年十月ごろになると戦争の状況も厳しく、鹿児島には沖縄に出陣する兵隊が集結。学校の一部も宿舎に当てられ、私たちは港まで荷物作業の奉仕に借り出されたりしました。時には高農の近くにも敵の戦う機が飛んで来て爆弾を落とし、跡には穴がぽっくり開いていました。二十歳以上の生徒は次々と召集されていきました。

昭和二十年、私は二十歳になり、くり上げ徴兵検査（ちようへいけんさ）国が国民の義務として兵士に適当か身体検査など行うこと）に合格。二月に学徒動員（がくとどういん）太平洋戦争時に労働力不足を補うため学生・生徒を強制的に集め勤労させたこと）で茨城県の訓練所に行き、農兵隊（のうへいたいふだん）は農業をしている兵隊）の指導者の訓練

を受けました。雪やしもが溶けた田畑を耕し、ジャガイモの植え方などを教わって三月四日に帰りましたが、もう一週間、遅かったら三月十日の東京大空襲くわっしゅうにあっていたかもしれません。

三月下旬、赤紙（召集令状）が来て四月に入隊。熊本と鹿児島で訓練を受けた後、六月に知覧方面（現鹿児島県南九州市知覧町）に移動。山中で壕（ごう）掘り、空堀掘りや陣地作りをしてアメリカ軍の上陸に備えました。食料はコーリャン、麦飯、塩の汁などで兵隊の体力はおとろえるばかり。げりでひん死の兵士を仮設の陸軍病院まで運んだりしましたが、途中で息を引き取りました。当時、赤痢りが流行していたと戦後になって聞き、言葉が出ませんでした。

山中の生活は敵機が飛ぶのを見るだけで、アメリカ兵を見るわけでもなく、戦争をしている実感もなく、毎日が空腹の思いと古兵（こへい）軍隊に長くいる兵士（へいし）連中になぐられずにおごすことで精一杯。八月十五日、山中で終戦の情報を聞きましたが、特に心も動かされませんでした。私たち学生出身は炭こう関係者に次いで帰され、九月十二日、人吉に帰宅しました。

家に帰ると祖父母や兄弟が喜び、家族で無事を祝いました。兄は壱岐の島の守備隊から、弟は海軍兵学校から、私より先に無事に帰っていました。翌年十二月には満州安東市にいた

両親と妹たちも全員無事に引きあげて来て安心しました。が、戦後は国民全部が生きるために苦勞の連続でした。

後日、アメリカ戦史を読むと、昭和二十年十一月ごろには吹上浜、宮崎の高鍋海岸、志布志海岸に上陸予定、明けて二十一年の初めに関東の七里浜に上陸予定だったとあります。そのまま戦争が続けば十一月には米軍が上陸し、私たちは一日で全滅したのではないかとぞっとします。私がいた部隊は本当にお粗末な装備で、また、周辺には民間の老若男女が日常生活を送っていました。兵隊は覚悟の上でも、民間の人々こそあわれです。本当に陛下のご決断があつて助かった、よく今日まで生き延びてきたなと幸せを感じます。

復員後の十一月ごろ、在学中だった高専で授業が再開し登校。終戦の翌年の正月、隣保こぞって新年会が開かれ、配給の焼ちゅうにご婦人方の手料理、芸達者な人の六調子、小原節、ハイヤ節の踊りで大いに平和を祝いました。私たち若い者は日本の将来を議論し、話の中心になった方が、「戦かん大和（やまと）、ゼロ戦を生んだ日本の技術は世界のどこにも引けをとらず、きっと再び立ち上がることができる」と主張されました。この予言は当たり、敗戦後の若者は貧困にたえて必死に働き、戦後日本の復興の原動力となりました。

昭和二十二年の春、農専を卒業。翌年、人吉の河南中学の教員となり、その後、八代農高に転勤しました。しかし、農学校に半年も勤めないうちに結核を発病。五年間、自宅療養に努めたものの体力が回復せず、教職も解雇されました。このまま、大の男が遊んでいても生きていけないと、当時、司法書士を開業していた祖父の補助者となり、昭和二十八年に司法書士試験に合格。認可され開業して五十年、まがりなりにも生きてこれました。

これも、家族をはじめ、お世話になった皆さんのおかげで、幸せというほかありません。日本は敗戦後、憲法で戦争をしないと定め、六十年も平和が保たれた例は世界の歴史でも、まれです。それでも、自国を守る心構えだけは大事なことだと思っています。

分散教育と防空壕掘り^{ぼうくうごう}

白濱陽三

昭和七年生（願成寺町）

戦争中、学校は各地区ごとに分散教育を行っていました。私の地区では青井町にある空き家を利用し、分散教育には先生が回って来ていました。二年生がいなかったため、私が一番上級生で責任者のような立場だったにもかかわらず、よく遊んでいました。

まだ終戦前の一年生のころ、人吉駅前に朝、十二、三人の生徒が集合し、蟹作（現在の川上記念球場の少し先）、現在の水道局の下付近、東間上（川上記念球場より手前付近）の山に防空ごうを掘りに出かける作業がありました。その時は軍用トラックが人吉駅に迎えに来て、作業が終わると歩いて帰っていました。バスは木炭を使って走っていた時代でした。

私たちの仕事は、朝鮮兵が掘った時に出る土を竹で編んだ担かのような形のモッコで運び出すことで、十メートルくらい掘り進んでいました。その作業を行う兵隊さんは幹部が日本人で、働く人は朝鮮の人がほとんどだったようです。午前十時と午後三時の小休止では、朝鮮兵が「



トラジ、トラジ、トラジトラジ」と歌っているのをよく聞きましたが、意味は分かりませんでした。

蟹作での穴掘り中に事故で二人が生き埋めになり、一人は助け出されたものの、一級上の方が亡くなりました。掘っている所ではなく出入りしている所がくずれたようでした。私たちは別の場所で作業をしていて、「落盤（らくばん）坑内の天井や壁の岩石、土砂がくずれ落ちること―」という声で驚いて見に行きました。地質がシラスで、もろかったようです。最近、その現場を見に行きましたが、山はなだらかになっていて当時の様子は想像できませんでした。後に、遺体の引き取りはリヤカーだったと遺族の方が話されました。

そのころ、食料は親せきの農家より分けてもらっていました。五、六年生の頃は、田植稲刈り麦刈り等の奉仕もありました。学校の運動場や空き地には、すべてイモが植えてありました。終戦後は、早々に学校に通い始めましたが、教科書は、すみ塗りの表紙もない数枚の紙でした。

昭和二十年八月十五日に、「日本は負けたらしい」とのうわさを聞きましたが、「うそだろう」と思い信じられませんでした。八月十六日になると、「駅前に集合しラジオで聞いた」と、

他の人もみんな、敗戦のことを口にしながら家に帰っていました。

終戦後は混乱し、出征していた家族の消息が不明なことから、入隊年月日や場所などの書類を提出し、その後、二人の兄の戦死が市からの知らせで分かりました。長兄は召集兵で二十八歳の時にフィリピンのレイテ島で亡くなり、次兄は多分、十八歳で志願兵になり、二十歳の時にサイパンで亡くなりました。佐世保からサイパンへ渡った時、一緒だったという植木町の方が訪ねて来て話をして下さいました。入隊して間もなく軍かんをバックにした本人の写真が届き、亡くなってから、つめが井ノ口に嫁いでいた姉の元に送られていたようです。亡くなった時の遺品は他には何もありませんでした。

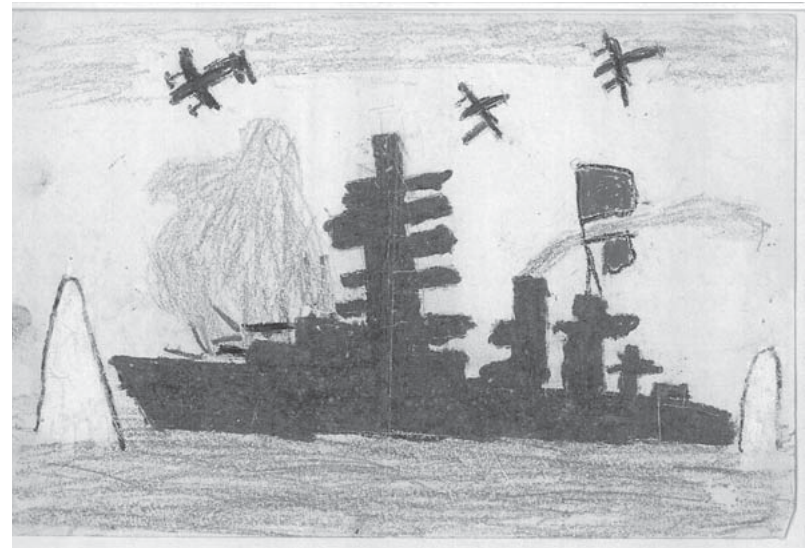
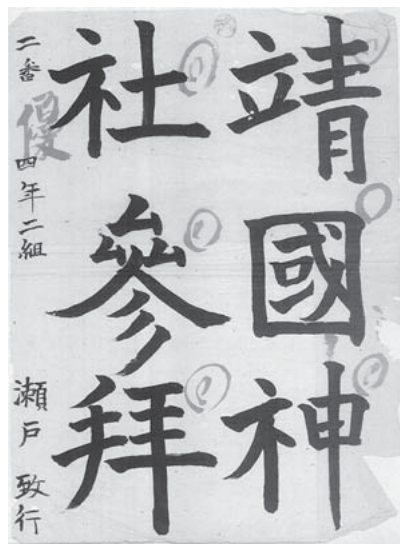
父は終戦前に病気で亡くなったので、このつらさを知らなくてよかったかもしれないと家族で話したものでした。

二度としてはいけない戦争

瀬戸 致行

昭和八年生（西間上町）

私は長崎市で生まれ、五歳のころは裁判官の父の勤務で博多に住んでいました。中国では



日本が戦争を拡大し、大陸に出征する前の兵士が、わが家に民泊したりしました。当時の子どもは、「大きくなったら兵隊さんになる」というのが当然で、天皇陛下のために戦争で死ぬのは名誉だと信じ込まされていました。しかし、私は戦争で死ぬのがこわい自分はずかしく思っていました。

小学二年だった昭和十六年、大阪市で大東亜戦争の開戦のニュースを聞きました。大人が万歳をとない、私たちも、この戦争は正しいので負けなと思いました。次第に食べ物や衣類が不足し、配給切符で買うようになり、母は宝石を供出。男は国防色というカーキ色の服を着てぼうず頭になり、女はモンペ姿でパーマは禁

止。「欲しがりません 勝つまでは」の精神をたたきこまれていきました。

昭和十八年、私は病気になり、都会では栄養がとれないため熊本市に移り休学。まだ、空襲がないところで、近所の青年が海軍兵学校の白の軍服で帰って来た姿にあこがれました。漫画映画でも戦争ものが数多く上映されていました。十九年、父の転勤で鹿児島市に転居。転校先は軍国主義の盛んな小学校で鉄棒、走り高飛び、飛び箱がよくあり、学校の指導で早朝に新聞配達をさせられました。

五年生になった昭和二十年四月、鹿児島市内に初めてアメリカの軍艦から飛んできた飛行機の空襲がありました。私たちの町の四つ角に大

きな爆弾^{ばくだん}の穴が空き、自宅の窓はめちやめちやに破れ、爆弾の破片が家の中の柱にまで刺さりました。自宅の防空壕^{ぼうくうごう}では心細くなり、一家六人で城内の大きな防空壕^{ぼうくうごう}へ逃げました。そこには、片足をもぎ取られた人や衣服が血だらけの人が運ばれて来ました。若い母親が赤ちゃんを背負い、「病院はどこですか」と聞きますが、赤ん坊は両耳から血を出し、ぐったりしていました。

わが家は母の実家の球磨村に疎開^{そかい}することになり、祖母と病弱な私が一足先に汽車で出発。と中、空襲で何度も停車しました。母の実家は温かくむかえてくれ、着いた日の夕方、雨戸を閉める大きな音におどろいた私が「空襲だ！」と外に飛び出すと、おばがなぐさめてくれました。

転校した学校では、初めて農作業を体験。雨の中での田植えがこわくなり、早引きしたのをはずかしく思いました。八月十五日、日本が負けたと知り、「なぜ、神風は吹かなかったのか」と不思議でした。後に、「神風」とは神風特攻隊^{とっこうたい}の若者のことだったのだと思いました。九月になり、私たちは人吉市の父の実家に帰りました。

戦後、一番苦しかったのは食べ物がなくて、白いご飯は高ねの花でした。麦ご飯にサ

ツマイモをたくさん入れ、フキの入った味のうすい味噌汁^{みそしる}などを食べ、サツマイモの蔓^{つる}、カボチャの花、豆^{まめ}のおから、食べられるものは何でも食べました。サツマイモ、カボチャ、ジャガイモなどは腹もちがよく、食べられるだけ食べると胸焼けしました。また、農家でない人は竹の子生活^{たけのこくらし}といって、着物や家具などを食べ物と交換^{こうかん}しに農家に行っていました。

二十歳^{はたち}にもならない若者が大勢亡くなり、戦後は国中が苦しく貧しい生活だったのは、身のたけに合わない戦争を始めた軍国主義の政治家たちの責任です。二度と戦争はせず、軍備も持ちたくありません。憲法を変えて徴兵制^{ちやうへいせい}を行うなど真っ平です。日本は昔から農耕民族であり、もっと農林業が栄える政策を考えるべきではないでしょうか。徴兵制の代わりに徴農制^{ちやうのうせい}をして、男も女も若者は二年間、農林業を経験してはどうか、と思っています。

奉仕作業と学徒動員の女学校時代

田 中 キクエ

昭和三年生（合ノ原町）

昭和十六年、私の女学校時代（今の一中、その後、女学校と人中が合併^{がっぺい}して人吉高校に）に太平洋戦争が始まりました。男の人はみんな出征^{しやうせい}して働き手がないため、農家へ田植えや



稲刈りほう仕に行き、とても喜ばれました。ほう仕作業がない時は学校用のカイモ作りで、授業はたまにあるぐらい。ほとんど勉強はしませんでした。

女学校四年の時、学徒動員で熊本市健軍の飛行機製作所に行きました。飛行機のびよう打ちや清そうをしました。が、県内外から百人くらい来ており、宮崎の人もいました。秋津に寮があり、一時間ほどかけて行き来していました。仕事としては、それほど大変ではなかったのですが、十月から卒業までその生活が続きました。

寮の食事は専門の人が作ってくれ、入寮の日だけは、ご飯にカイモが入ったおいしいものでした。その後は米にひじきや他のものがいろいろと

混ぜてあり、食べにくいものでした。食器は竹を切ったものを使い、日曜日の昼食だけはコッペパンを一個もらえました。家からいった大豆などが届くと、一部屋十人くらいで分けて食べました。一度は父がもちを持ってきて、みんなとても喜びました。一度だけ夜中にけい報が出て、防空ごうに入ったことがあります。寮の中でも気の小さい人はねる時もはき物（ぞうり）をはいていました。

昭和二十年三月、四年生の卒業式は他の学校の人と合同で迎えました。ただ、式の最中に空襲警報が出て、寮に避難すると、機銃掃射（機関銃などを敵をなぎたおすように広角度に発射すること）もあり、みんなやっと防空壕にたどり着きました。式の中でバラバラになり、とうとう卒業証書はもらえませんでした。

卒業すると、てい身隊（市町村長・町内会・婦人団体などの協力で構成されていた勤労ほう仕団体）に行くか、代用教員（旧制度の小学校で教えていた無資格教員）になるか、農業要員になるか、三つのうち一つを選ばなければいけません。実家が農業だったため農業要員を選びましたが、代用教員を選んだ人が多かったようです。三月に人吉に帰ってからも空襲警報があり、被害はなかったのですが、竹やりのけいこに行かなければなりませんでした。

そのころ、親せきのおばあちゃん一家が疎開^{そかい}してきて、おばあちゃんが買い出しに行きましたが米が手に入らず、子どもたちもカライモやカボチャの生活でした。都会から来られた方からか、砂糖を持っておられいただいたことがあります。戦争中は米を供出で全部出すので米農家なのに買って食べたり、沖縄の人が茶煎^{ちせん}り釜^{がま}を持ってきて米と交換したりしました。当時は着物を米と交換しており、他の地域から衣類を持ち込まれることが多くありました。終戦後、出征^{しゅっせい}していた兄と一しょに行動していた人から兄への香典が届きました。兄は生きているものと思っていたため、家族みんなでおどろきました。特に父は信じられなかったようで、小倉にいるその方を訪ねて話を聞きに行くほどでした。兄はマラリヤと栄養失調しうで亡くなったそうで、想像を絶する苦しみを味わったのではないかと、今度は父親がどうにかなるのではと思うくらい、なげき悲しんでいました。私も兄のことはつらかったのですが、父の身体も心配でした。何十年たっても戦争のことを思い出すと、あの時のこわさ、つらさがよみがえってきます。

卒業式の当日に受けた空襲

田 山 尚

昭和三年生（願成寺町）

昭和十九年十月三十日、私は熊本市健軍にあった熊本三菱重工業航空機製作所に入社。以後、三月まで五カ月間いました。

入社後、工場の中や飛行機の中を見学させてもらいました。その後は、製図やマイクロメーター（何百分の一の厚さの製品にする）の勉強、ハンマー打ち、ジュラルミンの板を継ぐびょう打ちの仕事をしました。私たちが作っているのは「飛竜」という飛行機の胴体部分で、爆弾を落とすところだと聞いていました。後からはジュラルミンが送ってこないため仕事ができず、何もしないと班長に叱られるので、ほうきを持って掃除をしている風にして過ごすこともありました。

寮でも女学校の担任の先生の授業があり、池斐研磨機という機械の使い方を習いました。八人ずつで教えてもらいましたが、加減によっていつまでも削れなかったり、削りすぎたりしてかなり難しかったです。機械の使い方まで習得して、生徒に教えなければならぬ先生



方も本当に大変だろうなと感じました。女性には難しい授業でした。

寮は秋津村（現在の熊本市秋津）に秋津寮があり、県内外の女学校の生徒が暮らしていました。靴がなかったため、配給されたゲタやぞうりばかりで会社と寮を歩き来していました。服装は、綿が入った防空頭巾、名前の横に血液型を記した救急袋、中にはハンカチ、ちり紙、包帯の代用になる長い布、乾パンを入れておくようにと指示があっていましたが、乾パンではなく、炒り大豆や生かゆでたカライモを干したものなどを入れていました。ですが、いつも食べ物はその状態でした。

防空壕掘りもあり、ただ地面を掘るだけのた

め、「たこ壺掘り」と呼んでいました。学徒動員日記は毎日、書いていました。夕方、私も含めた室長が日記を集めて先生に渡し、翌日は質問事項や気になる文に先生が朱書きで意見や感想を書いて返してくれました。

昭和二十年一月、神風特攻隊の隊員から女学校でい身隊（戦時中、勤労奉仕を目的に町内会や婦人団体、学校などで組織された）へ手ぬぐいが送られてきました。日の丸に「神風」と文字が入った手ぬぐいで、それまで白い手ぬぐいでハチマキをしていましたが、それ以後は送られたハチマキを締めて通勤しました。

【当時の日記より】

S 20・3・27（火）

人吉女学校第二十七回卒業式が早朝、寄宿舎面会室で学校別に簡単に行われた。

9 時 30 分 県下高等女学校の学徒全員寮庭に集合。

健軍青年学校講堂へ向かって行進。

健軍青年学校講堂にて合同卒業式開会。

厳かな中で式が始まり、県知事代理の力強い訓辞が始まって間もなく、後方でざわめきが

起こり、何の指示もないのに、ぞろぞろ講堂の出口へと動いているらしかった。前方にいた私が後ろを振り向いたときは、すでに半分以上の人が出口に向かって走っていた。

「空襲警報！ 空襲警報発令、全員待避」の声で式は中断。講堂から出た時、空が真っ黒に見えるぐらい多くのB29が地上三メートルくらいの低空を「ワーン!!」とすごい音で飛んでいた。皆、散り散りバラバラで走って逃げて行った。人吉高女みんながどちらへ行ったのか、どこへ進めばいいのか右往左往しているうちに「敵機来襲、伏せ！ 伏せ！」の怒鳴る声で思わず、道端の茶の木の中へ頭から突っ込んだ。間一髪のところ今、私が来た道にプスプスツと機銃放射の弾が地面に刺さるのが見えた。

低空飛行のすさまじい爆音で、何もかも分からなくなっていた。しばらくして空を見上げると、不気味な音を立てながら移動するB29の群れが見えた。「神様お助け下さい」といつの間にか手を合わせて拝んでいた。周りを見回したが、そこら辺にはだれもいなかった。消防団らしい人が一人、腰をかがめて走り過ぎて行った。

遠くで爆音が響き、また来るのかと思うとても怖かった。どのくらいだったのか、空襲警報解除となったが、みんな防空壕のたこ壺めがけて田んぼのあぜ道を走って行くので、自

分もついて走った。命からがら三人入りの壺に飛び込んだ時、先に入って泣いている二人を見て私も泣き出しそうになった。二人の名札を見たら阿蘇高女の生徒さんたちだった。ようやく我に返った時、あたりは静かな田園風景で何事もなかったかのようにだった。たこ壺から出て、畑やあぜ道を通り、やっと秋津寮にたどり着いた時は、正午を過ぎていた。

部屋に帰り、みんなの顔を見るなり、手に手を取り合って無事を喜びあった。どの部屋も騒々しく、空襲の話で興奮していた。翌二十八日には帰郷することになり、夜は荷物の整理と準備に遅くまで忙しかった。五カ月間お世話になった秋津寮とも、いよいよお別れと思うと嬉しさと寂しさが交錯した。

*

*

*

卒業後は三つの中から一つを選んで仕事に就くことになっていました。助教(代用教員)か、病気をしているか、一家の大黒柱(男性が戦死された家庭など)は帰郷が許され、てい身隊はそのまま残ることになっていました。卒業式当日の空襲で、私はついに卒業証書はもらわな

いままになつてしまいました。

忘れられない悲惨な東京大空襲

田山 光 則

昭和二年生（西大塚町）

昭和十二年七月七日、支那事変が発生。昭和十六年十二月八日、ハワイの真珠湾攻撃が行われ、大東亜戦争（第二次世界大戦）が始まりました。「米国及び英国に対して宣戦を布告する。真にやむを得ざるものなり」。昭和天皇のラジオからの声を学校（現在の人吉高校）の講堂で聞いたのは、私が中学三年生のころでした。昭和十四年、尋常小学校大塚ひぞえ分教場に五年生まで通い、六年生の時、先生の勧めで人吉中学へ。下青井町にあったお宅に下宿して通っていました。

三年生ごろになると戦死者の帰省が増え、人吉駅までお迎えに行き、駅から産交交差点（現在の青井交差点）にある病院の前まで道路の両端に並び、ラッパ隊、町長、戦死者の行列がゆっくり歩かれるのを、「英霊に黙禱」と頭を下げて見送りました。隊が通る間は頭を上げてはいけません。先生の中からも何人か出征されました。

奉仕作業で、免田付近まで麦刈りに行ったことがあります。戦死した方のお手伝いで、勉強より奉仕作業が楽しみなこともありました。自宅も農業をしていたので家に帰れたこと



もあります。また、家の敷地が広がったため、戦時中は京都から来た兵隊さん二十人ぐらいが寝泊まりされていました。食べ物が高額で、食料が不足していたので、家にいい食べ物があると分けてあげました。

昭和十六年十二月八日から戦争が激しくなりました。昭和十九年三月一日に卒業予定でしたが、一月六日に仮卒業して東京へ。東京築地にある海軍水路部へ配属され、横須賀の海兵団で三カ月間の訓練を受けました。航海学校では、航海訓練、運航技術、電波での水深計測、船の位置を確認する勉強などがありました。二月から三月にかけて、空が黒くなるほど多くの編隊でB29が来ました。日本の飛行機が一機突っ込み、

すぐ真っ黒になって落ちていくのを目撃しました。

昭和十九年八月、毎日のようにB29の空襲を受けました。決まって午後三時ごろ、空襲警報のサイレンが鳴ります。そのころは、ただ逃げるだけの戦争で、すぐ防空壕に入っていました。あまりに空襲があるので勉強にならず、東京から伊豆半島の戸田へ移動して訓練がありました。二十人から三十人が移動したと思います。

九月か十月には本部に呼び戻され、静岡の沼津、三津、相模湾で航海術を勉強。上から戦争の情報は知らされず、割とのんびりと訓練を受けていた気がします。そこには私たち以外にも兵隊が何百人といて、海辺に穴を掘り、海に線路を引いて特殊潜航艇が海に出る準備をしていると聞きました。その特殊潜航艇に、訓練を受けている私たちが乗り、海に出なければならぬと言われていました。

重要な任務が計画されていたためか、昭和十九年、十八歳で一等陸尉の称号が与えられ、給料もよく洋服も新しい物をいただき大変、待遇が良かったです。そのころは他では考えられない銀飯（白米のご飯）が出され、付近の人からは魚の差し入れをバケツでいただきました。八月十五日まで、そこで暮らしました。

沼津が空襲を受けた時は、夜中の十時から十一時ごろに飛行機から焼夷弾（都市や建物などを焼き払うことを目的とした砲弾または爆弾）が落とされ、真っ赤な弾が下でパーツと花火のように飛び散るのがきれいに見えました。後で見に行くと、畳一枚に一個くらいの割合で不発弾が落ちていましたが、幸い人への被害は少なくて済みました。

昭和二十年三月、「十一日十二時に東京本部へ集合」の知らせが来ました。今回の召集は何かあると感じ、前日に皆それぞれ近くの親類や知人にあいさつに行きました。私は吉祥寺の叔父を訪ね、叔父はイカの塩辛とお酒で歓迎してくれました。その際、私に何かあったら人吉につめと髪の毛を届けてくれるよう依頼しました。「大和魂をもって天皇陛下のために命を捧げる」という教育を受けていたため、「自分の命は長くない」と死への恐怖はありませんでした。三津にいる時、仲間が銃撃を受けて亡くなっても、「俺も後から行く」という気持ちでした。

三月十日の夜は叔父の家へ泊まり、午前零時に「光則、大変！」と叔父に起こされました。東京大空襲です。東京が真っ赤な火の海になっているのが見えました。すぐ東京に向かいましたが、いつもは電車で一時間で築地に到着するのに新宿までしか電車が行かず、芝区付近

から神田、有楽町を歩いて築地に向かいました。街中は焼け野原で、真っ黒になった男女の区別もつかない遺体がたくさんありました。夜通し歩き、本部に着いたのは昼の十二時ごろでした。

大空襲^{くうしゅう}の直前の昼間、米機がビラを撒き、「十二時に空襲^{くうしゅう}する。命が惜しい人は皇居に集まっておくように」と予告があつたらしいのですが、だれ一人信じず避難していなかったため、何十万人の方が命を落としました。予告どおり、皇居は狙われていませんでした。三津へ戻るように言われ、品川までは電車、品川からは山越えて二日かかって到着しました。ここでも敵を迎え撃つ訓練を受けました。

八月六日、広島に黒い雨が降ったと聞き（原子爆弾^{ばくだん}だと後で知りました）、八月九日、長崎にも原爆が落とされました。このままでは日本全土が焼け野原になると思い始めた八月十五日、ラジオの前に集まるよう指示がありました。天皇陛下の玉音放送なのにガーガーと音が入って聞き取れず、ラジオをたたいたりしましたが、何を言われたのか分かりません。後になって無条件降伏したと聞きました。

その直後、「米兵が上陸するから家に戻って待機せよ」と命令を受け、自分の荷物を持ち、

漁船のような船で沼津駅まで送ってもらいました。駅は復員兵などでごった返し、身分証を見せると兵隊は優先して列車に乗れます。石炭で走る汽車で、トイレ付近から飛び込むようにして乗りました。広島まで来ると焼け野原で、原爆でつぶれたらしい建物も見えました。広島からは線路を歩き、知らない人同士で、これからどこに行くのかなど語りながら歩きました。

宿舎を出る時にもらった二、三升（しょう）の玄米のお陰で、米と交換で民家に二泊させてもらい、大分に到着しました。鹿児島本線は不通で、豊肥線に乗りたり歩いたりしながら八月三十一日に真幸駅に到着。そこで地元の人たちが話す九州の言葉を聞き、やっと安心しました。列車の乗客は兵隊は少なく、一般の人が多かったようです。乗り切れない人は屋根にまで乗っていました。九月一日昼ごろ、人吉駅に到着。町がガラーンとしているという印象を受けたものの、すぐに下宿していたお宅に行くと、「よく戻った！」と泣いて喜んでくださいました。

あと半年でも戦争が続いていれば、私の命はなかったと思います。私より一歳以上、上の人は戦死された方が多く、年齢が低かったことで生きて戻ることができ、運がよかったとい

えるかもしれません。大塚地区でも四十五人いた青年の中から数名が欠けました。三月十日の東京大空襲の悲惨な様子は、今でも一番、記憶に残っています。

武器も食料も薬もなく歩き続けた戦場

築地 堅

大正十五年生(北泉田町)

昭和十九年一月、十七歳で志願兵として入隊し、中国に渡って初年兵教育を受けました。まず、戦死した時に家に送る写真をとられ、髪やつめなど遺品になる物を残し、手紙を書いて家に送りました。私のような十代の志願兵は少なく、ほとんど徴兵の兵士でした。中国からベトナム、さらに軍の船でメコン川を下ってタイへ行きました。ベトナムではフランスを開の集落(フランス人が住んでいた場所)へ。庭園やしばふのきれいな一般住宅で二週間ほど滞在しました。

私たちが出征した時は負け戦が目に見えていて、武器も小銃^{じゅう}だけ。飛行機の爆弾^{ばくだん}にかなうはずもなく、ただ逃げるばかりでした。若い私は時々、母親の顔がフツと浮かび、何とか生きて帰ろうと思いましたが、四十歳代の家族持ちで絶望して命を絶つ人もあり哀れでした。



私の隊は戦うことはなく、先隊が戦った後をついて行く形でした。中国では、民家の米や絹などを略だつしたり女性に乱暴することもあり、そのつらさから手榴弾^{しゅりゅうだん}で自殺する人もいました。亡くなった人の服は中国軍のスパイに悪用されないよう宿営で焼きました。道路を歩くと敵にねられるため、夜に田んぼのぬかるみの中を移動しました。またがすれて皮膚がめくれましたが薬もなく、粉末の歯みがき粉をぬって歩きました。

当時は手榴弾^{しゅりゅうだん}も行き渡らず、私に渡された銃^{じゅう}のたまは二発分のみ。ほりよになったら、それで死ぬよう教育されていました。一日に約四十キロ歩いて移動しましたが、初年兵は休けいで

も上官の食事の世話などに追われます。私は一番年少なので移動時は六十キロもある背のう（軍人や学生が物品を入れて背に負うかばん）を背負いました。中身は米や粉末のしょう油、みそ、上官と自分の着替えなど。水とうには上官がお茶でなく焼ちゅうを入れていたため、私たちはお茶もあまり飲めず、地面をスコップで掘って、ため池の水を飲みました。洗濯もため池の水で洗いました。

アマーバ赤痢せきりやマラリヤなどの病気もありましたが、軍医は一番後ろの隊にいたため、各中隊の衛生兵が手当てをしました。ケガをしても粉末の赤チンキがなく、手りゅうだんの破片が右手中指に入った時はえぐって取り出してもらいました。今でも指は曲がったままです。同年兵の死が一番つらく、手首か指を焼いて骨を持ち帰りました。人を焼くのも初年兵の仕事で、遺骨として帰れる人は恵まれている方。ほとんどは石ころや他人の骨が戻っていたようです。

韓国から中国に向かう時には、バツ缶（バケツ）のご飯が凍こっていました。水を汲むにもこおったクリーク（水路）をつるはしで割っていました。一、二度、い問ぶくろ（出征兵士などをなぐさめるため中に娯楽物・日用品などを入れて送るふくろ）が届き、母親のあくまきは

外はかびていても中身はおいしく食べられました。米俵にはし箱のふたを突っ込み、生米を食べたこともあります。

終戦で家に帰ると、戦死したと思っていた息子が現れたため、母は相当おどろいたようでした。ベトナムから出した手紙も届いていなかったのです。わが家は兄弟四人全員が戦地から生きて戻り、本当に珍しいケースとなりました。昨年、同年兵で、もう一人の生き残りだった枕崎の方が訪ねて来られ一晩中、話がつきませんでした。

空襲警報で駆けつけた学校

築地 美津子

昭和三年生（北泉田町）

昭和十九年、女学校では麦・稲刈り、カライモ用の土地の開墾など奉仕作業がほとんどで、「きつい」などと言葉に出さうものなら厳しく注意されました。手榴弾しゅりゅうだんを投げる練習としてカシの棒を投げたり、なぎなたの稽古などもしました。

卒業と同時に東小学校の教員になり、昭和十九年三月に学校で空襲を受けました。私は、サイレンが鳴ると学校へ駆けつけ、校舎の窓を全て開けるのが役目でした。靴のない時代で、



普段はわらざうりで通いましたが、雨の日にゲタで行ったところ、「ゲタを履^はいていては子どもたちを助けられない」と校長先生からひどく叱られ、それ以来、霜柱が立ったり道が凍ったりしていても裸足で出勤しました。

校内には、御真影^{ごしんえい}(天皇陛下の写真)が置かれた奉安殿^{ほうあんでん}があり、出入りの時に最敬礼していました。恐れ多くて人が近寄れないことを利用してか、厳しい食料事情の中、あるはずのない砂糖が隠してあるのを見たという話も聞いたことがあります。写真は四大節(一月一日元旦、二月十一日紀元節、四月二十九日天皇誕生日、十一月三日明治節)の時だけ、講堂(体育館)の奉安殿に移されていました。普段は、教室で授

業の前に「東方遥拝^{とうほうようはい}(東の方向の天皇陛下に向かって遥か遠くから拝むこと)」の掛け声の下、千八百人の先生、生徒が最敬礼の姿勢を取り、教壇の写真に注目しながら君が代を斉唱。斉唱中は鼻もすすってはいけないと言われていました。

運動場には防空壕^{ぼうくうこう}(空襲の際に待避するため地を掘って作った穴)が掘られ、内部は置四枚を縦に並べたくらいの長さで、入り口は丸太と土で隠してありました。四月のある日、日本の飛行機の音とは違う、キーンという金属音が聞こえました。グラマンという航空機で、早朝だったため生徒はおらず、職員だけで防空壕^{ぼうくうこう}に避難しました。避難の際は、腹は地面から離して四つんばい(爆撃を受けた時に内臓が飛び出さないように)、目を押さえ(目が飛び出さないように)、耳をふさぐ(鼓膜が破れないように)と言われ普段から訓練していましたが、生徒が避難したことはありませんでした。

人吉高校付近にはカライモを植えてありましたが、高校を軍関係の建物と間違ったのか、飛行機から機銃放射を受けたことがあります。自宅のカライモ畑も機銃でバラバラと撃たれ、その時、機内でニヤニヤと笑いながら銃を撃っている女性兵士の顔も見えました。後に、人吉高校の校舎に弾が当たった跡が見つかり、自宅の畑だった敷地からは薬莢^{やつきょう}(弾丸を発射

するための火薬を詰めた容器）も出てきました。錦町木上の柚留木地区では、飛行機を見ようと外に出た子ども兄弟二人が機関銃放射で死亡しました。当時は国民にアメリカやイギリスを「鬼畜米英（鬼や畜生のよう^{きちくべいえい}に残酷な人間）」という言葉で教え込み、新聞などでも使われていました。

その後、西小学校に勤務していた時は、一日と十五日に全員で歩いて青井神社へお参りに行き、戦地の兵隊さんのために武運長久（運が強く命が永らえること）をお願いするのが恒例でした。女子全員で千人針（布に女性が赤い糸で一針ずつ縫って千個の縫い玉を作った物。普通の人は一針、寅年生まれの人だけは自分の年齢の数を縫い、千人の力で応援するという意味がある）を縫い、兵隊さんがその布を腹に巻いて出征して行きました。

靴や米、衣類は政府による配給制のため自由に買うことはできず、割り当てられた切符を持って行くと優先で買えました。実家は農家でしたが、働き手がなく収穫が少なくても反数に応じて供出（きょうしゅつ・政府から割り当てられた量の農産物を差し出すこと）をしなければならず、家に残る米はわずかばかり。家族十八人の食事は、みそ汁に米粒が泳いでいるようなものでした。二歳^{がくとどういん}違いの弟は学徒動員（太平洋戦争時に労働力不足を補うため学生・

生徒を強制的に軍需工場などで働かせたこと）で福岡の軍事工場に行き、栄養失調になり帰ってきました。総合病院に入院しましたが薬や注射も元氣をつける食べ物もなく、夜明けを待ってやっと牛乳を手に入れました。同じ病室の八人全員にも、おすそ分けしなければならず、一本の牛乳を一口ずつ飲み、イワシー匹も八等分しました。学徒動員から同じ症状で帰って来て亡くなったのは、弟で十八人目でした。

国民の心をズタズタにした戦争

土屋 歳明

昭和八年生（矢黒町）

私は自営農の父の末っ子として生まれ、家族は父・母・兄・姉と使用人の七人でした。六歳上の兄は、小学二年か三年の頃、八代の松田農場に一年間農業の勉強に行きました。

昭和十四年四月、西瀬小学校に入学しました。支那事変頃からだんだんと国民の暮らしは物不足になっていき、小学校に入学したものの靴がなく、兄や姉のお古を履いて通学していました。靴下などの衣類も配給制で、三十人のクラスで二十足が割り当てられるぐらいで、冬でも靴下も履かずぞうりを履いていたこともありました。また、足中（つま先だけのわらじ）

を履いている子どもいました。

一年生の時は男先生でしたが、二年生になると、男先生はすぐ召集されて女学校卒の代用教員が多くなりました。家では八代から帰ってきた兄の農業の手伝いをしました。鋤で畑を耕すのは子どもの身体にはとてもきつく、毎日よく鍛われました。

昭和二十年四月、人吉中学校に入学しました。入学したものの授業らしきことはなく、毎日分散して作業にあたりました。一カ所にまとまっていると爆撃されるという理由からで、それぞれの地元に戻って人手がなく困っている農家の手伝いをしました。私も西瀬校区の農家の手伝いをしました。夕方になると、「明日はどこどこに集まれ」という具合でした。

人吉上空にもアメリカの敵機が飛来していました。ある日、学校の帰り空襲警報が鳴り、すぐ道端の溝に体をうずめました。空を見ると高ん原の方角から飛行機が何機も飛んで来ていました。矢黒の球磨川沿いには海軍の療養所(現・国民宿舎)があり、そこを目がけてグラマン機が機関銃で撃ってきたことがありました。矢黒に住んでいた私は、その様子を目の当たりにしてとても怖い思いをしました。その頃は何十機ものB29が北の方角に編隊で飛行し、「今日はどこに飛んで行くのだろう」と、怯えた日々を送っていました。

夏休みになり、いとこと叔父がいる宮崎県村所の発電所に行きました。湯前まで汽車で行き、その後は山道を七、八時間歩きました。ちょうど発電所に到着した時、天皇のお言葉を聴きました。村所はラジオの電波状態が悪く聴きづらかったのですが、「戦争に負けた」ということは理解できました。戦争によって国民の心はねじれて、ズタズタになって、平常心はなくなっていたと思います。それで、「もう、空襲警報や飛行機の爆撃に怯えなくもいいんだ」と思いました。

終戦後一カ月もしないうちに、高ん原にアメリカ軍が進駐して来ました。住民の中には、旧日本軍の食料や衣類を奪い合う人たちがいたと聞きました。そのようなことがあっても、もともと根はいい田舎の人たち、治安は悪くなかったのでアメリカ軍の駐留も長くは続かなかったです。

旧制人吉中から人吉高校になった一年生の時、十九歳で志願出兵した兄の遺骨がシベリアから帰ってきました。私は父と人吉駅まで迎えに行きました。父は、亡くなった兄と一緒に農業をすることを楽しみに待っていました。兄が亡くなってしまい、父は私に「一緒に農業をしないか」と申し出、そして、皆の前で宣言するようには言いました。私は突然のことでは

くりしましたが、後日、集ってくれた百人ぐらいの人々の前で「兄が亡くなった今、私が父と一緒に農業をします。よろしく願います」と挨拶しました。人吉高に通学しながらでは農業に専念できないので、六カ月後、退学しました。

農地改革で一町二反あった田畑が八反になりましたが、私は父と農業に専念し二十歳で結婚、四人の子どもを授かりました。国民の心をズタズタにする戦争はもういやです。

勉強や進学もかなわなかった戦時下

津茂谷 マサ子

昭和三年生（南町）

昭和十二年、支那事変が起こり、十五年、人吉高等女学校に入学。翌年の真珠湾攻撃で戦争状態になりました。三年生になると敵国語の英語は授業が廃止に。音楽の授業はドレミでなく「ツエ・デー・エーグ」とドイツ語で発音、「ぼたるの光」もスコットランドの曲で歌えず、美術の時間は運動場で敵と戦う訓練をしました。

出征で男手が足りず、勤労ほう仕でたびたび農作業の手伝いに行きました。授業や勉強の時間はあまり取れず、四年生ころには講堂にミシンが何台も持ち込まれ、軍服のほう製や

修理を行っていました。家庭科では、炊き出しの練習や負傷者を移動する担かの使い方、体育では陸軍将校による分列行進、なぎなたの練習など行いました。こんな状況のため、修学旅行や運動会はありませんでした。

昭和十九年三月、人吉高女を卒業した百人近くが、国家総動員法（戦時に国防目的で政府が人や物などを統制、運用すること）で人吉高女でい身隊として熊本の三菱重工熊本航空機製作所へ。残りの五十人は人吉球磨の助教に配置されました。教員の道を選んだ私は同級生五人と小学校に勤め、私が担任したのは高等科一年の女子でした。年の差は二、三歳で、「先生」と呼ぶには心もとなかったに違いありません。生徒たちも戦争で大きな痛手を被っており、沖縄から疎開してきた戦争孤児の女の子が「私はこれからどうやって生きていけばいいのですか」と言ってきたときは、言葉が見つかりませんでした。

昭和二十年ごろには毎日のように警報が出て、分散教育を開始。各町内のお寺や公会堂に二十人ほど分散する授業で、警報が出ると生徒を帰宅させ学校に駆けつけました。たとえ夜中でも教職員は学校に急行し、奉安殿の御真影を守るよう命令されました。校門に走りこむと、仁王立ちの校長先生に「ただ今まいりました」と報告。出産間近の女性の先生が暗

い所で涙を流す姿もありました。

校庭にも防空壕^{ぼうくうごう}が作られ、警報^{けいほう}が出るとそこに集まり、先ばい職員が戦時中の教員の心構えや、子どもたち、保護者とかかわりを話してくださいました。また、師はん学校卒の女性の先ばい方が放課後に時々、女教師の会を開かれ、十六、七歳の私たちにあって、その話は新せんで心を揺さぶるものでした。言論統制^{げんごんとうせい}（＝思想の表現、報道、出版の内容に対し国などが調べて内容を制限すること）が厳しく、ふだんは口にできないことも自由に聞けました。後の平和な時代の教員の基礎となる貴重な経験でした。

終戦で学校にも復員軍人が帰ってきました。軍服姿で出勤し職員室での口論に軍刀を抜く場面もありました。助教採用の同窓生も次々と辞める中、「何とか教員免許状を」と、講習会や通信教育で単位を取り資格を取得。その後、結婚して二人の子育てを教員の夫と、共かせぎで乗り越えられたのも、苦難の時代を過ごしたからだと思います。戦場に散った軍人、空しゅうや原爆^{げんばく}のぎせいになった方々の苦しみ、悔しさとは比べられませんが、正常な学校生活も進学もかなわず、戦争こ児を生んだ現実などを思うと、二度と悲惨な歴史をくり返さないよう、永遠に平和な社会が続くことを願います。

父の戦死後、母子二人でけん命に生きる

徳田清則

昭和十六年生（西間下町）

「こいが最後かもしれんじやっど、よお見とっきやい」。鹿児島で父の出征を、おばにかえ上げられて見送りました。一つちがいの弟は母がだいており、鹿児島駅に向かう電車の線路が二本、白く光っていました。弟が生まれてすぐのことで、私はまだ二さいになっていませんでした。でも、この光景は記おくの奥底にせん明に残っています。この時、母は二十三さいだったと聞いています。

ほどなく、鹿児島は空襲^{くうしゅう}で危ないとのことで、おじ夫婦と一緒に人吉へ疎開^{そかい}しました。それ以来、私たち親子は母の生まれた人吉の家で過ごすことになりました。空襲警報^{くうしゅうけいほう}のサイレンが鳴ると庭先の防空壕^{ぼうくうごう}に逃げ込み、庭に実だんの列がプスプスツと不気味な音をたてました。高原飛行場の方から、アメリカの飛行機の低い音と激しいばくげき音が聞こえると胸さわぎがしたものです。

終戦で生活は少し落ち着きましたが、私は疫痢^{えきり}になりました。こわい病気だと知らされ自



分でも気をつけていましたが、弟に感染して亡くなりました。私のせいで弟が亡くなったの思いに、時がたってもさいなまれます。私にとつての戦争はまだ終わっていません。

母はある時期に洋裁学院で学び、洋装店で働き始めました。母の実家のはなれで母子二人暮らしの中、引きあげ者（外国を引き払って本国に帰って来た人）の列車が着くと聞くと、母は赤飯をたきました。父は戦死したと言われていても、もしかしたらという期待がありました。赤飯は、私たちにとって特別の意味を持つ父の味であり、ちよつとはろ苦しい思い出もあります。

学校へ行く年になると、戦争遺児として周囲が温かく接してくれました。自宅近くの先生が

一緒に下校してくださったり、靖国神社参拝団に加えていただいたりしました。学校から帰ると、まきでご飯をたき母を待ちました。中学生になると、経済的理由から母は徹夜仕事をするようになり、そんな時は私が弁当を作って洋装店へ運びました。日々の暮らしは楽ではなく、母は夜中遅くに帰って朝の支度をしました。生きていくのにけん命でした。

私が受験勉強するころになると、母はコーヒーを入れてくれました。インスタントはない時代で、ひいた豆のドリップコーヒーは苦かったけれど少しリッチな気分でした。たまの外食で、「今日はごちそう」と、おじに「チャンポンを食べた」と言ったら笑われたものです。苦しい家計を思うと学費の話を切り出すのは気が引けました。中学校のクラブ活動で物をこわして先生から弁しょうを求められ、「お金がありません」と言ったら、厳しくしかられませんでした。将来、自分の子どもには貧しい思いはさせまいと心にちかいました。

後になって、父が戦死したニューギニアの慰霊友好親善訪問団に加わったことがあります。美しい島だけに、戦とうがあつたことに、い和感を覚えました。近年、硫黄島で戦う日米両軍をそれぞれ別々に描いたアメリカ映画の二部作を見ました。父の戦地と重なり、胸がつぶれる思いでした。くしくも、その映画のかんとくは、「彼らは祖国のために命をささげた」

と話しています。退職後の私は今、地域社会のためには思い公民館で働いています。

終戦前後にソ連の収容所へ

那須 信 敏

大正十三年生（上青井町）

私は満州（中国の東北部）の奉天（現瀋陽）で、三人兄弟の長男として誕生。父親は熊本薬学専門学校を卒業し、薬品関係の仕事で早くから満州に移住して商業を営んでいました。昭和十六年、私は奉天第一中学校を卒業し、満州医科大学付属薬学専門学校に進学。戦時体制が厳しくなって、昭和二十年三月の卒業予定が十九年九月にくり上がり、召集されて満州と朝鮮の国境近くにいた部隊に入隊しました。

その時は薬学専門学校の同期生四十人前後が召集されましたが、満州各地に散ってその後一度も会えませんでした。部隊では軽機関銃きかんじゅうの担当で訓練を受けましたが、射撃き訓練はなく、ただ担いで走る訓練ばかり。ある日、深い雪に足を取られてたおれ、機関銃の一部がこわれてしまいました。いつもの数倍顔をなぐられ、二、三日は口が開けられず、ほとんど食事ができなかったほどです。



昭和二十年、幹部候補生になるための受験で、部隊から一人、牡丹江ぼたんこうの会場まで行きました。五、六月ごろ合格の連絡があり、新京（現長春）の教育隊に入隊しました。途中、一日か二日、休みがあり、ハルピンに住んでいるいとこの家に遊びに行ったことがあります。それから何日かして、奉天の両親が新京まで面会に来ました。私からは何も連絡していないのと思ったら、いそこが親に私の居場所を連絡してくれたそうでおどろくやらうれしいやらの気持ちでした。

八月九日、ソ連（ロシアの前身）が日本に戦争をしかけて満州にしん入してきました。新京の部隊は列車で南へ脱出すると聞き、奉天へ行くのかと思っていたら四、五日後に着いたのは朝鮮

の平壤^{ピョンヤン}でした。ここでは中学校の校舎に軍医・薬剤師などが中心となって病院を開き、治りように当たりました。しかし、数日後にソ連軍によって全員、収容所に入れられました。そこで全員を健康な者、病弱な者に分けることになり、私もその仕分けに当たりました。しかし、その仕分けは特にしん察して行うものではなく、ただ見た目で健康・病弱と分けただけ。私は当時、大変やせていたので最後に病弱の方に入りました。

病弱とされた組はまとめられ「トウキョウダモイ」（東京へ帰る）と言われ列車に寄せられました。帰るなら東海岸の港のある元山か清津へ行くかと思ったのですが、そうではなく朝鮮とソ連国境近くで降ろされ、二カ月ほど足止め。十月か十一月になったところ、そこから何日も何日も歩き続け、国境をこえてソ連領へ入り、着いたのはナホトカでした。当時のナホトカは単なる砂浜の続く海岸で、それから帰国する昭和二十二年四月まで、港を作る作業が続きました。服は同じ物を着たまま。風呂は時たまドラムかんを利用したもので沸かしたようですが、私はほとんど入りませんでした。

昭和二十二年四月に帰国することが決まり、四月十七日に舞鶴港にとう着。両親たちがどこにいるか分からなかったので、心当たりを考え、愛媛県で製材業をしている親せきを思い

出してたよって行き、製材所で働きました。昭和二十三年に両親が人吉に帰っていることがわかり、ようやく本当に親元へ復員することができました。

動員学徒で県外の飛行機製作工場へ

西 峯 多木次

昭和四年生（東間下町）

昭和十七年、私は人吉中学校に入学し、十九年十月に中学三年生で学徒動員されました。人中の生徒は三つに分かれ、御船中、宇土中の生徒と合わせ百人ほどが行くことになりました。服装はドンゴロス（粗末な生地）の制服と戦とう帽、足には脚絆^{きゃはん}（Ⅱ旅行や作業の時、すねにまとってひもで結び、動きやすくする布）を巻き、多良木のえびす祭りの日に青井神社に集合。お参りをして、臨時列車で長崎県大村市の第二十一海軍航空廠^{（こつくしやう）}（Ⅱ飛行機製作工場）へ向かいました。

動員先では大村寮^{（りやう）}という寮に入り、部屋では毛布の並べ方が悪いと何回もやり直しをさせられました。工場へは寮から隊列を組んで歩いて出勤。戦とう機の部品を作るため、海に見える野外でハンマー振りの基そ訓練を受けました。動員五日目の十月二十五日、B29が七、

八機飛んで来て大空襲を受け、工場は一しゅんにして火の海となり、御船中と宇土中の生徒十数人の死者が出ました。寮にも爆弾が落ちていて、ガラス窓はメチャメチャでした。

十一月九日、福岡の雑餉隈の九州飛行機会社に移り、薬院の昭和寮に入りました。ここでは毎朝、朝食前に裸で駆け足をして住吉神社まで行き、参拝。帰りは柳橋の上で、「カシラ右カシラ右〜」と寒さに震えながら号令の調整がありました。朝食はコーリャン飯一杯。兵隊は山盛り、他の者はすり切りの盛り付けで、もみガラが多く入ったご飯でした。

工場までは電車通勤で、母が作ってくれた、だれよりも大きい防空ずきんが暖かでした。駅から工場までは「ここはお国の何百里〜」と歌いながら行進し、「大きな声で歌え!」「元氣を出さんか!」とどなられました。この道すがら、阿久根女学校の生徒に会い、日の丸はち巻きの赤が印象に残りました。

職場では、ハンマー振りや、やすりをかける仕事を、もくもくと行いました。やすりかけが済むとマイクロメーターで計測。誤差は0.3ミリ以内と決められ、できないとビンタをもらうこともありました。かじ仕事の募集があり、わが家がかじ屋だったので申し込んだら友人と二人で当たりました。この仕事は冬場は暖かく、重労働のため特別におにぎり支給され

ます。ある日、なました鉄を切った時、破片が飛んできて、くちびるの下を切り四針ぬったことがあります。仕事中のけがという扱いで休みが取れました。

ひもじい、腹がへった、食べたい。毎日、こんな思いの中でたえていかねばなりません。お風呂は一週間に二回。みんなの体は栄養失調と病気で青白くやせて、あばら骨が何本も見えていました。布団は綿が固まって足が冷たく、眠れません。やっとぬくもったころには朝で、服にはシラミがわき、かゆくてたまりませんでした。

親は面会の時にリュックいっぱい食料を持って来てくれました。近くの食堂で母や姉たちと会い、みんなが寝てから布団の中で、もらった、かたいもちをかじります。こんなにおいしいものがあるのかと思いました。昭和二十年三月、病気で三泊四日の休みを取り帰宅しましたが、そのまま床に就き、養生しているうちに原爆と敗戦のニュースを聞くことになりました。

軍国主義の下、受けられなかった授業

野 中 藤 夫

昭和八年生（西間下町）

私が四歳の時、支那事変で父が戦死しました。昭和十五年、支那事変の終結前後に小学校に入学。勝ち戦だったためか割と平和な感じでした。昭和十六年十二月八日、二年生の時に第二次世界大戦が始まりました。昭和十六年から十七年ごろまでは戦況がよかったせいか、あまり生活の変化は感じられませんでした。日本軍がシンガポール付近まで南下を始めたころから、戦いは下り坂になっていったようでした。

しかし、庶民にはあくまでも日本は勝っているという情報が流されており、昭和十七年から十八年の初めのころまでは、先生たちからも勝っていると伝えられていました。その後、戦況は危うくなっていき、東京が大きな爆撃を受けたのも、十八年ぐらいだったと思います。

昭和二十年三月、春の彼岸のころ、高原飛行場が攻撃を受けました。当時、春と秋に大掃除をしていましたが、四月の掃除を始めたころに人吉は来襲を受け、駅通りが機銃掃射されました。四月十二日から十三日ごろだったと思いますが、南町に営林署の貯木場があり、そこに飼われていた馬が顔を出したため、兵舎と間違えられて掃射されたとも聞きました。



当時は分散教育で、公民館で授業を受けていました。学校は閉鎖されて軍の駐留に使われており、講堂は武器の機材置き場、教室は兵士の宿舎として使われていました。村山、西瀬、西間上の三カ所に横穴防空壕ぼくくうこうがあり、万が一に備え兵士の連絡所として本部（通信）が置かれていました。空襲警報時くうしゅうけいほうは、役所からサイレンが鳴らされ、各町内には電話連絡が入られました。各地区に防空連絡の係の人がおり、メガホンで空襲警報や夜は消灯を促していました。戦争に行っていない男性で組織を作っておられたようです。

終戦までは、学校からも少年航空、少年海軍として高原に訓練に通い、足袋にわらぞうりば

きで、朝四時三十分ごろから出かけていました。高原に飛行場を作る時には、母たちも奉仕作業として行っていました。また、大畑紫笠には軍用道路が作られ、それも奉仕作業によるものでした。「米軍が沖縄を占領したら次は鹿児島上陸だ」と言われており、鹿児島へ軍事用品を運ぶための道路で、紫笠から加久藤へ続くトンネルのない峠道でした。軍用道路のため勾配をつけ、車が通れるように作っていましたが、完成したのか実際に使われたのかは不明で、現在はループ橋として生まれ変わっています。

小学四年生から分散教育となりましたが、食料増産、馬草刈り、カライモ作りなどで授業は全く受けていません。河南中学（現人吉一中）の二年生の先生から、「昭和八年生が一番ぼんくら」と言われたことがありましたが、本当に六年生まで何も勉強していない状態で、大事な九九も習っていませんでした。そのころまでは学校も義務教育制になっておらず、中学も都合のある人は二年生で終わることもできました。昭和二十一年から二十二年に六・三制になり、小六、中三の義務教育制になりました。当時はポッポ草を夏に刈り取り、コウゾのように皮をはいて繊維を取り、服にして着ていたこともあります。麻のような感触の布が出来ていました。

現在の石野公園の下付近に東間校の農場があり、三十分くらいかかって赤池原町から下り、畑へ行き来していましたが昭和二十年、その畑で作業中に空襲警報くうしゅうけいほうがありました。B29の襲来でした。大編隊で北の方向へ通過していきしましたが、北九州が攻撃されたようでした。その編隊の様子は、今の高い所を飛ぶジェット機をいっぱい並べたような感じで、アルミのような機体の色が真っ白くきれいに見えました。

昭和二十年六月、沖縄が攻撃され、学徒動員の生徒たちが火炎放射機で焼かれ、壊滅状態になっていると周辺から情報が流れました。そのころは、町内の人数は二百七十〜二百八十人で、ラジオや電話は数軒にしかなく、口伝えの情報や連絡でした。国防婦人会（主婦らが発足させ、戦争協力機関として活動した女性団体）が、町内別に支え合っていました。隣り組の歌詞（トントントンカ拉里と隣り組、障子を開ければ顔なじみ…）にあるような状況で、教えられたり教えたりしていました。

戦時中は外国の言葉や歌、文化的なことは一切禁止で、徹底した軍国主義の教育がされており、むやみなことは言えませんでした。ちまたでは、戦争終盤の情報で「日本はもうダメ、負け」と言われていましたが、公の場では絶対口に出さず、そう思っていることを漏らさな

いようにしていました。

昭和十六年、二十年の長い戦争の間には、みんな言いたいこともあったでしょう。今の北朝鮮を見ていて感じますが、そのころの日本はどうしても戦争を始めなければならぬ状況にあったのかもしれませんが、国民が払った代償はあまりにも大きかったのではないでしようか。

戦後、六十年がたちました。人も六十歳で還暦を迎え、元に戻り第二の人生となります。竹も六十年に一度、全部枯れて新しい竹に生まれ変わります（苦竹の実がついた時は翌年枯れる）。日本も戦後六十年、今が変わり目、節目の時。今後、絶対に戦争を始めることがあってはならないと思います。大事なことは「真っ直ぐなことは一つ、そこから外れてはいけぬ」と思います。

三十六歳で召集された父の無念な死

濱口 敏行

昭和八年生（願成寺町）

昭和十五年、人吉東じん常高等小学校に入学し、翌年に国民学校という名前に変わりました。

た。教科書は昭和十四年十二月六日発行の小学国語読本巻1を現在も持っています。「サイタ サイタ サクラガ サイタ コイ コイ シロ コイ ヒノ マル ノ ハタ バンザイ バンザイ」と、カタカナから始まりました。十二月八日、日本は米英との大東亜（だいとうあ）戦争に入ります。このころは物資はまだ何でもあり、日本が攻めていく様子をラジオや新聞で見聞きました。

昭和十九年、日本の有利な状況よりは長くは続かず、少しずつ生活がきびしくなりました。十月十一日のおくんち祭りの日、肥後西村駅に勤めていた父は、三十六歳で召集されて出征しました。下関で入隊し一週間で満州に出兵。そして、終戦後にソ連の捕りよとなり、戦友の方から一月三十一日に病死し



たと知らせが来ました。その間、満州にいた時の父のハガキを何通か受け取っていました。中三の時、お骨を取りに市役所に行くと、外の倉庫に位はいの入った箱がいっぱい積んでありました。父はれい下三〇〇四〇度で木のばつ採などの労働をしたそうで、さぞつらかっただろうと思いました。

このころから生活がきびしくなり、校庭や学校用の畑にサツマイモを作りました。教室はしょういだんが落ちた時、火が広がるのを防ぐため、天井板を木や唐竹で突き破りました。校庭には天皇のほう安でんがあり、祝日には開けて全生徒でお祈りをしていました。また、あこがれていた航空少年隊では上級生がグライダーに乗り、下級生がゴムを引っ張って飛ばします。友達と川で水泳をして遊んだ後、何回も飛行場まで「赤トンボ」と呼ばれる二枚羽根の練習機に乗りに行ったりしたものです。昭和二十年四月からは分散教育が始まり、教会と願成寺に分かれて勉強しました。

大変だったのは防空壕掘り^{ぼうくうごう}で、庭に掘った二カ所のうち、一つは食料庫でした。地域では婦人部のお母さんたちの防火訓練、規律訓練、竹やりの練習で「エイヤー」と黄色い大きな声が飛んでいました。けいかいけい報や空襲警報^{くうしゅうけいほう}の時には願成寺のつりがねが乱打されました。

それから、軍用道路の建設が始まりました。相良村柳瀬の台地に向けた海軍航空隊の飛行場に通じる道路です。人高通り、今の願成寺郵便局西側の三々路四四五号線が交わる地点から東へ。わが家の土地も道路用地になりました。しかし、東部は水田、その向こうはシラスの一二三ヶ迫で、どちらも雨に弱く、なかなか工事は進みません。この工事は完成せずに終戦を迎えます。終戦の玉音放送をラジオで聞き、涙が出ました。

母は三十三歳で夫をなくし、祖父母と共に六人の子育てと農作業にはげみ、六十五歳で亡くなりました。思えば祖父や母と一緒に田畑に行き、たくさん仕事を教わりました。すべて手作業です。しっかりした祖父や母、やさしい祖母のもと、食べ物にあまり困らなかったのは幸せだったのかもしれない。それでも、戦争当時の弁当は麦と梅干しの入った日の丸弁当でした。無念な死だった父を思うと、わりきれないものがあります。つらかったろうと思うのは今でも消えません。戦争はあつてはなりません。

飛行機組み立てで過ごした五カ月

林 田 典 子

昭和三年生（願成寺町）

私は現在のおさぎり町にあった岡原じん常小学校を卒業し、昭和十六年四月に人吉高等女学校に入学。当時、岡原からの通学は交通の便が悪かったので、女子寮りように入って通学しました。その年の十二月、大東亜戦争が始まり女学校での勉強は落ち着いて受けられなくなりました。各家庭に農業のほう仕で田植えや稲刈りに行き、食料増産のため上原原城でカライモや野菜のさいばいたかんばるをしました。高原では竹やぶを切り開く作業を行い、夏の暑い日はのどがかわいたり頭痛がしたりして苦しく、とてもつらいものでした。ここでは、朝鮮の人と一緒に働いていました。米英と戦っていたので英語の授業はほとんどなく、体育の時間はもっぱら竹製のやりでやりつきの練習や、手りゅうだんに似たものを遠くに投げる練習をしていました。

女学校四年生の昭和十九年十月、私たちは学徒動員で熊本市健軍の三菱工場で飛行機組み立てのほう仕作業をすることになりました。健軍に近い秋津りようの寮に入りましたが一室が五、六人部屋で、学校や家庭への恋しさは毎晩のことでした。食事は主食となるご飯が、ほんの少しの米つぶと、たくさんのカライモ、ヒジキ、コンニャクを混ぜた雑すいみみたいなものでした。

空腹をいやすのに、それぞれの家から届いた干しカライモを炊いたり、焼いたりして食べました。梅干しやゴマ、いり大豆など、家族の者が交たいで持ってきてくれるのが何よりの楽しみでした。

工場での作業は機体へのハンダ付け、びょう打ちが主でしたが、慣れない作業で、「こんな、あまいハンダ付けで良いのかな」と思ったりしました。びょうも五カ所打たねばならないところを三カ所で良かったり。完成した機体の座席に仲間の人たちと乗った時のうれしさは何とも言えず、戦争に一部、加わったようで感無量でした。ただ、この飛行機に若い特こう隊の人が乗り、再び帰って来られないと思うと申し訳な



く、胸が痛みました。

昭和二十年三月二十七日は、私たち女学校の卒業式でした。県下の高等女学校（阿蘇・松橋など）の生徒は工場の一室で、それぞれの学校ごとに代表の先生方も出席され、簡単な卒業式が始まりました。来ひんの方の祝辞が始まったところ、「空襲警報、全員待ひ」の聲が飛び、式は中止に。「伏せろー！ 伏せろー！」とどなる声にどのようなようにしてわが身を守ればよいのか、ただ地面に伏せるのみです。プスップスツと機銃掃射の音、低空飛行のばく音に自分を失いそうでした。こうして、うれしいはずの卒業式がB29の機銃掃射で終わり、卒業証書もとうとう授与されず、今でもいただいていません。翌二十八日には荷物をまとめて秋津寮を後にし、五カ月間の学徒動員の日々は終わったのでした。

その後、二年間助教諭として勤め、おばの後けい者として二年間の助産婦学校に進学。助産婦の資格を取り、検定を受けて看護婦の資格を取りました。その後、保健婦研修所での一年を修了し保健婦の資格を取得。人吉、八代の保健所に結婚後も保健婦長として勤めました。五十六歳で県庁の衛生総務課の主幹となり、六十歳の定年まで勤務。その後は相良の老人保健施設（みのり）、リバーサイド御葉園、桜の里の老人ホームが開かれる時に勤務しました。

今日まで元気に過ごして来られたことに、今は感謝の日々です。

日本を守った先人を忘れずに

早 田 亮 彦

大正十四年生（北泉田町）

昭和十八年三月、県立人吉中学校を卒業した私は、陸軍予科士官学校に入学。自分たちの国は自分たちで守るという思いを、だれもが持っていました。士官学校の入学試験は身体検査が最初にあつて、それに合格した人が学科を受験します。体が弱かった私は水を飲んで体重を増やし、二度目の身体検査で合格しました。

予科で一年過ごした後、陸軍航空士官学校に入学。昭和二十年四月に満州に渡り、戦闘機乗りの訓練を受けました。八月九日にソ連軍が参戦したため、十二日に国境の通化飛行場へ移動。十五日に終戦を知り、学校の命令で帰国することに。十六日、通化の一ぱんの日本人もいっしょに汽車で南下を始めました。釜山から船に乗り、二十日ごろ博多港に着きました。

帰国した私たちは航空士官学校の本部へ直行。山陽本線で大阪に行く途中の夜、原子爆弾で焼け野が原になった広島で、まだ青いリンが燃えているのを見ました。職業軍人は東海道を

本線に乗るとつかまるからということで、大阪からは北陸本線と信越本線に乗りかえて東京まで行きました。

埼玉の本部に帰ってみると、飛行隊の隊長が自決されていました。私は戦友と共に隊長の故郷の鹿児島へ、ご遺骨を届けに行きました。汽車は復員する人たちで満員のため座るところもなく、隊長のご遺骨は空けてもらった洗面台に安置し、二人でお守りしました。熊本まで来ると、川尻の鉄橋が爆破^{ばくは}されていて通れません。熊本駅近くの母方の祖母宅に一泊し、八代から肥薩線で鹿児島へ向かいました。と中、車中で出会った先ばいの原義敬さん（後に東小の先生）に私の荷物を預け、ご遺骨と軍刀だけになりました。隊長のご両親にご遺骨をお渡しし、鹿児島で一泊して肥薩線に乗り人吉に向かいました。吉松に近い山神第二矢岳トンネルでは、事故があって復員の人たちが多数、亡くなったと聞きました。人吉駅に着くと駅前の文房具店で先日、先ばいに預けた私の荷物を受け取り、両親が待つ湯前へ向かいました。自宅へ着くとすぐ警官がやってきました。軍人である私が復員して来るのがわかったのです。警官は私の軍刀を没収に来たため、私はその場で軍刀をたたき割りました。

昭和二十一年四月、熊本師はん学校に入学。二十四年三月に卒業し、四月から人吉市立第

一中学校の教員になりました。

だれでも、つらい戦争体験は話したくないものです。どうして戦争になったかを考えてください。本当の歴史を学んでください。日本が生きてきた道を、正しい歴史を大切にしてください。毎朝、新聞の天気図を見ると、東アジアのユーラシア大陸に沿って長く日本列島が伸びているのが、よくわかります。大昔から大陸と生活、文化の交流があり、時には争い事も起こりました。鉱物資源もとばしい日本ですが、春夏秋冬の四季に恵まれた風土が日本人を心豊かに育ててくれました。

ふり返ってみますと、私たちが青春をささげた昭和の時代は、東から押し寄せて来る「銃^{じゅう}を持った民主主義」と、北と西からひたひたと迫る「共産主義」との間で振り回された時代だったでしょう。若い人たちよ、日本の国を守った先人のたましいを敬い、すばらしい日本人としてのほこりを持ってこの国を守り続けてください。

学徒動員先で病氣になり帰宅

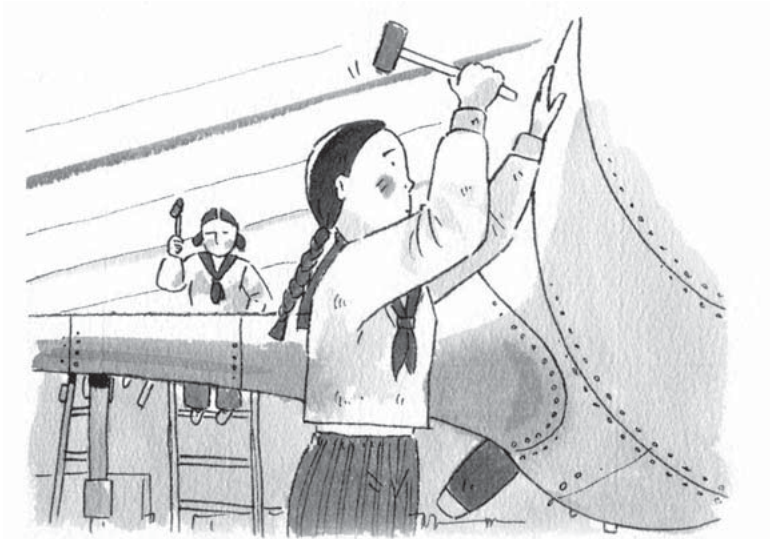
春 口 照 代

昭和四年生（北泉田町）

私は昭和四年二月、九人兄弟の六番目として生まれました。ぼたん雪の降る寒い日だったそうです。川村のじん常小学校を卒業し、昭和十六年四月に人吉高等女学校に入学。すでに戦争中で、女学校に入学したものの授業を充分に受けた記おくがありません。上原原城でのクライモのさい培、農家に出向いての麦刈り、稲刈りの手伝いなど食料増産のためのほう仕作業が主でした。

慣れない作業ながら夏の暑い日も一生けん命にがんばりました。ふつう、一週間といえ、日月火水木金土ですが、私たちの一週間は日月火水木金金。英語の授業は、ほとんどありません。体育は竹製のやりでやり突きの練習や、手榴弾に似た物を遠くに投げる軍事訓練のような内容でした。時折、体育館で陸軍や海軍の方の破れた制服の修理をしました。

女学校四年生になった昭和十九年十月、学徒動員で熊本市健軍の三菱工場へ。秋津の女子寮に入り、そこから、ほう仕作業で飛行機工場に通いました。仕事は機体のびょう打ち、配線のハンダ付けなどで、初めて完成した飛行機を目の前に、その大きさにおどろき、座席に



座り少し喜びを味わいました。少しはなれた所で二、三人の若い航空パイロットの方が話しながら笑う声が聞こえ、この飛行機でいつか戦場へ飛び立って行かれるのかと複雑な思いでした。

寮での食事はそまなものでした。クライモにほんの少し米つぶが混ざってあるご飯に、家から持ってきたごま塩、梅干しをおかずの足しにしました。器はもう宗竹を節のところで切ったおわんで、水の使用も制限されていたため、竹の器の底がドロドロとしていました。食べ盛りの私たちの夜のおやつは、いった大豆で同室の人たちと分け合って食べたものです。ある日、私の姉がリュックにごま塩、梅干しをたくさん入れ、い問に来てくれ、とてもうれしかったです。

そんな中、び熱が続き、体がだるくきつい中で仕事をしていたら、肺浸潤はいしんじゅんという病気になるのとわかりました。ちょうど動員の交たいの時期で、察からわが家に一時帰省でき、そのまま自宅りよう養になりました。同級生と一緒に仕事ができず、悔しい思いで卒業式間近まで過すごしました。りよう養中に先生のすすめで師はん学校の試験を受けましたが、今のようないな医学の進歩も薬も充分ではありません。一向に治りようの効果は見えず、び熱や体のだるさが続き、食欲が全くない毎日でした。

昭和二十年三月二十七日、少し体調がよかった私は卒業式に出席。式は三菱工場で行われ、来ひんのお話が始まったころ空襲警報くうしゅうけいほうに見舞われて、やっこの思いで無事にひ難ひがたできました。卒業証書はもらえず翌日、帰宅。五カ月間の学徒動員の日々でした。その後は自宅りよう養を続けて元気になりました。終戦後は青年学校の指導員として勤めたりしましたが、まだ教材が不足していました。

昭和二十三年ごろ、各地で婦人参政権についての学習会が始まり、私は先生と共に学習会を巡回しました。その後、人吉球磨食りよう務所人吉支所に勤務。結婚して家庭に入り、四十四年から社会福祉協議会に勤めました。戦争で青春時代もなく勉強も充分にできません

でしたが今、当時の苦しかったこと、楽しかったこと、学校生活を思い出して精一杯、前向きに生きています。

弱音をはかず戦後を乗り越えた母

東 和子

昭和十五年生（願成寺町）

私の母、倉本愛子は明治四十三年に山形県新庄市に生まれ、両親と大連に移住。両親は大連市の郊外で果樹園を経営していました。昭和四年に同志社女子専門部（現・同志社大学）を卒業し、大連の幼稚園に就職。大連関東州庁に勤めていた人吉市出身の倉本政頼と出会い、昭和七年に結婚しました。当時の大連市は環境が整備された美しい街で、文化の香り高い豊かな生活を送っていました。

母は五人の子どもに恵まれましたが、昭和十四年に次男と次女が、昭和十七年三月には父も三十六歳の若さで病死。昭和十二年に始まった日中戦争で生活が不安定になり、病気の治りようも思うようにできなかったのだと思います。母は三十三歳で、十歳の長女、八歳の長男、二歳の三女（私）の三人が残されました。その年の十一月から、母は関東州庁に勤め始め、父



亡き後の生計を立てました。二十年に終戦となり、敗戦国となった日本人の私たちの大連での生活は次第に不安定なものになっていきました。そのような生活の中でも夕食後、母がひくオルガンに合わせて歌ったフォスターの曲や、賛美歌がなつかしく思い出されます。

昭和二十二年二月、私たち親子は父の遺骨と共に、父の故郷である人吉に引きあげてきました。父の実家は九日町にありましたが、そこにはすでに他の人が住み込んでいました。やむなく、下戸越の兵舎に入居しましたが、兵舎には台湾から引きあげてきた家族や戦争などで家を失くした人たちも多く、それぞれ大変な生活でした。それだけに、互いに助け合って生活して

いました。母は周りの人のお世話で、わかめやいりこなどの海産物の行商をして、夜おそくまで働き、私たちを養ってくれました。

その年の十月、母は市役所勤めの方のお世話で、西村中学校（現・錦中学校）の英語と家庭科の助教諭として勤務することになり、リヤカー一台分の家財を積んで西村に引っ越ししました。西村の借家は元は農家の養蚕室で、お風呂は隣にもらい風呂でした。当時は大家族で、何人もの人が入浴した後のお風呂は石けんくさかったことを覚えています。それも今だから言えることで、当時はありがたく、人の親切に甘え、近所の方々からもよく野菜や力キなどをいただきました。そのころを思い出すと、私たちに与えてくださった恩はいつまでも忘れられません。

当時、兄は中学生から高校生になるころでしたが、同年の男友達と裏に流れている球磨川で毎日、うなぎとりや魚つりをして遊んでいたことを、今は楽しい思い出として話しています。

母はその後、助教諭から教諭となり、上村中学校・五木中学校・山江中学校、最後は錦中学校で退職しました。その間、住居は上村、相良と移り住みましたが、昭和四十二年に現在の人吉市に家を建て、この地に落ち着きました。私たち三人の子どもも高校や大学に進学し、

今はそれぞれの地で結婚し家庭を築くことができました。

母は山形生まれでしたが、大連をはなれることになった時、両親がいた山形に帰らず、見知らぬ人吉の地に帰ったのは、亡き夫への深い思いがあったからかもしれません。どんな時にも決して弱音をはかず、明るく振る舞い、常に前向きに物事に取り組んだ母の姿勢は、私たちにも大切な人生の道しるべとなりました。私は今も「口は人を傷つけるけれど、手はどんなによごれても洗えばきれいになる」という母の言葉を大切にしています。

佐世保の海兵団で受けた厳しい訓練

東 一穂

昭和三年生（下田代町）

私は昭和三年に西村（現錦町西）に生まれ、幼児の時に藍田村（現人吉市）田代に移りました。八人兄弟の長男で大畑小学校、高等小学校を卒業し、家業の農業を手伝いました。昭和二十年二月、十六歳で志願兵としてちよう兵検査を受け、海軍を希望。どうせ兵隊になるのなら一日でも早く入隊しよう、また、陸軍は歩くことが中心だが海軍は軍かんに乗れるからいいだろう、というくらいの気持ちでした。



昭和二十年二月一日、長崎県佐世保の南大村湾に面した針尾島にあった「針尾海兵団主計科」に入団。海兵団での生活は五時の起床ラッパに始まり、全体遊び（体操）の後に朝食。三分で食べよとか一分で食べよという命令が出たりします。休けい後は日課があり、特にカッター（小型のボート）の練習は大変でした。班対こうで競争させられ、負けたら気合いを入られます。大きなオールをこいで終わるころには、しりの皮がむけて歩くのが苦痛でした。

また、日常さ細なことで班長になぐられました。特に「精神注入棒」（１メートルほどの長さの木の棒）、あるいは一にぎりもある青竹でしりを思い切り二、三回なぐられる。たおれると、ま

た立たせてなぐる。気絶すると、真冬でも防火用のバケツの水を二、三杯顔にかけて気づかせていました。

宿舎では、みなベッドを並べていますが、よく持ち物がとられました。なぜか、ぼうしが無くなったり、洗たくしたものがとられたりで油断できません。自分の所有物が無くなれば、必ずばつでなぐられるから、だれかの物をとって間に合わせる。次から次へとそれが続き、点呼の時に、たとえばぼうしをかぶっていなかったら、なぐり飛ばされる。ベッドに置いた衣囊（いのう）（＝衣類などを入れる袋）に入れた物でも油断すると、とられたりしていました。

班長のもと十五、六人を一班とし、一人のミスは全体責任になります。食事時でも、「テーブル支え」というばつで、全員の食事を配ぜんした大きなテーブルを長時間、頭の上に支えさせます。だれかが力尽きて手を下げると食器がすべり落ち、全員食事ができなくなる。全く理くつに合わないことが行われていました。こうした訓練の三カ月後、同期の者全員が佐世保海兵団に移り、十五日間ほど主計の訓練を受け、日本国内や南方地方など各地の部隊へ配属されました。私は佐賀の唐津派けん隊に配属され、そこには三百人ほどの兵が公民館のような家を宿舎としていました。

主計の仕事は衣服や食料、部隊で必要な物資の管理で、毎食の準備も行いました。海軍でも昭和二十年五月ごろは毎日、開こんや食料生産の作業で、空襲もあり十分には出来ませんでした。八月十五日の終戦の玉音放送は昼食の準備中でしたが、すぐに終戦とわかり、翌日には約三百人の兵がほとんど復員していきました。やがて佐世保鎮守府（＝軍港に置かれた海軍の機関で所属部隊を指揮・かんとくした）から数人の上官が物資の引き継ぎに訪れ、私は海軍上等主計兵として仕事を整理し、上官に全てを渡して二十日に復員。唐津派けん隊では終戦による混乱は一切ありませんでした。

軍人の父を亡くし必死で働く

深 水 和 子

昭和十年生（西間下町）

私の父は阿蘇出身で海軍の軍人でした。十二人兄弟の五男で、母は公立病院の看護婦。両親は昭和七年に結婚し、昭和十二年には台湾に住んでいました。私は昭和十六年に佐世保の小学校に入学し、その年に弟が誕生。父は上海にいました。十七年、人吉に帰り、紺屋町のおじの家で一年間、世話になりました。昭和十八年に西間町にみんなと一しよに移転して暮

らしました。

昭和十九年、父はマーシャル諸島で戦死。おそう式は父の実家の阿蘇で行われました。母は三十三歳でしたが、永国寺の前にあった指宿農機製作所で働き始めました。再婚の話がいろいろあったものの、子どもがいるからとしなかったそうです。当時は食べ物が少なく、衣類を農家に持って行き、米と交かんしていました。

学校は三年生まで東校、四年生から東間小へ。運動場のすみが畑になり、カライモ作りが行われました。もっこを二人で持ち、馬ぶん集めに行きます。畑を切り開いた所にうめて肥料にするためです。また、釜のくど(今の石野公園)まで歩き、カマやクワなどを担いで、畑を作りに行きました。カライモやカボチャを植え、収かくすると目の色を変えてかぶりついていました。

学校には、はだしで通い、冬はわらぞうり、雨の日は竹の皮でできた「たかんぱち」をかぶって行きました。どこも同じですが、この上ない貧ぼうで、寒いときはガタガタふるえていました。こづかいかせぎに九日町まで花売りにも行きました。

やがて分散教育が始まり、びしゃ門堂にたたみをして黒板も机もないまま、代用教員に



よって一年から六年まで一しよの勉強がありました。勉強中は防空ずきんをかぶり、空襲が始めれば避難しなくてはなりません。永国寺の裏山に防空壕ぼうくうごうがたくさんあり、避難ひなんしていると飛行機が低空飛行で飛んで来て、機銃掃射きじゅうそうしやのためがバラバラ落ちました。よく当たらなかったものです。

父の死後、父の実家の阿蘇にいたことがあります。冬、春、夏休みに汽車で阿蘇に行くと、駅にはおばさんが、まんじゅうを持って出むかえてくれます。農家だったので腹いっぱい食べられました。大きなザルにご飯が盛られ、ふきをかけてつるしてあります。とうきびや阿蘇たかなもありました。父の兄弟の子どもたちも

大勢、来ていました。母は米をもらいに阿蘇に行き、当時は米を自由に運ぶことが禁止だったので、背中に子どもをおんぶしてねんねこをかぶったふりや、お腹の大きいふりをして米を持って帰りました。お風呂はもらい風呂で、人が入った後の白くにこったごえもん風呂に入っていました。水は川からくんでわかし、飲み水以外は米など一切、川で洗います。上流で魚を洗えば、下流で洗たくをしているという状態でした。まきは永国寺の裏山を一山買つて、木を切つて担いで持ってきていたそうです。毎日、みんなおなかが空いていましたが、必死で働かねば生きていけませんでした。

母は小野小町と言われるほどの美人でしたが、働きづめで十年ほど苦労しました。いぞく年金が来るようになってから楽になり、娘と同居して孫の守りやしやみ線、日ぶを習い、八十六歳で亡くなりました。

南方で戦死した夫と弟

前 田 ゆか志

大正七年生（北泉田町）

夫、牛島守は鹿児島種子島で生まれ育ち、鹿児島島の薬局に勤めていましたが、戦争が始

まり二十歳で入隊。中国で十年間、戦いました。その後、兄姉が朝鮮にいたので朝鮮へ行き、一年くらいして人吉のお兄さんの所に、よめ探しに来ました。

私は近所の人の世話で夫と見合いし、その二日後の昭和十八年五月、青井神社で結こん式を挙げました。夫が三十一歳、私が二十五歳でした。その翌日、弟に赤紙が来て、夫はそのまま朝鮮に帰りました。

私は八月に朝鮮に渡り、夫と京城（現ソウル）に住みました。昭和十九年三月、おなかに子どもがいたので朝鮮を引きあげ、人吉の実家に帰りました。夫は召集を受けて現地入隊し、ニューギニアへ。そして、昭和二十年八月九日に戦死



しました。同じく、弟も南方で戦死してしまいました。

私は実家で母と妹二人と同居し、塩販売などの配給所を営んで生計を立てました。家の裏に防空壕^{ぼうくうごう}をほり、いつでも逃げ込めるように家は開けっ放しにしていました。高ん原に予科練（海軍飛行予科練習生の略称）の基地があったので、夜になるとウォンウォンと音をたててアメリカの飛行機が飛来します。球磨川の川筋を低空飛行でやって来て、人吉市内と高ん原が空襲^{くうしゅう}にあいました。後には川端にずっと薬莢^{やつぎょう}が落ちていました。

息子は、警戒^{けいかい}警報^{けいほう}のサイレンが鳴ると、帯を持ってきて自分からおんぶされていました。昼間、サイレンが鳴らない時にご飯をたいておにぎりにし、オムツをもって防空壕^{ぼうくうごう}で休みました。防空ずきをいつも備え、夜は外に光がもれないように電気におおいをかぶせる生活でした。

当時、食料は配給制でカライモ、米、麦の粉、砂糖や塩など何でも全部、人数に応じて支給されたキップと引きかえでした。しかし、配給だけでは足りないので、自分でも作っていました。着物がボロになって修ぜんする糸も、キップが必要でした。米は一日一人、茶わん一ぱい。雑炊はいい方で、カボチャやカライモのツルも食べていました。

昭和十九年に戦死した弟は、人吉市によるおそう式がありました。夫は二十年の戦死でしたが、人吉別院にトラックがいっぱいお骨を積んできて、名前を呼んで渡されました。箱をもらったときカタツと音がして、帰って開けてみると中にあったのは位はいだけでした。

現在、一人息子は市議会議員を三期務めて、薬局を営んでいます。同じ屋しきに四世代で暮らして幸せですが、ただ、足が思うようにならないのが残念です。毎月十三日に、遺族会の方々と相良護国神社にお参りをしています。戦争は、もう絶対にいやです。

下益城の開拓団で満州へ

丸 田 ヤエ子

昭和四年生（瓦屋町）

私は下益城郡坂本で生まれ、小学校卒業後、下益城の開たくグループに入った父に連れられ、兄や弟と一緒に満州に行きました。母は祖父母が二人きりになるということで満州へは渡りませんでした。下益城でも父は農業をしていましたが、仲間と一緒に新しい開たく地に行くということが、あこがれ^{あこがれ}だったでしょう。今思えば、戦争に巻き込まれに行ったようなものでした。

満州では、私も兄、弟たちと農作業の手伝いを毎日しました。食べる物は父がどこからか買ってきていたようで、不自由はしませんでした。が、今のように水道もガスもありません。ヤンソ（草）を毎日刈^かって干し、たき物にしていました。水は二、三百メートルはなれた、つつみの水を使っていました。

満州の冬は、とてもとても寒いものでした。あまりの寒さにつつみの水もおおってしまい、氷をがち割って持ち帰り、温めて溶かしてから料理や飲み水に使っていました。外に出る時はマントを着て防寒ぐつをはき、雪の上をザクザクと歩いていました。雪の日は外での農作業はお休みで、家の中でじっとしていました。こう野を開たくして田畑を作り、やっとイネが実ったのが昭和二十年八月。「よか米ができた！」と父は大喜びしました。

その喜びも束の間、八月十五日を迎えることになりました。終戦になると、満州人が日本人の田畑を全部、なわを張って立ち入り禁止にしまいました。それは開たく仲間の一人が、スイカ売りに来た満州人をスイカ欲しさにたたいていじめ、うばい取ったことがあったからでした。満州の隣のロシア人が女性をおそうと聞き、家から外に出る時は、かまを持って野に行くふりをして遊びに行っていました。途中、日本人から殺されたのか、満州人が小

川に浮かんでいるのを見たとあります。隠れておくようにとの父の言葉で、私は友達二、三人と防空壕^{ぼうくわう}にひそんでいました。そのうち、女性だけで逃げてよその集落に行きました。

日本に帰国したのは終戦から一年後の昭和二十一年八月。プサンから下関に渡り、母が待つ下益城の実家に帰り着きました。帰国後は、よそに住み込みで農作業の仕事をしました。朝は田畑に出る前に、むしろ（いりり？）ばたでふくろを編むのが仕事です。そして、日中は田んぼで米を作り、夕飯がすんだら、また、むしろ（？）ばたでふくろを編んで夜なべをしていました。自分の家で農業をしてもお金はもらえず、外で勤めとして農業をすればお金をいただけるということで、仕事がついとやりたくないと思ったことはありません。楽しかったことは何カ月かに一度、松橋に映画を見に行ったことでした。十八歳から結こんする二十九歳まで勤め、三十歳で長女を出産しました。

小学校しか出ていないので、もっと勉強したかった。そうすれば、お金の使い方や節約の仕方もわかります。特別、楽しいこともつらいこともない、このくらいの人生かなと今、思ったりしています。テレビを見ていて感じるのは、今でもどこかの国で戦争があっているということ。どうして、戦争がなくならないのかと思います。

旧ソ連収容所で過酷な抑留経験

丸 目 光 喜

大正十四年生（矢黒町）

昭和十九年十月十五日、十九歳で熊本十八部隊に入隊しました。私の場合は召集令状で呼び出されたのではなく、現役入隊（常時軍務に服している現役兵としての入隊）でした。熊本に一晚泊まり、その夜、満州に行くことを知人から伝えられました。翌日十二時に出発。新品のシャツ、ふんどし、ズボン下と地下足袋、水筒、雑囊（種々雑多な物を入れる袋の意味。ざつもの）肩に掛ける布製のカバン）が配られます。

まだ私服のまま歩いて熊本駅に行き、軍用列車で門司へ。一晚民宿して輸送船で釜山へ渡りました。途中、奉天（現中国遼寧省瀋陽市）に泊まって満州のハイラル（現中国モンゴル自治区）を目指します。しかし、到着すると十八部隊は出た後だったため、ハイラルで国境守備隊に編入され、初年兵教育を受けました。私は一大隊本部中隊で大隊長直轄の兵になりましたが、体が弱かったので演習にも参加せず、部屋の勤務に就いていました。その後、二期の検閲（軍隊での検査、試験など）を受けて一等兵になり、二期の検閲の修行直後の昭和二十年、部隊は興安嶺山脈のブトハ（現中国モンゴル自治区ジャラントン市？）の頂上に、陣

地を構築しに行きました。

八月九日、小さな飛行機が飛んで来て、ソ連と開戦したとの知らせが入り、弾薬を受け取ります。十一日ごろ、部隊の人たちが五、六人、ハイラルから歩いて逃げてきました。ハイラルは全て爆破され、全滅したとのこと。十三日にはソ連軍の戦車隊がブトハの下まで入って来ました。十三日夜中、興安嶺から出勤命令があり、牡丹江あたりがやられているから、そこに行くようにとの内容です。

十五日昼、ハルビン駅に着いた時に、天皇陛下の玉音放送を聞きました。一発の銃声が聞こえ、見習い士官が拳銃自殺したとのこと。ハルビンで下車し、小学校に向かいます。夕食後、ハイラルから本願寺に避難してきた軍属（軍人でなくて軍に所属する文官、文官待遇者など）や新聞社関係の人たちを警備するよう命じられました。子どもたちの用便の世話などする中、断水で若い母親の母乳が出ず、子どもが死んでいきます。その遺体を毎日、板壁などの板を集めて作った箱に入れて埋めました。若い娘さんが水をもらいに行くと、そのまま帰って来ませんでした。三日ほどして、武装解除して避難民と一緒に行動するよう命令が来ました。軍服を脱ぎ、避難民と共に帰るつもりで天幕をリュックに仕立て、食料もたくさん

入れて準備をしていました。ところが、朝まだ薄暗い中、ソ連兵が小銃を向けて男を皆、引って張って行きます。着の身着のままです。途中、ハイリンで野宿しましたが食べ物もくれず、このままでは死んでしまうと思いました。ちょうど、近くに日本の部隊が駐留していたので以前、所属していた隊に戻り、大隊長の荷物運びなどをする本部要員になりました。

十一月七日、牡丹江駅を発。国境を越えてウラジオストクへ行くと船が待っているというのでした。しかし、貨車に乗った途端に鍵をかけられ、思っていたのは反対の方向から日が昇ります。「シベリア行きだ、だまされた」と知りました。混乱の中、貨車に二十日以上乗せられ、食事は一日一食という状況でした。

その後、バルナウルの収容所に三年間いました。そこには、たくさん収容所があり、工場のボイラーの石炭積みや貨車の石炭降ろしなど雑役の仕事をさせられました。昭和二十二年十月ごろ、帰還命令が出ました。兵隊二十人と下士官や将校が若干名、帰れるとのことでした。列に並んでいると、名前を呼ばれた者は列外に出されます。そして、七人がバルナウル市内の工場の小さい収容所に入れられ、二年間、鉄くず集積や貨車積みなど、いろいろな雑役をしました。



昭和二十三年、帰還命令でナホトカに行きました。帰る時、作業服と戦闘帽の新品をもらったので着ていくと、日本人の思想指導員が来て戦闘帽をかぶっている理由を尋ねます。「ソ連兵がくれた」と言うなり、再び奥地にやらされました。ウオロシロフ(旧ソ連沿海地方の地区)という土地で一冬を過ごしました。当時、厳しく目を付けられていたのは、憲兵、警察、ブルジョア、地主、官憲などで、私の家は地主で私自身は検察庁に勤めていました。昭和二十二年に帰国できずに残された者は、皆そうした理由がある人ばかりでした。

再び、ナホトカの収容所(空き家)に入れられました。ここが一番、厳しい状況で、石割りを

して海に入れ、港を作る土木作業をしていました。収容所時代、死体を運んだことが三回ほどあります。倉庫に裸の死体が何体も積んであり、骨ばかりでしりにも肉が付いていませんでした。栄養失調で餓死し、凍ってしまった死体でした。そこに重ねて積んで運び、まきをたいて氷を解かし、五十センチほどの穴を掘って埋めました。

昭和二十四年七月、収容所から船に乗り、日本に帰還しました。その後、昭和四十年に全国抑留者連合会が結成されました。しかし、どういう理由で私たちがシベリアまで連行されたのか、いまだに政府にもわかりません。また、抑留者は捕虜とは異なります。その区別を若い人に知ってほしいのですが、学校の教科書にも記述されたことがなく、残念な思いでいっぱいです。

戦争で暮らしが一変、家業を手伝う

三 倉 重 成

昭和十四年生（瓦屋町）

私は中国の大連で、六人兄弟の四番目に生まれました。大連は五月ごろアカシアの花が咲き香るきれいな町で、広島市出身の父は貿易会社を営み、戦時下とはいえ平和に暮らしてい

ました。

昭和二十年四月、私は大連国民学校に入学。太平洋戦争は八月に終戦となりましたが、ソ連軍が来て毎晩、物を取ったり暴行するようになり、私たち家族も近所の人たちと逃げ回りました。女性は男装してソ連軍におそれないよう用心し、となり組で自けい団をつくり、にわかロシア語を習って身の安全に気を付けました。

九月には立ちのき命令が下り、日本人は一地区に集団移住させられました。その一カ月後に再び移動命令が下ります。そこでは一けんの家に二家族が住み、真冬になっても暖ぼうもなく水道はとう結。電気一灯で、暗く不便な生活を強いられました。食料は配給制のような形で一日一食に。時には食べられないこともあり、仕方がないのでねて日を過ごすこともありました。

やがて、日本人は内地（日本）引きあげのため、続々と大連港に集結し始めました。しかし、父は会社経営者だったため、資本家階級は人民の敵だとされ、引きあげ許可が下りません。秋が過ぎ冬になっても許可されず、年を越して食料も燃料もだんだん厳しくなっていくと思います。今思うと、親の気持ちは悲痛であったと想像します。



一家に許可が下りたのは、他の家族より半年遅れの昭和二十一年二月末でした。引きあげ船の興安丸で舞鶴港に上陸。母方のおばを頼って葦北郡津奈木町に身を寄せ、四月に小学一年に再入学しました。

父は大連時代にたくわえた資金を何とか持ち帰り、人吉市の現在地にかなりの広さの農地を手に入れました。しかし、農地改革により、大半の優良な田畑が自作農家に取り上げられてしまいます。父は持病があつて力仕事が出来ず、母が生け花の先生の免状を生かして教室を開き、細々と家計をやり繰りしました。

一家の希望だった長兄は戦前、東京外語大のドイツ語科を出ていたので、「新制中学の英語教

師に」と市の教育委員会から何度も要望がありましたでしたが断っていました。軍隊に身を置いた者として、敵の語学を教えることや民主主義に対する考え方など、なじめないものがあつたと話していました。兄はしばらく農業に従事した後、昭和二十六年に試験を受けて国家公務員となり、人吉を離れました。兄の仕送りで、一家の生活は少し息をつくことが出来ました。残された農地で収入を得るため、父はつてをたよってヤギを仕入れて飼ひ、養ひを始めました。ヤギの乳は我々子どもの栄養源になり、けい卵は大きな収入源になりました。ヤギ二頭、ニワトリ二十羽から始め、最盛期にはヤギ六頭、ニワトリ二百羽の規模でした。兄弟三人で父を助けて動物の世話をし、卵は旅館などに届けました。

小学校から中学、高校時代にかけて、朝早くから夜おそくまで、えさやりや小屋そう除など時間がいくらあっても足りない仕事量でした。きつい、きたない仕事で下の弟たちはとちから逃げ出しても、私には逃げ出すことは出来ませんでした。弟と川でウナギをつかまえてこづかいにしたこともありました。

貿易を営んだ父はワインや洋酒を好み、焼酎や、さかずきのやり取りにはなじめず、地域とのつながりがうすかったようです。その後ろ姿が、この地で生きるうえで大事なことを私

に考えさせてくれ、現在は老人会長や公民館の理事などを務めています。

昔のことを振り返ると苦しくもなつかしい思い出ですが、外地での恐ろしい体験を思うと、平和のありがたさを実感する昨今です。

三カ月の結婚生活。待ち続けた戦後

溝下 榮子
大正八年生（上新町）

私は小学三年生から実家を出て、球磨郡相良村のおじの家で子守奉公をしていました。五年生の時におじは亡くなりましたが、六年生までおじの家におり、小学校を卒業。当時、女性^{まんじゅう}は満州（中国の東北一帯の俗称）に身売りされる人もありましたが、私は熊本市の製糸会社に就職でき、昭和五年（十一歳）から十年あまり勤めました。それまで勉強する機会がなかったため上司からよく叱られ、つらい思いを静めるため日記を書くことが習慣となりました。

昭和十七年九月十五日、相良村の二十九歳の人と結婚。知人の紹介もあり、朝鮮（現在の朝鮮民主主義人民共和国と大韓民国に相当）で仕事に就いて生計を立てるため、九月三十日に朝鮮へ移住しました。夫は会社に就職し、十一月一日に借家住まいから新築の住宅に入居

できました。周りは日本人ばかりでしたが周囲の状況がよく把握できず、物資も配給のみで暗中模索の日々でした。

同年十一月二十二日、夫に召集令状が届き、二十六日に入隊との内容。夫は一人で日本に向けて出発しました。あまりに急で今後のことを話し合う時間もなく、私は一人で朝鮮に残ることになりました。夫は満州十八部隊に入隊したため、いずれは二人で日本へ帰れるかと思っていました。一人の生活はとても寂しかったのですが、子どもを抱えた奥さんたちはもっと大変だろうと、自分に言い聞かせるしかありませんでした。

昭和十八年、日本の両親から帰国するよう言



われて翌年、一人で日本に帰りました。夫は自分が帰るまで実家にいるよう言いましたが、結婚した身では実家に帰りづらく、お婆の家にお世話になりました。実家と夫の実家の手伝い、時には土方をしながら生活費を稼ぎました。後で分かったのですが、夫の入隊の支度金、会社からの給料は夫の実家に送られており、私には届いていませんでした。夫の実家も生活が苦しくて仕方なかったのだろうと思っています。

昭和二十年、終戦の年に戦地の夫が朝鮮にいる知人へ手紙で、「今から南方に行く。妻をよろしく頼む」と書いてあったと聞きました。この年に国（県）から、「（ご主人は）行方不明だから戦死したことにしてくれ」と依頼がありました。私は承知しませんでした。その後、夫からは何の連絡もなく、昭和二十三年ごろ「栄子、苦劳かけたね」と大きな声で帰って来た夢を見ました。現実のようで今でも忘れることはできません。昭和二十四年の最後の引きあげ船でも帰らなかったため、「戦死したのかな……」と思うようになりました。それでも、ひたすら夫の帰りを待ち続け、土方などで生活していました。

昭和二十八年、人吉市内の履物屋に就職。店の下の部屋を借りて新たな生活が始まりました。昭和三十八年六月三十日、熊本市春日のお寺に夫の位牌が入った白木の箱をもらいに行

きました。この時、初めて夫の戦死を確認せざるを得ませんでした。周囲の人はよくしてくれましたが、どうして私はこんな目に遭うのだろうと時々、畑に出て一人で泣いたこともありました。夫の帰国を信じ、再婚話にも耳を貸しませんでした。

一生懸命に働いて店の人の信頼も得られ、昭和五十八年の店じまいの年まで店員として三十年間勤めることができました。生活も安定し、その後は三味線の習い事に精を出し、九州大会に出場したこともあります。造花も学び、生け花も楽しみました。習い事のおかげで、いい友達にもたくさん巡り合えました。昭和六十一年に現在地に引っ越し、今は妹と二人暮らしです。日記も昔のものは黄色く変色して、紐解けばさまざまなのが思い出されます。わずか三カ月間の結婚生活は戦時中でもあり、慌ただしいものでした。ただ、夫のことは決して忘れることはありません。

戦前・戦後の苦難を経験して

蓑 毛 英一郎

昭和八年生（瓦屋町）

私は小学校四年の時、免田国民学校から人吉東間国民学校に転校しました。父が免田校から同校に転任したからです。講堂の横に四〇五メートルぐらいの魚雷が石の台座に置いてあったのが印象的でした。何年生の時だったか、海洋少年団員として訪れた高ん原飛行場では複葉機（赤とんぼ）が宙返りやきりもみの訓練をしており、そのエンジン音に「凄いなー」とあこがれをもったものでした。

戦局が進むと、学校から田植え、稲刈り、麦踏みの勤労奉仕に出かけました。田の草取りをしていた時、足にヒルがくっついたりしたことなど覚えています。当時はみんな食べ物に飢えており、手伝った農家でのよけまんに「握り飯が出た」とか「芋だった」とか、ワーワーと話題にしていました。学校には炭焼き窯があり、材料の木を古仏頂の山まで取りに行き、重たい木を抱えて学校まで歩いて帰ってきたこともありました。

ある時、東林寺の方向にとても光っている飛行機が円を描いて飛んでいました。それはアメリカの飛行機で、赤とんぼしか知らない私は見とれていました。その時、飛行機は垂直に

急降下して爆撃してきました。ドォーンともの凄い音がして、東林寺の向こうに黒煙が上がりました。東間小の校庭にいた私は「敵が来るぞー隠れろ」の声で、学校の防空壕に飛び込みました。ダダーンという銃撃音がまるで私の身体に当たるような錯覚がしました。

学校には奉安殿があつて、天皇陛下のご真影が納められていました。そのご真影に傷でも付いたら校長の首が飛ぶと言われており、父は空襲警報が鳴ったら、まっ先にご真影を抱えて東林寺にあるご真影のための横穴の防空壕に保管に行っていました。

昭和二十年四月、県立人吉中学校に入学しました。人吉中では上級生にいちいち敬礼をしなくてはならず、しなかつたら棒で尻を叩かれました。授業はほとんどなく奉仕作業に出かけました。

昭和二十年八月十五日、玉音放送は夏休みの我が家で聴きました。内容はよく分かりませんでした。戦後まもなくして城内グラウンドで、進駐軍のアメリカ人に声をかけられました。「写真を撮ってやるから来い」と手招きされました。友達と2人写真を撮ってもらい、もらったチューインガムを家に持って帰り母に見せました。何か嬉しいというより、むしろ屈辱的なものを感じました。

東間小に広島から来ていた部隊が解散となり撤収する時、牛缶・カンパン・折りたたみのリヤカーなどを置いていきました。カンパンにはコンペイ糖が入っていて、とても甘かったことを覚えています。

戦後、進駐軍の命令で教科書に書かれていた神国日本や天皇崇拜、戦意高揚の個所は墨で塗らなければなりませんでした。新しい教科書は新聞紙大の大きさの印刷物をA四サイズくらいに切り、こよりでとじて、自分たちで作ったりしたものです。昭和二十一年三月、父は五十歳半ばで自ら校長を辞めました。父が退職してからは、我が家の生活が一変しました。姉二人が小学校教師として家計を助けてくれました。父は知人の紹介で学用品の販売を始めました。私も勉強の合い間に自転車で配達をしました。父は入学式には学用品販売に学校に出向きました。警察が取り締まる中、ヤミ米をあちこちに買いに行ったこともありました。

戦後、みんな苦しく生活に追われました。だからこそ今の子どもたちには苦難や困難に耐える力を持って欲しいと思います。戦争はしてはならないと思いますが、若い時の集団的な訓練はあってもいいのではないかと思います。「鉄は熱いうちに打て」ということだからです。

厳しい食糧事情で運動場も畑に

三原 重信

昭和十二年生（上漆田町）

これから述べるのは、私が小学校二年の終わりから三年生の半ばごろまでの体験です。戦時中も授業はありましたが、登下校が危険なため公民館で授業を受けていました。上漆田町内だけで五十人くらいの生徒がいて、二人の先生がいたように覚えています。公民館から上った山の上に、畑を一枚借りて先生と生徒でカライモを作り、それを公民館で炊いて食べていました。学校までの道は山道で、一、二人は入れるような横穴が至る所にありました。敵が来たら軍隊がそこに入り、鉄砲を撃つためのものでした。小さい爆撃機が西の方から高原をよく通過していましたが、爆撃を受けたことはありませんでした。

公民館の庭には、きっちり詰めて三十人入るくらいの防空壕を掘りました。畳四、五枚ほどの長さに掘り、上に丸太などを並べて覆い、掘った時に出た土をかぶせて分からないようにします。入り口は、はしごが付けてありました。防空壕は各家庭や班で作り、平地では庭や田んぼの片隅に作られました。そばに山がある家は山に横穴を掘り、遠く離れていれば安



全だとは分かっているけど、なかなか逃げ込むことはできませんでした。茂賀野には、約一・五メートルの高さで入り口と出口のある防空壕（ぼうくうごう）が最近まで残っていました。

食糧事情は厳しく、カライモを作っていたものの、それだけでは足りず、お腹が空いてカキやクリ、シイの実などを拾って食べていました。今だったら口にしない石のように硬いナシでも食べていました。自宅周辺は米作り専門で、わが家でも米を作っていました。国に強制的な供出として出していたため、カライモ、麦、くず米を主食として食べていました。いつもお腹が減っていたのが、言い表せないくらい苦しいものでした。

上漆田地区には、兵隊さんが各家庭に五人から八人ほど泊まっておられました。地区を守るために来られていたと思います。現在は個人宅の車庫になっている所が、当時の兵隊さんたちの炊き出し場所でした。大きな釜（かま）を五つほど並べて料理し、当番の兵隊さんが各家庭の兵隊さんに食事を配っていました。普通の家では兵隊さんに仏間（ぶつ間）を使ってもらうため、家族は一つの部屋で頭の向きを互い違いにして雑魚寝（ざこね）をし、服も兄弟で使い回していました。

兵隊さんは佐賀など遠方から来ている人がほとんどで、ポンポン菓子をもらって食べた覚えがあります。終戦の二カ月前、実家に私の従兄に当たる大佐と呼ばれる人が里帰りしてきました。その時の周囲の兵隊さんたちの緊張した敬礼はただ事ではなく、子どもながら「すごい人なんだ」と思いました。二泊した際に、竹を刀で斜めにスパッと切って見せてくれたことが今でも目に焼きついています。その後、わずか二カ月の間に本部の空爆が何かで戦死されたと聞きました。生きておられると九十歳になられます。

四年生の初めに、家のラジオで天皇陛下のお言葉を家族みんなで泣きながら聞き、その後すぐに兵隊さんたちは全員、引きあげて行かれました。戦後、公民館のそばに一時的に病院がありました。資格のある人がやっている感じではなく、すぐになくなりました。

昭和二十二年、戦時中にカライモ畑にしてあった小学校の運動場を、私たち五年生が全員でローラーを引いて整地することになりました。そのなかで、作業中の生徒がローラーの下敷きになってしまう事故が起き、一人は頭にケガ、一人は足を骨折、一人は死亡という大惨事となりました。その事故で親友を亡くしたことが大きなショックで、今でも思い出すと悔しい気持ちでいっぱいになります。

三度の召集で戦地を転戦

宮 崎 繁

大正六年生（東大塚町）

私は大正六年七月二十八日、藍田村（現・人吉市）東大塚町二八〇四番地で生まれました。木地屋にあった東間小学校分校で六年間を学び、卒業後、東間小学校高等科に進みました。東間小高等科は自宅から遠く、人吉町灰久保の父親の知人宅に下宿し通学しました。しかし、学校でいじめにあい一年あまりで退学。実家に帰り、父親と一緒に農業や山の仕事をするこ
とになりました。

昭和十二年、ちよう兵検査を受け甲種合格となり、輜重兵（Ⅱ軍需品の輸送・補給にあた

る兵士）として、熊本市の藤崎台野球場辺りの訓練場で数カ月にわたり輓馬（Ⅱ二輪の荷車を馬に引かせる）、駄馬（Ⅱ馬の背中に荷物を載せて運ぶ）部隊の兵士としての訓練を受けました。

当時の社会状況は、昭和十二年七月の蘆溝橋（Ⅱ中国北京の南郊、盧溝河に架かる橋）事件で日中戦争が始まり、日本軍はその年の十二月、南京（中国江蘇省南西部にある省都）へと進軍し占領しました。そのこうげきの主力部隊であった第六師団応えんのために、昭和十三年五月、熊本に第一〇六師団が編成され、私もその部隊の一員となり中国に派兵されました。

上海から船で揚子江をさかのぼり、こうげき部隊の後から九江に上陸。約三カ月の宿営を重



ね南昌（中国江西省の省都）こうげきに加わりました。輜重隊^{しちょう}では輜重兵の中からけい備の者を選び、小銃^{じゆう}・軽機関銃^{きかんじゆう}で部隊けい護にあたらせました。私は軽機関銃^{きかんじゆう}を与えられ二人一組で警備に就きました。南昌の近くでは部隊後方の馬繫場^{ばけいじよう}（＝輜重隊の馬を集めてつないでおく場所）に敵兵のこうげきがあり、二百メートルほどの近きよりで銃撃戦^{じゆうげき}となり、ようやくげき退したこともありました。

昭和十四年十二月、南京で全員に夏服が支給され船に乘せられました。「どこか南方の戦場に行くのかな」と思っていたら、一週間ほどして上陸したのが香港でした。香港では子どもたちが日本兵を「シーサン」と呼び、バナナなどを売りに来ていました。その後さらに九龍（香港の対岸、九龍半島）から広東（中国南部の省、省都は広州）方面の作戦に従軍しましたが、昭和十五年に内地引きあげとなり、広島県宇品港に上陸。検疫^{けんえき}（＝伝染病予防のため

の検査・診断）後、召集解除となり、その年の四月、人吉に帰省しました。家では再び父親と一緒に仕事をしていましたが昭和十六年六月、二度目の召集を受け、満州（中国東北部）のハイル（中国内モンゴル北東部の中心都市）第五五一部隊に入隊しました。ここで二歳下の弟が中国長沙で戦死したという連絡を受け、翌十七年除隊となり、再び実家

に帰りました。そして昭和十八年二月に結婚。二十六歳の時でした。

しかし、同じ年の十一月に三度目の召集を受けました。今度は内地勤務となり熊本で一年ほど過ごし、その後、宮崎県都城部隊に派けんされました。都城には二三連隊や三菱の工場があり、特設けい備工兵隊に所属しました。当時、私は伍長になっており妻子と共に営外（部隊の外）の住宅に住むことができました。そのころになると、連日アメリカ軍の空襲^{くうしゆう}があり、ばくげきのあとの補修などにあたりました。作業には近所に住んでいる男性を集めて行いました。また、物資こう入や連隊本部が置かれていた宮崎県庁舎への連絡に自転車で出向いたり、熊本市の師団司令部への連絡などにもあたりました。

昭和二十年八月十五日正午、天皇陛下の玉音放送を全員集合して聞きました。その後、残った仕事の整理をして十月に自宅へと帰りました。が、父親は病氣をしており、十一月二十五日に亡くなりました。

戦傷を負っても懸命に生きた夫

宗村 香

大正八年生（麓町）

夫は二十歳の時、体格が良かったためか徴兵検査では甲種に合格し、満州事変、支那事変に出兵したそうです。昭和十六年、大東亜戦争の初めに負傷して帰郷しました。馬に乗った写真があり、騎兵だったと聞いており、もうすぐ大隊長になるところで負傷したようです。帰ってから、人手が足りないとい市役所に勤務することになりました。

昭和十七年、私は市役所の方の紹介で夫の身体に傷があることを伝えられないまま結婚しました。本人が傷の手当てや始末を自分でやっていたので、気づかないままでした。傷は右腹に銃弾じゅうだんを受けたもので、戦地でまずいものもないまま軍医さんがたまを取り出してくれたそうです。直径十センチぐらいの穴が残り、人工こう門を着けなければならなくなっていました。便が出る時には、本人が便意を感じないまま便が外に出るため、本人も家族も周囲へのにおいをとて気づかっていました。傷には、ガーゼ↓かじ紙↓油紙↓腹帯をしめていました。結婚当初は装着用ベルトがあったものの、その後は手に入らなくなり、さらに紐ひもをつけて手作りの腹帯を使用していました。戦争中にはかじ紙もなかなか手に入らなくなり、



障子紙を切って使っていたこともありました。引きのない紙はもれてくることもあり、腹帯には汚れがつくため川で洗って使用していました。長女が二歳の時、飛行機が私たちの頭上を低空で飛んで行きました。娘は「飛行機！」と喜んでいましたが、夫は私たち家族の様子に心配で市役所から飛んで帰って来てくれました。B29来襲の時だったと思います。

食料は配給で、町内の人数割りで配給の品を町内会長宅から持ち帰りました。みそやしょう油があれば良い方でした。米が足りず、配給のコーリャン（小豆の粒の小さいもの）をたいていましたが、とても食べにくかったことを今でも思い出します。夫の姉が錦町で米屋をしており、

少しの米を確保してくれましたが、それを取りに行くのが大変でした。汽車には簡単に乗れるものの、米と分ければぼつ収されてしまったため一斗(約十八リットル)くらいを背負い、ネンネコとぼうしをかぶせて赤ん坊を背負っているように見せかけて汽車に乗りました。人吉駅のホームから出ると「ホッ」としていたものでした。

夫婦とも勤めの経験がなく、カライモの作り方も分かりませんでした。家の庭にカボチャを植えてそのツルも食べていました。とてもおいしかったです。幸い近所には農家が多く、農産物をよくいただきました。家主さんも助けてくれました。助け合いの気持ちが当時はとても強かったと思います。

夫はまじめな人で、市役所では重要な役目を任せてもらい五十八歳まで勤めました。自転車で通勤し、帰りに職場の人が四く五人「送ってきました」と寄って、ささやかなえん会をするのがただ一つの楽しみでした。退職後は二人でゲートボールを楽しみ、夫がかんとく、私が選手の一人として県大会で三度の優勝経験があります。夫は平成三年六月十八日、八十歳で亡くなるまで十二く十三回の入退院をくり返しました。入院しても私と娘以外には絶対に傷口の処理をさせず、常に付きそっていました。大部屋にいます、お見舞いの方が多く笑

いが絶えないくらい話はずみましたが、周囲への臭いを気にして、よく個室を希望していました。亡くなる数カ月前、病室の窓から早くに亡くなった友人の家の方を見て、「○○さんはよかなう。自分は戦争で人を殺して来たけん、いつまでも死ねん！」と、悔やむような言葉を発したこともありました。

亡くなった後に遺族年金(いぞく)がありましたが、軍人で負傷したことへの補しょうは何もなく、軍人恩給の要望に二十年、東京の担当部署へ通い続けました。四十年前にやっと認められ、国から補しょうされるようになりとても助かっています。当時、人吉で八十人くらいいた「傷痕(しょうい)軍人の会」は現在三人になってしまい、当時のことを理解できる人たちが減ってしまうのがさびしいです。

戦争によって大きな傷を負い、八十歳まで明るく生きることができたのは、家族の支えはもちろん、本人が強く生き抜こうとした意志であつたろう…と、夫の生き方を聞いた人はどれもがおどろかれます。人工こう門を着けていたことも、本当に限られたごく一部の人以上に知らないことです。

戦争への思いつづった三通の手紙

村上 和男

昭和二年生（北泉田町）

私は昭和二年八代市で生まれ、十五年に旧制八代中学に入学、十九年三月、四年修了でくり上げ卒業となりました。幼少のころから空へのあこがれを強くいだいており、中学生の時はグライダーの飛行練習にも通っていました。中学卒業後は陸軍士官学校を受験しましたが、体格検査で体重が四十八キログラムしかなく、基準の五十キログラムに達せず合格できませんでした。そこで、甲種飛行予科練習生（甲飛）となり、四国の松山海軍航空隊に入隊しました。八代中から予科練に入隊したのは私を含め五人。入隊には親は反対で、担任の先生も「ぜひにも行かなくてよいのではないか」と言われましたが、自分の意志を貫きました。入隊時のことなど、人吉の商家にとついでいた姉にあてた三通の手紙が大切に保管されていて、当時のことを次のように記しています。

『―戦局は益々苛烈^{かれつ}の度を加えつつある今日、大君の為、米英撃滅^{げきめつ}の為、死に場所を得た事は非常に嬉しい次第です―』。また、当時の経歴は「昭和十九年六月五日海軍二等飛行兵、七月一等飛行兵、九月上等飛行兵、十一月兵長、昭和二十年七月一日海軍二等飛行兵曹」となっ



ています。

昭和二十年五月、松山飛行場はアメリカ軍の空襲^{くうしゅう}によってほぼ全めつの大打げきを受け、飛行訓練どころではなくなり、毎日、山中を開こうとしてサツマイモ作りや松根油ほりに追われました。そのころ出した手紙には、『私も元氣百倍、新しき訓練に邁進（まいしん）しております。しかし今は敵機の空襲が盛んになり、それどころの話ではありません。私も誉れある七つ釦^{ボタン}に身を固め、帝国海軍々人として決戦場に参加出来ることとなりました。今度会うのは九段で―』。

文面には七つ釦の予科練生のほりと、戦死を予想した九段（靖国神社）などの言葉が記され今、思えば悲しそうな感じがします。

六月初め、部隊全員が集合し、「特攻隊を希望する者は一步前へ」と言われ、全員が前に出て志願しました。ただし、長男はだめで、かつ十キロメートル程度の遠泳が出来ることが条件でした。特こう隊といっても、どのような特こうであるのかは全然わからず、特攻隊の一員に選ばれたことを姉に伝えた手紙には、『私もついに特攻隊の一員となることが出来ました。往きますからには奮闘一番敵艦にぶつかる覚悟でおります…。この事は決して他言しないで下さい』と書き記しています。

訓練のため広島県呉市南端沖合の周囲四・五キロメートル程の小さな情島にあった「第二特攻戦隊第八十一突撃隊嵐部隊伏龍隊」に移動しました。「伏龍隊」とは瀬口晴義著『人間機雷伏龍特攻隊』（講談社）によれば、簡易せん水服を着て海岸から海底に張ったロープを伝い深さ十五メートルほどの海底にひそみ、炸薬さくの量十五キログラムの機雷らいを改良した五式撃雷に竹ざおを取り付けた全長三・三メートルの通称「棒機雷」で、近づく敵かん船底に体ごとげき突してこうげきするという、まさに肉だん兵器による特攻隊でした。しかし、ゴム製せん水服と鉄鋼板かぶとや酸素ボンベ、かん心の棒機雷も量産が間に合わず、十分な訓練を受けることも不可能でした。訓練にはげんでいた八月六日、情島から約三十キロメートル北

の広島市に落とされた原子爆弾ばくだんのきのこ雲を見ました。

その後「室戸岬付近で敵の上陸をむかえうつため待機」と命令があり、移動直前の八月十五日終戦となり一切が無になりました。八月二十六日除隊となり、大きな衣袋を担ぎ漁船で大分に渡り、汽車を乗りつぎ八代へ向かいました。途中、川尻の鉄橋がばく破されていて歩いて川を渡り、また乗りつぎました。八代駅には母と次兄とが出むかえてくれました。

帰省後、義兄の仕事を手伝うため人吉に移り住み、現在に至っています。

主計士官として軍事物資を管理

村 田 泉

大正十年生（原城町）

私は大正十年二月十八日山口県で生まれ、十一歳の時に神戸に転居し、昭和八年神戸の報徳学園に入学しました。同十三年、明治大学予科から大学へと進学。同十八年九月二十五日くり上げ卒業となり、十月台湾銀行神戸支店に就職しました。十二月一日召集され、愛知県豊橋市の第三師団工兵連隊に入隊しました。ここで基そ訓練を受け、ただちに中国へ。長江（揚子江）をさかのぼり南京に上陸して武漢、黄水を経て黄水から約六十キロメートル奥地の

応山県で実戦訓練を受けました。

工兵部隊は陸軍の兵種の一つで、交通・渡河・鉄道等の技術的な仕事を担当し、背囊^{はいのう}にはシヨベル・くわなどの作業道具、肩に小銃を担ぎ、こしには銃弾ほかを着けての行軍は苦しいものでした。実戦訓練のさなか、甲種幹部候補生主計科の試験に合格。部隊と別れて漢口の奥地にある孝感の野戦倉庫に行き、経理学校入学までの間、実地訓練を受け、実習を終えてから南京の陸軍経理学校に第二期生として入学しました。

昭和二十年五月、南京経理学校を卒業。主計見習士官として四百四十五名が日本国内へ転属となり、その一員として博多に上陸。埼玉県浦和で新たに編成された主計部隊に加わり、その部隊から全国各地へと派けんされ、私を含め三名が主計士官として人吉へ配属されました。人吉旅館近くの簿記学校が事務所となっていて、久留米から配属されていた前任将校のもとで糧秣^{りようまつ}（Ⅱ兵隊の食糧）類の責任者を命じられました。主計が管理するのは戦時に必要なあらゆる物で、兵器・衛生材料・糧秣などに分かれていました。

当時は社会全体が極端な食料不足で、戦争の状況よりは九州南部への敵上陸が予想されており、人吉・球磨は物資補給の重要な場としていろいろな物が大量に集まっていました。前

線でさえ十分でなかった小じゅう類も新品が多数保管され、食料品も大豆・コウリヤン・味噌・しょう油・甘味品・乾パン、そのほか毛布などが各地から大量に送り込まれていました。物資の運ば^はんなどには兵隊や住民の協力を得て、それらの物資を学校や民家の土蔵、各所にほ^ほられた防空壕^{ぼうくうこう}に保管しました。

日本が無条件降伏をした昭和二十年八月十五日は、鹿児島方面へ物資を送り出す命令を受けており、国鉄湯前線（現くま川鉄道）の湯前駅で貨車十五輦に乾パンなどの食料品をはじめ物資の積み込みをしていました。そのため天皇の戦争終結のラジオ放送（玉音放送）は聞いていませんでした。しかし終戦と分かったとたんに混乱状態となり、この貨車がその後どうなったのか分かりません。

戦後処理としてまず行ったのが軍関係の書類を焼く作業でした。進駐軍が人吉にやって来る前、若氣^{いた}の至りもあったのでしよう、部隊員数名で軍用トラックに乾パンなど食料品を山積みして、人吉から湯前までの道筋でそれらの食料品を配って回り、沿道の住民からとても喜んでもらった思い出があります。

主計として最後の整理作業を進めているうちに人吉にも占領軍が進ちゅうして来て、軍

じゅう物資についての取り調べが始まりました。進駐軍は鍋屋本館に本部を置き、戦用品保管責任者だった私は必要に応じて呼び出されました。糧秣などについてはそれほど厳しい調べはありませんでしたが、兵器類については徹底的に追及されました。また、居住地からよそへの外出はいちいち、許可が必要で、もちろん故郷へ帰ることさえ出来ませんでした。そのような中、昭和二十一年三月、私は人吉地区林産組合（人吉木材市場）に就職でき、新しい生活の土台ができました。

兵士、機関士として戦争を体験

元 田 袈 見

大正七年生（上永野町）

私は大正七年四月七日、西瀬村上永野町八二三の二番地に生まれ、同十四年西瀬小学校に入学。昭和八年三月同高等科卒業後、父親が私の希望など一切聞くこともなく、人吉九日町の薬局で店員として働くことを約束していたので、この店で働くことになりました。

しかし一年数カ月後、小学校の担任だった先生から「西瀬小の小使（用務員）の仕事があるが、自分で勉強することも出来るから勤めてみないか」とすすめられ、昭和九年七月から学校に



住み込み働くことになりました。当時、検定試験に合格すると代用教員になれる制度があることを知り、ずいぶん勉強しました。検定試験は七科目あり、全科目の合格を目指しましたが何科目かは合格できませんでした。代用教員になろうという気持ちは強かったのですが、夜になると小使室には酒によった先生が来られ、その言動を見ていて失望することが多く、一年二年とたつうちに教師になる気持ちはうすれてきました。

そういう時に、国鉄の採用試験があり合格しました。昭和十二年十二月に国鉄人吉機関区に就職。最初は機関助手として働いていましたが、翌年、徴兵検査を受け乙種合格となりました。

同年十二月に召集令状が来て熊本第十三連隊第二大隊第五中隊に入隊しました。おもしろいことに、同時に徴兵検査を受け甲種合格だった者が、私たちより二十日程おくれて入隊してきました。軍隊では一日でも入隊の早い者が優位となりずいぶん得をしました。新兵訓練では機関銃きかんじゅうの手入れがあり、私は国鉄時代に機械について十分勉強していたので、新兵の中でただ一人、機関銃きかんじゅうの分解手入れを短時間で仕上げることで、すぐに機関銃手に配属されました。

三カ月の訓練後、昭和十四年二月中支(中国)派けんとなり上海に上陸。独立混成第十八旅団二中隊に編入されました。さらに南京から揚子江を船でさかのぼり九江に上陸し、同三月南昌攻撃に参加。その後、漢口・武漢・武昌でけい備に当たりました。軽機関銃きかんじゅうはじゅう手一名、だん葉士二名の三名で行動し、戦とうでは部隊の最先端でえん護射げきをしました。戦とうはむごいもので、接近してきた敵との戦いでは目の前で戦死する者もあり、川をはさんだ百メートル程のきよりの戦とうでは敵兵の顔が見えるほどでした。戦とうで記おくに残っているのは、敵兵との銃撃戦じゅうげきでわが軍が土手を防御としていた時、戦友の一人が土手を乗り越えて銃撃しているうちに敵の銃弾で鉄兜かぶとをかぶった頭に貫通銃創かんつうじゅうそうを負い戦死したこと

です。

昭和十六年七月、除隊となり上海から日本の留守部隊に帰りました。第二次大戦が迫っていた時期に除隊して帰国できたのは、軍の物資を輸送する動脈だった国鉄の機関士を補充する必要があったのではないかと思います。

人吉機関区に復職し、昭和十七年三月に結婚。復職一年十カ月後には機関士となり、その後一年半熊本機関区に移り、鹿児島本線で鳥栖駅までの運転を務め、また人吉機関区へと戻ってきました。こうして戦中・戦後機関士として勤務し、機関車の検査係となり、新人の指導教育を十五年間担当し、昭和五十年三月機関車検査長で退職しました。

戦争に翻弄ほんろうされた青春

山田 次男

大正十四年生(五日町)

昭和十七年十月、私は人吉中五年生を中退し、神戸商船学校大阪分校の機関科に入学しました。制服・制帽、教科書なども支給された上に三食付き、全寮制で全部無料でした。食事は海軍からの補給があるので一日五合、食べ盛りの私たちには十分な量でした。戦争中では

ありましたが神戸の町並みは美しく、物資も何でもありました。

翌年十月十五日、横須賀第一海兵団に入団しました。六カ月の教育期間で前半三カ月は午前中が学科。午後は手旗手先信号・カッター・毒ガス訓練等がありました。後半の三カ月は機関・航海・通信・工作・砲術学校等を見学しました。

昭和十九年三月十五日退団し人吉に帰り、わが家で一息つき四月一日、呉海軍工廠工場へ入所しました。ところが黄疸になってしまい、また人吉に帰り二週間療養し、回復後は再び呉に戻り実習に参加しました。半年の工場実習も三カ月で、二年課程も一年に繰り上げて、乗船実習もなく全課程修了となり、神戸の共栄タンカーに入社しましたが、何と、今度は自宅待機となりました。帰郷しても何もすることがなく、原ん城に畑を借りて自給自足のためにカライモやジャガイモ作りを始めました。この頃になると、中学時代の同級生に召集令状が来て次々と出兵して行きました。

十月、「シタクシテ、スグコイ」との乗船電報がきました。この決まり文句は私たちにとっては召集令状と同じものでした。早速、父が麻苧^{あさお}で編んでくれたロープと鰹節^{かつお}と短刀、それに冬夏の衣類をバッグに入れて、市役所で住民票・食糧キップ・衣料キップの異動手続きを

して、人吉駅を出発しました。

翌日、神戸に到着。出社すると、「船がないので相生の播磨造船所で待機」との命令がありました。当時は口が裂^さけても「船が沈没した」とは言えない時代で、播磨造船所ではエンジンの試運転を見学したりしました。毎日同じようなことで、今にして思えば、この研修はエンジニアにとってはまたとない勉強の機会であり、もっとよく会得^{えとく}しておけばよかったと悔やまれます。

昭和二十年二月、「資材がない、鉄板がない、日本に数日分の燃料しかない」という情報を知りました。「それでは軍艦も動かない。もう、この戦争も長くはない。戦争に負けるのではないか…」と思いました。しかし、そのことは決して口に出して言うてはいけないことでした。その頃、会社の寮では伝染性皮膚病^{ひふびょう}の疥癬^{かいせん}が流行し、私も手指の間が痒^{かゆ}くなって、「この状態では乗船しても治療も出来ないし、乗船員に感染させても悪い。完全な身体で戦場に行かねばならぬ。家で治療します」と会社に申し出て帰郷しました。

「ついこの前、皆に見送られ人吉を出発し戦場に行くものと思っていたのに、四カ月でまた人吉に帰るとは…」と、独り嘆^{なげ}きましたが、母親はありがたいもので、薬湯入りの風呂を

沸かしてくれて、早く治すことができました。

四月のある日、川で弟と鶏をつぶしてさばいていると、空襲警報と同時に大畑の上空に二十〜三十機の飛行機がハエのように見えました。それは敵機で、まもなく新馬場の方から低空で私たちがいる方に飛んできました。私と弟は「ここなら弾も通らないだろう」と石垣の間にびたりと身体を寄せました。敵機は屋根すれすれにブーと飛んできて、両翼から真っ赤な機銃を撃ちながら飛び去り、恐る恐る頭だけ出して見たら、水の手橋すれすれをグラマンが通り過ぎ、白いマフラーをなびかせた操縦士が見えました。人吉初空襲の出来事です。こんな田舎まで敵の艦載機にやられるようになったのです。

日々の生活は、夜は灯火管制で電灯の下だけが明るく、警戒警報、空襲警報と戦争は激しくなり、新聞は連日「敵の軍艦〇〇隻、飛行機〇〇機撃墜」と報じ、国民はこれを信じて苦しい生活に耐えていました。食料は全て配給制で、毎日、出兵兵士を婦人会や町内の人々が「祝入隊〇〇君」と書いたのぼりを立てて、駅の広場で「万歳」の声で送り出していました。

六月十日、再度出社の電報を受け取り、人吉を汽車で出発しました。途中の久留米の鉄橋は爆撃され不通で、佐賀経由で神戸を目指しました。広島では畑の真ん中で空襲のため汽車

が停車し、乗客は蜘蛛の子を散らすように客車より走り出て畦に伏せました。空襲解除となり再び汽車は動き出しましたが、岡山ではトンネル内で停車、外は空襲中とのことで車内は煙でもうもうとなりました。明石付近に来たらゴットンゴットンと微速になりました。線路両側に二十メートルぐらいの穴ぼこがあちこちにあり、水が溜まっていました。爆弾が落ちた跡でした。

ようやく神戸に到着して、へとへとに疲れて会社に行き「只今到着しました」と報告したら、船員課長が「君の乗る船が昨日博多港で沈没した。また自宅待機してくれ」と言いました。「おかしいな、昨日博多を通ってきたのに……」。本当は津軽海峡で敵に空爆されて沈没していたのでした。神戸には宿泊する所はなく、折り返しました人吉に帰ることにしました。出発の際、見送りしてくれた人たちと顔を合わせるのには恥ずかしい思いですが、仕方ありません。帰途、食べ物はなく停車駅ホームで水を飲んで何十時間もかかり人吉にたどり着くことができました。再度、住民票・食糧キップ・医療キップ等の転入手続きをしました。転出・転入・転出・転入と二度も同じ手続きしており、変な目で見られてもその理由をはっきりとは言えませんでした。

また人吉での生活が始まりました。今度は下青井の製鉄所に勤め送風機係になりました。

しかし、まもなく友人の紹介で新たな職場へ移ることになり、その職場に履歴書を持参する日が奇しくも八月十五日でした。昼の十二時から玉音放送がありました。ラジオからは『耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍び…』と音声が続いていましたが、ガガガーと雑音が混じり何と言われているのか全く聴き取れず、しばらくは「しっかり頑張れ」と言われたのだろうと思っていました。そして身分証明書を取りに行った市役所で「戦争に負けた」ことを初めて知りました。

私の青春は満州事変・上海事変・日中戦争・太平洋戦争、そして朝鮮戦争と戦争ばかりでした。戦争は一般市民がいちばん哀れです。「平和」、こんな良い言葉はしっかりと守り続けていかなければならないと思います。故郷は空気もうまいし、山は緑濃く、川は水清く、人は良く、いちばん良い所だからです。

ひさんだった戦時下の教育

山中 朋子

昭和八年生（合ノ原町）

昭和十九年から二十年の戦争が最もひどい時、豊橋（愛知県）と静岡は空襲にあいました。家は町から少しはなれていたので焼けずに済みました。そのころはモンペに防空ずきん、消毒液を入れたカバンを肩にかけ登校しました。学校ではほとんど授業がなく、目や耳をいさいで「伏せ」の練習があり、地面に水たまりがあっても、馬ふんがあっても号令がかかると、どこでもやらなければなりません。運動場には天皇陛下の写真をまつた奉安殿があり、ベルが鳴るとどこにいても奉安殿を向き直立しました。

四大節（^{しだいせつ}戦前、祝祭日とされた四方拝・紀元節・天長節・明治節の総称）の時は、頭を下げて校長先生の話の聞きました。鼻をすするだけで、前に出されて往復ビンタという厳しさで、実際に十名ぐらいの人が鼻をすすったため、たおれそうになるくらいビンタをされるのを目にしました。兵隊上がりだった校長先生には、だれも反こうできず、今でもそのこわい顔が浮かんできます。



各家庭に一つ、または二〜三げんに一つ防空壕ぼうくうこうがほってありました。空襲警報くうしゅうけいほうがあると入りましたが、大東亜戦争初めのまだ戦争がそこまでひどくないころは、ウサギを抱いて入って遊んだりもしていました。

昭和二十年、焼夷弾しょういうだんが私の町に落とされ町が燃えました。夜だというのに昼間のように明々と燃え、山の方へ避難して田んぼの茶の木の下にはいつくばって「なむあみだぶつ」と手を合わせ祈りました。町中が燃えているので、どうすることもできず、ただ祈るしかできません。火災に備え、バケツで水をかけるバケツリレーの訓練が学校であっていましたが、実際にはそんなものでは間に合いませんでした。兵隊さん

も何もできず、山の方へ馬で避難しているのを見ました。

翌日、学校で「何もさわるな!」と言われていたにもかかわらず、男子生徒が不発だんらしきものをさわり大ヤケドを負いました。登校途中にはコンクリート道路に人の形をした焼けあとをいくつも見ました。登校すると生徒は全員、焼けあとに行き、くぎ拾いをしなければなりません。鉄類が不足していたため、細かいくぎも大事だったようです。

そのころ、蒲郡（愛知県）が震源地の大きな地震がありました。上は空襲くうしゅう、下は地震、早く降参しろと書かれたビラが米軍機からバラバラとまかれたこともありました。

食料は配給で、切符でコッペパンを買うのにもすごい行列ができました。おかゆやだんご汁が食べられたらごちそうで、カライモをツルまで食べていました。いなごを捕り袋の中に一晚入れておき、便を出させてからつくだににしています。砂糖も手に入らない時でしたから、しょう油か塩にてあったかもしれません。物々交換でやっと米を手に入れても、警察官に見つかりと取り上げられ、留置場に入れられることもありました。

夜はランプに黒い袋をかぶせて、外に明かりがもれないようにし、家は常に開けっ放しでいつでも逃げられるようにしていました。広島と長崎に原子爆弾ばくたんを落とされる前後が一番激

しいこうげきを受けました。それ以前の戦争では勝ってばかりだったので、「日本はちょっといい気になっていたのかもしれない…」と後に思いました。

終戦をむかえたのは十三歳、小学六年の時で、「米兵が来て、暴行される」とうわさが流れ、こわいと思って逃げようがありませんでした。うわさがデマで済んでよかったと思います。食料難もあって、親の出身地でもある人吉に知人をたよって引っ越しました。人吉駅前にやみ市があり、カライモ三個くらいを十円ぐらいで買っていた覚えがあります。トイレの紙も鼻紙も新聞紙で、鼻をかむと鼻の頭が真っ黒になりました。そのころは戦争で亡くなった人が多く、「産めよ、増やせよ」と子どもの多い人は表彰されていました。

教師として戦前・戦後を生きる

山本ヒサ

昭和三年生（南泉田町）

私は昭和三年人吉市で生まれました。同九年にじん常小学校に入学し、二年生から五年生まで東京音楽大学を卒業した先生にピアノを習いました。学芸会では必ずピアノ演奏をさせられ、寒い日は温めたこんにゃくを担当の先生が私の両方の手ににぎらせて手を温めてくだ



さり、演奏がスムーズにできるように心配りをしていたきました。昭和十五年人吉高等女学校に入学しましたが、十二年に日中戦争が始まっており、さらに十六年には大東亜戦争が始まり、学生生活は空襲警報くうしゅうけいほうの中で過すごさなければなりませんでした。

祖父は小学校長、父は人吉高等女学校、おばも小学校教師という家庭環境で育ったので、私も教師になるのが将来の夢でした。

昭和十九年三月、女学校を卒業しましたが、戦争の最中で師はん学校受験を断念しなければなりません。当時、女性の進路は女性でない身隊、代用教員、結婚のいずれかで、私は代用教員を選びました。人吉市内に住んでいたの

で東小、西小、東間小のいずれかを希望したところ、西小学校に勤めることとなりました。ピアノをひくことが出来たので音楽の指導も受け持つことになり、これからが私の音楽教師としての始まりとなりました。

昭和十九年は戦争がひどい時で、防空ずきんをかぶり救急袋を肩にかけて通勤し、帰りにB29の機銃掃射きしゅうほうしやを受けたこともありました。戦時下であっても、生徒たちには一生けん命に教えました。昼食の弁当を持ってこない生徒もいて気をもみました。また中には弟妹を背負って授業を受ける生徒もありました。父親が戦死して、母親が大黒柱になって働いていたという事情があったのでしよう。それで私の母親が着古しのはんてんや古着を用意して、そつと持たせたりしたこともありました。そのような中、教師の身で出征された先生もおられ、つめえりの軍服姿で生徒たちの前に立ち、りりしく出征のあいさつをされたことを今でも思い出します。このころ、学校での私の役割は奉安殿の中に納められている重要書類をきん急の際、安全な場所に移し、保管するという仕事でした。

昭和二十年に終戦となり、二十二年に新しい教育制度が始まりました。新制中学は教科制で、私は第二中学校では音楽専科の教師となりました。戦争も終わり、平和な中での音楽の

授業では、中学生たちから流行歌やジャズを演奏してくれとせがまれることもありました。

戦争で師はん学校進学のを失っていた私は、戦後、教員免許を取るため通信教育、レポート提出と大変な労力を使いました。免許取得のための最後の試験日はちょうど学校の卒業式の日で、君が代、校歌斉唱などのピアノ伴奏を終えて、タクシーで人吉駅までかけつけました。やっと列車に間に合い、熊本商科大学(現熊本学園大学)の試験場に無事とう着し、試験を受けることが出来ました。

来た道、これからの行く道

山 本 泰 弘

昭和七年生(下原田町)

私は満州の旅順で生まれ、関東軍の大佐だった父の転勤で瀋陽しんやう(今の奉天)へ移り住みました。いつも家族一しょの楽しい暮らしで毎朝、副官の人が父をむかえに来ていました。私が小学五年のある日、父から日本に帰るよう言われ、母、姉二人、妹、弟と六人で帰国。最初は母の里の神瀬に行きましたが、翌年の夏に大雨で家が流され、父の里の白石に引っこしました。

女学校を卒業した姉が代用教員をしていたおかげで、私は昭和二十年四月に県立人吉中学

校に入学。ある時、米軍のグラマン機が人高通りをきしゅうし、校長室の歴代の校長先生の写真の間にたまが当たったことがありました。授業はほとんどなく、軍事教練や棒を手榴弾しゅりゅうだんに見立てて投げる訓練、高原でカライモを植える作業などを行いました。分散教育が始まると、地元の芦北でい防や防空壕ぼうくうこうを作ったり、農家への勤勞奉仕で田植えをしたりしました。

八月十四日、先生から「明日は全員家におれよ！」と言われ翌日、ラジオの天皇陛下のお言葉で日本が戦争に負けたとわかりました。二学期からは戦時中に使った教科書をすみで消したり破ったりし、新しい教科書は新聞紙大の印刷物を自分で製本して使いました。

父の消息もわからず、姉の収入で学費などを出してもらっていたので三年の時、担任の春木先生に学校をやめると話して行かなくなりました。ある日、山仕事をしていると、春木先生が「休学にしとくんね」と教科書を置いていかれました。新聞配達や土方をしましたが思うような収入にならず、住み込みで有佐のかわら焼きの仕事に行きました。初めて親元をはなれての生活は不安で、ねん土をミキサーで練る慣れない仕事で指を切ったりしました。昼間は親方の小さな子どもさんをおぶって仕事をし、夜は先生が持ってこられた教科書で勉強。親方の娘さんに勉強を教えたりもしました。今まで経験したことがない生活に、戦争は

何と厳しいのだらうと思いました。

一年間、かわら焼きをして中学四年に復学。学制改革があり、同級生は人吉高校の一年生になっていました。休学にしてくださった春木先生のおかげで復学でき、授業料めん除の手続きも教えていただきました。音信のない父をうらみましたが、良い先生に恵まれ幸せでした。受験期になり、熊本大学の教育学部に合格した場合、卒業後五年間は芦北郡内に勤務という条件で、しょう学金などのえん助がありました。春木先生という恩師にめぐり会った私は教員の道を選び、五年の芦北勤務の後、人吉東小学校勤務になりました。

戦後、よく留されていたシベリアからの引きあげ者の名簿が新聞にのり、父の名前がないかと毎日、目を通していました。ある日、最後の引きあげ者に父の名前があり、休みをもらって舞鶴港までむかえに行きました。昭和三十一年七月六日、私が二十五歳の時です。港では元部下の人が「お帰りなさい」と父の名を書いた紙をかかけてくれ、父は九十一歳で亡くなるまで人吉で家族と過ごしました。

教員を退職してからはボランティア活動で、夏休みの小学五・六年対象のボランティアスクール、中学生対象のボランティア体験教室、ボランティアワークキャンプなどを通して、

子どもたちに人間愛の尊さを伝えていきます。子どもたちが自分の命はもちろん、人の命を大切にするためにも、このボランティア活動が続けていきます。

高齢者の方への接し方。どのように言葉をかけたらいいか。どういう形で自分気持ちを表したらいいか。子どもたちは一人ひとり真摯に考え、学んでいます。そして、帰り際の言葉は、「さようなら」ではなく、「来年また来ますから、お元気で」と、来年の再会を楽しみにして施設を後にします。自分の命はもちろん、他人の命も大切にする子どもたちとなるよう、このボランティア活動が続けていきたいと思います。

心を大切に人を大切にして生きよう

横川 克己

大正十三年生（願成寺町）

私は昭和十二年尋常高等東小学校高等科へ入学しましたが、勉強が嫌いだったこととお金欲しかったので中退し、長崎の三菱兵器製作所に入所しました。

仕事内容は魚雷を作ること、部品の歯車調整においては、百分の五ミリも狂ってもいけない緻密な仕事を受け持ちました。もともと勉強嫌いではありましたが、辛抱強く、手先が



器用だったので、頭のいい学校出の人より給料は良かったです。しかし、十八歳の時に結核にかかり三菱を辞めて人吉に帰り、二年間総合病院で治療することになりました。

太平洋戦争もいよいよ厳しくなってくると、身体に少しぐらい障がいがある人も入隊させられるようになり、私は結核が完治していたわけではなかったのですが、魚雷仕上げの腕をかわれたのか、昭和十九年十二月、陸軍へ入隊し、四国の松山に行くこととなりました。ここでは、上官から打たれるのが仕事のようなものでした。

昭和二十年、私は山口に異動させられ、特攻隊の飛行機の脚の整備あしをすることになりました。しかし、その頃は飛行機もなく、いろいろな部

品を寄せ集めて飛行機を整備し、送り出していました。

山口を飛び立った飛行機は鹿児島県の知覧を目指しました。二十機ほどの飛行機を見送りましたが、その中の十六歳の少年兵二人のことを今でも思い出すと涙が出てきます。彼らは一生懸命、純粋に国のため、親、兄弟のためと笑って飛び立っていきました。私が最後に整備した飛行機に乗って行ったあの二人の少年とは話したこともありませんでしたが、今でもあの笑顔が心に残っています。生きて帰ってきたのか、亡くなったのか分かりませんが、飛び立った兵士たちの心を思うたびに、どういう気持ちだったのだろうかと考えます。

山口には韓国人が多く、その人たちとかまぼこ兵舎を造る工事をしていて、グラマン機による機銃攻撃が始まり、私たちは軒先に隠れ、とても怖い経験をしたことがあります。

八月十五日終戦を迎えましたが、兵舎には物資が残っており、上官は「みんな寄れ、タバコでも何でも持っていけ」と言っていました。

八月末、帰郷の途につきました。途中、山口、福岡では何かを燃やしていたのでしょうか、煙があちこち上っていました。軍事書類なのか兵舎なのか分かりません。引きあがる際は「中国人から狙われるから軍服は着ないように」と言われていました。後でデマだと分かりまし

た。帰郷の途、いろんな人からもらったボロボロの服を着て帰ったので、母がびっくりしていました。

今、私の人生を振り返ってみて思うことは、今まで困ったことがあると、誰からか助けてもらっていたことに気付きます。私には『不幸を与える人は、私を幸せにする人』という信条があります。そういう思いで生きているからでしょうか、何があっても幸せと思います。今の人は、自分を軽率に見ている人が多いようです。もっと自分の心を大切に、自信を持って生きていってほしいと思います。

一人暮らしの私を元気にするためでしょうか、私の所に三歳のひ孫が毎晩泊まりに来ます。それは、一緒に寝かせてもらう幸せを感じる毎日でもあるのです。

様々な工夫をした戦時下の生活

吉澤 テル

大正十一年生（願成寺町）

私は大正十一年五月、一勝地三ヶ浦松谷に生まれました。小学校は那良口駅から一勝地小学校へ、女学校（現在の人吉一中）へは那良口駅から人吉駅まで汽車で通学しました。

昭和十七年四月三日、中根典雄と結婚。夫の母と同居し母から百しょう仕事をみっちり教わりました。麦作りやカライモ作り、寒い中で子どもを背負ったの麦ふみなど、今でも思い出します。そのようなこともあって野菜には不自由しませんでした。

当時、芦原一帯では麻をさいばいし、何げんもの農家が私の家に麻の木を持って来ていました。夏の暑い時に麻の木を蒸して皮をむき、それをお百しょうさんが天日に干していました。当時は子どもが産まれた時、素直に育つように麻のうぶ着を着せていました。

昭和十八年ぐらいまではまだ戦争の激しさはそう感じませんでした、やがて空襲警報が鳴り出すようになり、防空壕ほりが始まりました。わが家でも村人をやとって、木を切ってきて防空壕を造りました。

昭和十九年になると敵の艦載機が飛来し、夜でも空襲の際にすぐ家から外に出られるよう戸を開けて寝ていました。油を取るため、とぼし（松の根）掘の割り当てがあり、頭上を敵機が舞う中、とぼしを蓑原まで担ぎ上げたこともあります。鬼木川沿いの田んぼには高射ほうの陣地があり、しゅう来する敵機めがけて発ばうしていました。

当時の暮らしで、次のようなことが私の印象に残っています。

【消火訓練】 しょういだんが落ちた後の消火をするため、鬼木川の水をバケツに汲んで標的に水をかける訓練。

【モンペ作り】 持っている派手な着物を黒色に染めて、モンペを作る。

【配給】 食料購入通帳を持って、米、カライモ、パン、アワ、麦、砂糖、塩などを買いに行く。主食はカライモに米つぶがついている食べ物ぐらいだった。衣料品購入もキップが必要で、キップがなくなったら何も買えなかった。だから体操ズボンなどは破れた部分を何度もミシンでつくろってはいていた。

【夫の思い出】 夫は昭和十七年から人吉東小学校に勤務していた。またグライダーの指導者になる訓練を阿蘇の赤水や滋賀県大津まで受けに行ったこともあった。当時、人吉には育鷲号と中津留号の二機のグライダーがあって、航空少年隊の子どもらにその操縦を教えるためだった。訓練は人吉中にあったグライダーを分解し、生徒らと歩いて高原まで運び、そこで飛行訓練していた。

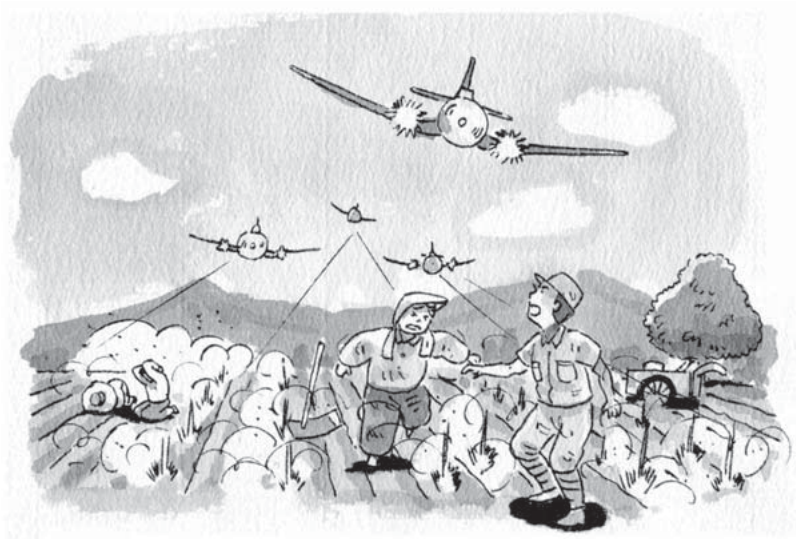
戦争は今でもゾツとする体験

吉田政人

昭和八年生（鬼木町）

私が小学生のころ、長男だった兄・秋男が十八歳で「自分が戦争に行かないと日本は負ける」と熊本十六部隊に志願入隊しました。学業成績が優秀な兄でしたが、母親は「次男（私）がいるから家の方は大丈夫：」と、覚悟の上で兄を送り出したようです。しかし、昭和十九年、兄の戦死の知らせを受けました。特攻^{とっく}に入隊した翌年のことでした。戦争が終わってから友人が遺骨を届けてくださいました。

戦争当時は小学生。農家だったためか、食べ物には不自由しませんでした。収かく物は何でも供出していたようです。そのころ、現在の西小学校のことを西国民学校と呼んでいました。戦時中は学校へ行かず、分散授業が地域ごとに行われていました。私の地区では近くの山口宅で行われており、西校から先生が来てくださっていました。戦争が和らいだ時は学校へ行くことができました。先生に会うと、頭を下げる「礼」ではなく、「敬礼」をするように指導を受けました。また、教科の授業よりも運動場に集合して、耳と目を手でふさぎながら「伏せ」の訓練をしました。



人吉では空襲はなく、米軍機よりの機銃掃射^{きじゅうそうしゃ}がほとんどでした。特に学校は兵隊さんが集まる所に見えたのか、よく機銃掃射^{きじゅうそうしゃ}をされました。鬼木町には高射ほう台が何台もあり、木の陰から見ていたことがあります。敵機のB29を狙ってうつもの一つも当たっていませんでした。母親にだかれてその様子を見た近所の赤ん坊は、ドーンという激しい音で耳が聞こえなくなりました。その方は現在六十四五六十五歳になっておられます。八代で飛行機が一機落ちたと聞きましたが、鬼木町でうったものが当たっていたのかどうかは分かりません。相良村には海軍の飛行場があり、敵機が急降下^{きじゅうそうしゃ}して機銃掃射するのを大きな木の下から見た

ことがあります。その時、兵隊さんが数名と住民四名ぐらいが巻きぞえで亡くなってしまい、高原の元飛行場近くには名前を刻んだ石ひが今でもあります。田んぼで作業していても、機銃掃射を受けたと聞きました。父が「空襲警報！ 警報！」と大声で知らせて回っていたこともあります。家には庭に防空壕が二か所掘ってあり、良い着物を入れたダンスも防空壕に入れてありました。学用品はなく買う品物ありません。靴も新品ではなく、つくろって使いました。戦時中は若い働き手がいなかったため、子どもも農家の田植えや稲刈りの手伝い、防空壕掘りをしていました。学校には大きな防空壕が造ってありました。

人吉の終戦直後は、兵隊さんが家の玄関で敬礼して食べ物の物乞いをしていました。自分の家族や近所の人たちはみんな、リヤカーを引いて高原の飛行場へ兵隊さんの使った毛布や品物をもらいに行きました。物がなかったなので、毛布一枚でも大事でした。

戦争は今思ってもゾツとするような体験でした。絶対に二度と戦争をくり返さないでほしいです。

球磨川べりで機銃掃射にあう

吉 村 惣四郎

昭和七年生（瓦屋町）

私は昭和十二年熊本から人吉に引っ越し、翌十三年人吉西小学校に入学しました。当時、父は熊本でもご服商を営んでいました。

昭和十六年に太平洋戦争が開戦となりました。戦きょうについて、学校の先生からは授業の時にいつも「日本はアメリカに勝っている」と聞かされていました。先生はその都度、シベリアから南方の島々までの地図を黒板に書いて、日本軍が有利に勝ち進んでいる様子、うを話してくれました。そして「この戦争はアメリカから仕かけられたもので、アメリカを日本に引き寄せるだけ引き寄せて、一発逆しゅうをねらう作戦である」という話を聞かされていました。ミッドウェー海戦の時も新聞もラジオも日本圧勝の情報だけで、私も周りの人たちもすべての人が日本は勝つと信じさせられていました。先生が黒板に書かれていた地図は、今でも私の脳裏に焼きついていきます。

私は小学校二年生の時から父のすすめで書を学んでいました。当時は洋紙にも不自由して



いましたが、和紙も手に入りにくい状況ようで山田川沿いに梶紙^{かじ}を漉^すいている方がいたので注文したりしました。

西小学校ではこのころ、入隊検査が行われており、私もその光景をよく目にしていました。若い男性や私の父ぐらいの年れいの人もいて、真っぱだかになって犬のように四つんばいになったの身体検査が行われていました。そのころは軍隊に自ら志願して入隊する人もいました。ただ、上級学校に進学出来る人は入隊しませんでした。

昭和十七年ごろから食べ物が不自由になってきました。そのためカライモのツルも食用にしました。私はよく小麦粉をこねて蒸して食べま

した。砂糖も餡^{あん}も入っていない団子でしたがおいしかったです。

球磨川の魚も大切な食料源で、友達とよく魚とりなどして遊んでいましたが、その球磨川べりで昭和十九年三月十八日、アメリカのグラマン機による機銃掃射^{きじゅうそうしゃ}を受けました。米兵が首に巻いた白いマフラーが私の頭のすぐ上で見えるくらいに低空飛行をしながら、私たちをこうげきしてきました。川原にはいくばり難をのがれましたが、こわさのあまり、こしが抜けてしばらくは歩けませんでした。さらに五月十四日にも機銃掃射^{きじゅうそうしゃ}があったと覚えています。

昭和十九年、私は人吉中学校（現人吉高校）に入学しました。このころ、授業をきちんと受けた記おくはありません。英語の授業もなく、授業の代わりに作業をすることが多かったようです。天気の良い日は防空壕掘^{ぼうくうこう}りで、高原や永野（人吉）あたりまで出かけました。この作業で同級生二人が生きうめになって死んでしまったことがありました。また農家でのほう仕作業もありました。稲刈^{いねかり}を手伝っていて左手人差指に大けがをして、病院で手当てをしてもらいましたが、今でも少し曲がったままになっています。雨天の日は薩摩瀬の高千穂神社に集まって草履作^{ぞうり}りをしました。

兄は昭和十九年に二回目の出征をしました。母は毎日仏前^{かけぜん}に陰膳^{かげぜん}を供え、青井神社に参拝

し無事をお祈りしていました。

昭和二十年八月十五日、やっと戦争も終わり中学校卒業前には書道もがん張り、生徒会活動も熱心にやって、楽しく学業を終えることができました。しかし、今でも空を見上げると南の方からB 29機がこちらに向かって飛行してくるのが目に浮かんできます。戦争は絶対にしてはならないと思います。

「戦争体験と平和への想い

緊急調査に^{さん}あたって」

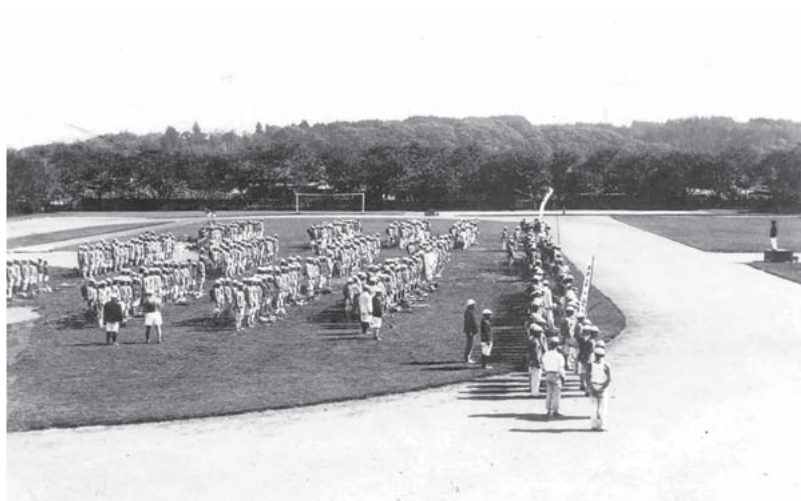


人吉中学校校門

旧制中学校

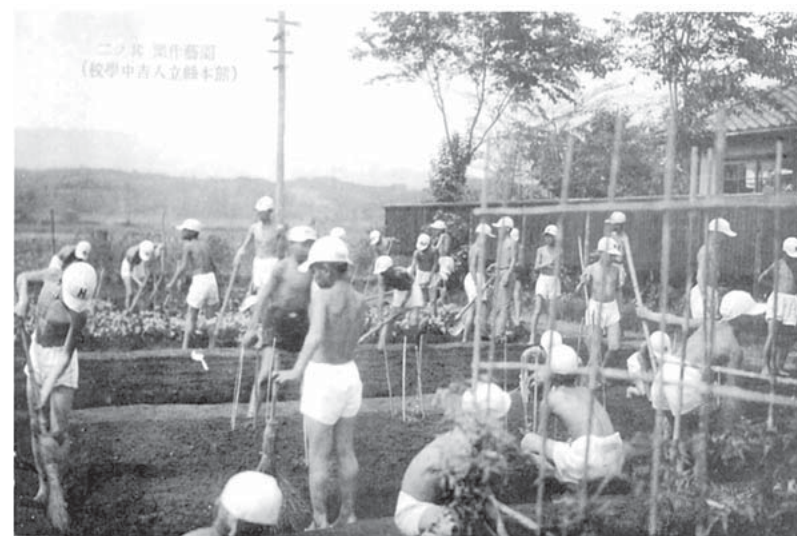
黒肥地 改太郎

昭和十二年七月七日に勃発した支那事变も二年目を迎えた昭和十四年（一九三九）四月五日、熊本県立人吉中学校に入学。正門は何故か普段は出入り禁止で学校への出入りは通常門（現在人吉高校正門）からであった。入ると右（現在の青年の森）樹々の中に人吉中学校初代配属将校で第六師団歩兵第十三聯隊第一大隊長として満州事变で名誉の戦死をされた故陸軍歩兵中佐越替貞一先生の銅像を拝し、桜の樹にかこまれた芝生の広い校庭、遠くその先に寄宿舎がある。目を左にうつすと中央に三階望楼の二階建ての校舎、講堂、兵器庫、農業倉庫、中に入ると泉水築山のある宿直室、奉安殿、柔道場、記念図書館、



集団勤労奉仕作業の出発式

式には五年生の代表が参加された。
 七月七日には支那事变満二年記念行事が挙行された。
 七月八日から全校生徒奉仕作業が実施された。
 A級は一年生から五年生まで学校の柔道場に、
 B級は西瀬村戸越の工兵廠舎に、そしてC級は
 城内グラウンドに天幕野営の宿泊訓練であった。
 C級には近くの軍人会館に泊まった者もあった
 ようである。
 十月十三日、中学校に入って初めての体育大
 会（運動会）。五年生の勇壮な模擬演習を珍しく
 見学した。
 十一月十日、伝統の四里長距離競走、一・二
 年の出発後十分おくれで三年生以上の上級生が



農学の時間

黒堀の校長・職員官舎そして西側に農業実習畑
 がひろがっていた。
 A・B・C級に分けられる。服装は、黒の制
 帽、夏は霜降り冬は黒の制服、襟にはI・A、
 I・B、I・Cの徽章を付ける。上着の左脇に
 は銃剣を吊るす小さい帯が付いていた。編上靴
 に巻脚絆、登下校時常時着用、教科書を入れる
 背嚢は箱は合成品で校章のついた蓋は牛皮の一
 枚皮だった。授業時間割も小学校と変わりまず
 教練、徒手各個教練、変体かな交じりの「軍人
 勅諭」の暗誦。武道は剣道か柔道のいずれかを
 選択、そして農業、英語、漢文等々。
 五月二十二日には「青少年学徒二賜リタル
 勅語」の下賜、皇居前広場で挙行された御親閲



野外教練（錦町高原）

七月二十二日から二十六日までの集団作業は一
組城内グラウンド、二組工兵廠舎、三組学校の
柔道場が宿营地となる。この行事もこの年を
以って終わりとなる。

八月二十三日、支那事変三周年ということで
第六師団の戦意高揚と戦力示威行動として木山
の淵にて戸越の廠舎に演習に来ていた工兵第六
聯隊将兵による架橋、渡河演習が実施された。
全校生徒左岸側にて見学、五年生は演習に参加
される。別の日下流の矢黒の淵では騎兵第六聯
隊将兵による水馬演習が行われている。これ等
の演習に参加された兵隊さんは熊本の営舎に帰
隊後九月五日には北支戦線に出征されている。

昭和十六年三月五日、紀元二千六百年記念行



集団作業の工兵廠舎（戸越）に宿泊

出発、山田小学校近くで上級生の先頭集団が追
い越す。

十二月二十四日、冬季心身鍛錬行事として兎狩
りが実施された。場所は忘れたが「チヨイーチヨ
イー」と杖で地面を叩き乍ら駆け回ったこと、
校庭での食事が思い出される。

明けて昭和十五年三月二日卒業式、五年
生の一種生、二種生そして成績優秀者への
相良子爵賞授与もこの年で終わりとなる。相良
子爵といえは来校の折は校庭で閱兵分列式が挙
行された。

昭和十五年四月、二年生に進級。組分けは外
国語排斥から一・二・三組となる。この年は
紀元二千六百年ということで記念行事がある。



昭和 19 年 3 月 人吉中学 16 回生卒業写真

して九月十九日大阪朝日新聞社より滑空機一機が寄贈された。滑空機といえば木上の高ノ原に訓練に行った。教官の東矢秀行先生の見事な飛翔を仰ぎ見て憧れたものである。そして高ノ原といえは野外教練で行軍、演習と鍛われたこと、食糧増産の為甘藷栽培、人吉航空隊の施設建設の為煉瓦運びの奉仕作業に出没した。十八年九月には甲種飛行予科練習生の入隊を人吉駅に見送る。十一月三日、明治節組対抗の長距離競争がある。終了後、五年三組は永国寺で海軍兵学校三名、陸軍士官学校三名、甲種飛行予科練習生三名の合格者の送別会を行う。十一月七日、八日県下中等学校連合演習に出動。七日朝人吉駅出発、小川駅に下車、隊伍整え豊福村の会場

事として藍田村有林に檜の植栽作業がある。四月一日生徒定員一〇〇〇名、学級数二十と定められ、生徒制服は国防色(カーキ色)、戦闘帽着用となる。三年生に進級三八式歩兵銃、三十年式銃剣がわたされる。今までの徒手教練から執銃教練となる。この年から体力増強の為、「体力章検定」が実施された。百米を十五秒以内、三千米を五分以内、走り幅跳びは四米以上、十疋俵を担いで五十米を十秒以内、そして手榴弾投擲十五米以上と達成記録によって八咫鏡を型とった上級は金色、中級は銀色、初級は銅色の金属徽章を襟に付けられた。これも後には布製になり後ではなくなったようである。世情緊迫し十二月八日ついに大東亜戦争勃発、中間考査の最中であつたが朝礼時校長の訓話中、全校生徒の感動の熱気で吐息が講堂一杯に白くあふれたことを思い出す。大東亜戦争の緒戦の大勝のなか昭和十七年が明け。シンガポール陥落を目前にした二月十一日紀元節の日、人吉市制施行祝賀式が城内グラウンドで挙行され全校生徒参加する。

五月十三日学級増加に伴う西側の二階建て六教室増築落成する。九月には滑空部設置される。十月十三日校医の中津留寛介氏より滑空機一機が寄贈され「中津留号」と命名される。更に昭和十八年五月二十日同窓会より滑空機一機が寄贈され「同窓会号」と命名される。そ

まで行軍、演習終了後松橋駅近くの不知火村の農家の納屋に宿泊、翌早朝宇土中学校に向かつて行軍、宇土中学校校庭にて参加校の閲兵分列式挙行され終了後宇土駅から人吉に帰郷、この伝統の県下中等学校連合演習もこの年で終わる。中学五ヶ年の教練の集大成、願成寺血ヶ峯の実弾射撃、緊張して引いた引鉄、肩に当たった床尾飯の反動が思い出される。下級幹部育成のため、陸軍特別幹部候補生の募集がある。航空兵、船舶工兵が対象で幾人か入隊した。昭和十九年三月二日卒業式、卒業写真は二月十一日紀元節の日、学校玄関前で撮影された。八十五名写っている。四十数名が既に軍関係の学校や軍需工場等に行っていることになる。「螢の光」も「仰げば尊し」の歌もなく唯「海行かば」の歌を斉唱して卒業する。それぞれの道に進んだが一年五ヶ月して昭和二十年八月十五日終戦を迎えた。

私達の世代は物心ついた時には戦争の流れの中にあった。満州事変、小学校五年生の時に支那事変が始まり、そして中学校三年生の時に大東亜戦争が勃発した。中学校の五年間は多くの教課を学んだが軍事教育も受けたのである。五年生の終わり近く、担任の先生から陸軍特別幹部候補生の受験を勧められた。身体検査場は八代市の小学校の講堂であった。検査が終わり検査官の前に立った。「不合格」の宣告を受け、「もう一度検査して下さい」と云うと

検査官が姿勢を正され「国思う道に二ツはなかりけり戦の場に立つも立たぬも」と明治天皇の御製を奉唱された。戦争も緊迫した昭和二十年三月、四十五歳の父は赤い召集令状で熊本西部十六部隊に入隊、私も四月、三菱重工業(株)熊本航空機製作所に入社した。そして八月十五日終戦を迎えた。以来戦争のない平和な時代を過ごしたことを有難く感謝するものである。

『太平洋戦争』と人吉市民の暮らし 戦争と子ども達

前田 一洋

(田野町)

○魂の叫び

今回、『人吉市の太平洋戦時下マップ』作成に際して、多くの方々から戦時中の証言を頂きました。それらはまさに、永久に語り継がれるべき全身全霊を絞った魂の叫びでした。

このような、かけがえのない証言をしていただいた中には、「死ぬまで心の奥深く閉じ込めておきたかった」、あるいは、「悲しい思い出が再び蘇ってきて本当に辛い思いをした」、そのような方も少なくなかったに違いありません。

しかし、今回はこのような苦しみに耐え、あえて口を開いて下さいました。それは、「多くの犠牲のもとに、やっと来てくれた平和の鳩を逃がしてなるものか」「あの耐え難い苦しみ二度と後世の人々に味わわせてなるものか」と、ただその一念であったと思います。

わが国のいわゆる「戦時体制」は、昭和六（一九三一）年の「満州事変」から始まりました。その後、「日中戦争」「太平洋戦争」を経て終戦の昭和二十（一九四五）年まで、実に十五年間

にも及ぶまさに「十五年戦争」でした。

ことに太平洋戦争では沖縄が戦場となり、やがて日本国土自体が空襲の標的になり、ついには、人類初の原子爆弾まで落とされるといって、悲惨な結果で終わりました。

山紫水明で物静かな観光地であった人吉も、その例外ではありませんでした。爆弾こそ落とされませんでした。艦載機による機銃掃射が浴びせられました。このような「空襲」の被害を防ごうと、市街地の多くの家屋が強制疎開のために取り壊され、城下町としての景観を損ねました。やがて学童には、「分散教育」まで強いられたのです。働き手の中心であった男性の大半が軍隊にとられていったため、老人や女性そして子ども達が、仕事や地域を守るほかありませんでした。おまけに食糧を始めとするひどい物資不足、それはまさに悪夢の連続で極限状態でした。

しかし私たちは、このような犠牲のもとに、平和という至宝を手にすることが出来ました。この本に述べられている証言は、どなたのものも戦争という悪夢を体験し、そして平和への有難さを、身をもって示して下さいましたものばかりです。

ところが昭和二十年の終戦からさえ、すでに六十五年の歳月が経ってしまいました。そ

のため、その頃の遺跡や記憶は加速的に失われつつあります。さらには、戦争を知らない世代が、遂に日本社会の大半をしめました。従って、戦争なんて全くの「よそ事」としか思えないようになってきているのではないのでしょうか。

しかし、このような忘却や無関心ほど恐ろしいものではありません。そこにはいつしか平和の鳩を追い払い、全てのものを焼き尽くしてしまう魔の手が迫って来るからです。このような悪夢の再来を、余命の全身全霊をもって防ごうと、尊い記録を残して下さったのが、今回の証言です。

どうかこの「魂の叫び」を少しでも我がこととして受け取って下さいませんかでしょうか。そして、「なぜあのような戦争が起されたのであろうか。」「なぜ止めることが出来なかったのであろうか。」「戦争の結果、何がもたらされたのであろうか。」「さらに、「これから先の平和は、どう築いていくべきであるか。」「こうした知恵や行動の源泉にしていただければ、こんなに有難く嬉しいことはありません。

それでは、昭和十六（一九四一）年の太平洋戦争開戦から、昭和二十（一九四五）年の終戦

時までの「戦時中」、どんな社会情勢であったのか。そしてこのような厳しい時代を子どもたちは、どのようにして生きてきたのかを、子どもたちの視点目線からとらえて述べてみたいと思います。同じ世代の少年少女が、そんな体験をと、意外なことばかりが出てくることでしょう。しかし、絶対に二度とあってはならない世の中です。

この一冊を家庭の方々と一緒に活用下さって、平和で明るい未来社会を築くために、参考にしていただければ幸いです。

○わずか三年の間に

最初から私ごとで恐縮ですが、昭和十六年春、私は人吉町の通称「寺ん馬場」にある人吉幼稚園に入園しました。また、太平洋戦争は始まっていますので、制服である真っ白な園児服が着せられ、「キンダーブック」が渡りました。

カトリック系の園であったため、園長先生は、フランス人のおばあちゃん（…に見えました）。園児の中には、何人かのてーらん坊（腕白坊）はいましたが、まことにのどかな毎日でした。入園式には、両親が晴れ着で着飾り、修道院の白い衣装をつけたシスターさんたちが優しく迎えて下さいました。

その帰りには、「人吉座」の近くにあった「サンヨーパーラー」でお子様ランチをご馳走（ちそう）してもらいました。「共楽館」で映画も見て戻（もど）ったようで、「アノネオッサン、ワーシヤカナワンヨ」というのを口真似（くちまね）するようになり、よく叱（しか）られました。

人吉城内では、ちようと花見の真っ最中。あっちにもこっちにもゴザが敷（し）かれ、宴会（えんかい）たけなわです。そして、太鼓三味線（たいこしゃみせん）に合わせ、♪踊（おど）り踊（おど）るならチョイと東京音頭（おんどう）ヨイヨイ♪

続いて、♪人吉や町でも味噌（みそ）こしや竹（たけ）だよ♪の囃子（はやし）がにぎやかで、誠に呑気（まことのんき）なものでした。ところが、五つ下の弟が昭和十九（一九四四）年に入園した時には、もう園児服もキンダーブックも新品は、渡りませんでした。それで園児服は、継ぎ（つ）はぎだらけになった私のお下（お）下（ろ）りを。表紙のとれたキンダーブック、ちびれてしまったクレヨン、これも私のお下（お）下（ろ）りを使（つか）っていました。

親の姿も急転直下、母親など着物を縫（ぬ）い直して作ったモンペに上（う）つ張り。幼稚園の庭にも「防火用水」と書いた水槽（すいそう）が備（そな）えられており、その一角には、「防空壕（ぼうくうこう）」も掘（ほ）られていたようです。確かブランコのチェーンも、鉄（てつ）から麻（あ）の縄（なわ）に変わっていました。わずか三年の間に、子どもの服や本などに至るまで、このようなありさま。小さな店先（みせさき）からも、飴玉（あめだま）や煎餅（せんべい）が姿（すがた）

を消（き）していきました。

○校門をくぐると

全国の小学校は、昭和十六年から「国民学校」と呼ばれることになりました。そして、私は昭和十八（一九四三）年に「東間国民学校」に入学しました。担任の女先生は、着物（はかま）に袴（はかま）の姿（すがた）でした。しかし校長先生は、その前年の四月一日に制定された「国民服」をご着用、色は国防色でした。国民服とは、軍服に似た五つボタン（材料は木や竹）の男子服。この一着で仕事（しごと）から訪問用、さらには礼服までの役目（やくめ）を果たし、戦闘帽（せんとうぼう）に似た帽子（ぼうし）も着用されました。

正門を入ると左手に二宮金次郎の像、そして「奉安殿（ほうあんでん）」があります。この奉安殿というのは、天皇皇后両陛下（てんのうこうごうりやうきやう）の写真、これを「御真影（ごしんえい）」と言っていました。御真影や「教育勅語（ちよくご）」が納められていた場所。多くは昭和の初め頃から作られ、神殿（しんでん）のような形をした鉄筋コンクリート製の建物。当時は、学校で最も大切な場所とされていました。正門から先は全員「歩調（ほちょう）取れっ」、つまり膝（ひざ）を腰（こし）の高さまで上げて進みます。そして奉安殿の前では、「最敬礼（さいけいれい）」。身体を直角に曲げた姿勢（しせい）です。

掃除（そうじ）の後（のち）は、校庭に集合して朝礼。どんな寒い日でも素足（すそ）でした。そして、まず

東方遥拝^{とうほうようはい}。天皇がおられる宮城^{きやうじやう}の方を向いて最敬礼をします。『休め』の姿勢で校長先生の話を聞いていても、『畏れ多くも天皇陛下の』というくだりが出てくると、一斉に「氣をつけ」の姿勢がとられしました。校長先生の話はいつも、『戦地の兵隊さんがいかに苦勞をなさっていらっしゃるか。それに対して、国民学校の生徒たちは、どんなにしてご恩返しをするべきであるか。男子は早く大きくなって兵隊になり、女子は従軍看護婦^{じゆうぐんかんこふ}となって、お国のために尽くせ』、というようなことを長々と話されるのでした。各学年の前には、赤地に白線の入った腕章^{わんしょう}をした「週番」が立っていて、先生方の補助をします。学校の一日は、寒い日でも暑い夏でも、毎日このような朝礼から始まりました。

「マエーナライ」「ナオレ」「キヲツケ」「ヤスメ」などの号令で行動、整列したまま運動場を行進。「カイサン」で行進が終了。足を洗い、夏は水道で水を飲んで教室に入るのでした。

○下級生いじめの日々

運動場での朝礼や帰る時の退礼では、その場に突然倒れる者がいました。暑い中で先生の長話も原因だったのかもしれませんが、おそらく空腹や栄養失調^{えいようしやう}のためだったと思われます。食べたい盛りの子どもたちが、米粒^{つぶ}がほんのわずかしが入っていない雑炊^{ぞうすい}やカライモ飯^{めし}など

の「代用食」だったのですから。

また、当時は便所も汲み取り式であつたために、回虫や十二指腸虫などの寄生虫を持つ子どもが少なくありませんでした。それらが人の養分を吸うのですから、体力が落ち貧血を起こしていたのでしょう、突然に倒れました。このような時、下級生はそうでもなかったのですが、『わりゃー気合いの入っとらん、立たんか。』と叱^{しか}られ、先生からひどい制裁^{せいさい}を受けていたようです。また宿題をして来なかったり、忘れ物をした時にも体罰^{たいばつ}です。廊下^{ろうか}や職員室に正座、罰掃除^{うて}、腕立て伏せ、水の入ったバケツ下げ、運動場走り、便所汲み、昼食抜き^ぬ、さらにはゲンコツや平手打ち。もちろん、そのような先生ばかりではなかったのですが、それはひどいものでした。

このような暴力的制裁は、先生からだけではありません。集落ごとに行われていた掃除や作業の際には、上級生の下級生イじめもひどいものでした。おそらく軍隊の「新兵いじめ」の真似^{まね}だったのでしょうが、抵抗^{ていこう}できない下級生に対して、あらゆる言い掛り^{がかり}をつけては、理不尽な体罰です。打つ蹴^ける殴^{なぐ}る、罵詈雑言^{ばりぞうごん}（きたない言葉で、悪口を並べ立ててののしること）。下級生にとっては、地獄^{じごく}のような毎日でした。子どものタテ社会がよく賞賛される

ことがありますが、実態はそんな甘いものではなく、誠に残酷な面があったのも事実でした。

○服も靴もくじ引き

昭和十八年の新学期までは、教科書も帳面、鉛筆もどうにか新しいものが渡りました。小学校(国民学校)には、制服こそありませんでしたが、男子は黒の学生服、女子は紺のセーラー服を着せてもらい入学したものでした。

ところがその翌年からは、物資不足がひどくなったと見え、鉛筆まで買えなくなりました。そこでチビてしまったものを、細い竹でつないで使ったり、帳面や画用紙などは、一度書いたり描いたりしたものを消して使いました。しかし消しゴムもないので、魚屋からイカのフネ(骨のこと)を貰ってきます。そして硬いところをはぎ取って、ザラザラした部分で紙を削るようにして消していました。そんなものもない時には、指の先にツバをつけこすりました。靴や衣服類も自由に買えなくなり、とうとう配給に。しかもクラスにわずかしき割り当てがないため、くじ引きです。そして幸い当たっても、運動靴の場合は使い古したゴム底を持て来ないと替えてもらえませんでした。

お父さんたちは背広から国民服へ、お母さんは着物からモンペ姿へと変わりました、中学

生は冬の黒詰め襟、夏の霜降りこくらふくの小倉服から「国防色」の制服にゲートル巻き。女学校生はセーラー服から、へちま衿えりの上着にモンペ姿にと、それこそ戦時色一色になりました。

やがて物資不足がひどくなり、そのくじ引きさえなくなりました。そこで伸び盛りの子ども服のつくろいがまことに大変。親の着物を解いてガメぶせをしたり、袖などはまるでタケノコのように次々に継ぎ足しがしてありました。履物は普段は下駄げたかわら草履ぞうり。雨の日はゴム長など全くなって裸足はだしです。雨傘あまがさもないので、蓑みのやバッチョ笠かさで通学したものでした。かわいそうだったのは下級生、靴下もないので自家製のたび、それも裕福な家の子だけ。手袋などは見たこともありませんでした。

学校で子どもたちが一番楽しみにしているのは、いつの世も昼食の時間。人吉は農村地帯でしたので、おかずは大した物でなくても、弁当箱には米のご飯がいっぱい詰めてありました。それがいつしか姿を消して、梅干一個だけの「日の丸弁当」に。しかし、やがてそれがカライモ飯となり、カライモばかりという状態に。ところが、カライモさえ持つて来るものが出来ず、家に食べに帰る子。あるいは帰っても食う物がなくて、学校の水道の水を飲み、いかにも食ったふりをしている子もいました。こうした欠食の子たちを見て、先生もどうに

かしてやりたい、そう思われたに違いありません。しかし先生方ご自身が、すべて思うにまかせない毎日だったのでしょうから、さぞかし情けない想いをなされたことでしょう。

○赤子をおぶって

当時は子沢山の家庭が多く、その上母親は我が家の仕事ばかりでなく、勤勞奉仕などにも出なければなりません。それで赤ん坊をおぶったり、小さな弟や妹の手を引いて、学校に来る生徒も少なくありませんでした。

腹が減ったからでしょう、赤子が突然に泣き出します。子守りをする娘の髪の毛を引っ張る、足はばたばたさせる。教室の友達や先生に対して気の毒でなりません。子守りは、それをなだめようと必死ですが、一向に泣き止みません。仕方なくそっと教室を抜け出して、ビンにつめた重湯を飲ませてやっていたようです。ミルクなどどこにも売ってありませんでしたので、母乳の出ない母親の苦勞と心配は、並大抵ではなかったことでしょう。

戦時中は国の政策として、「産めよ殖やせよ」と国が音頭を取って、子沢山を奨励しました。なんのことはない、男子を兵士にするためにです。それで兄弟が五人や六人ぐらいいるのは珍しくもなく、多い家庭では十人以上いるほどでした。子育ては一人か二人でも大変なこと、

それが大勢で、しかも食糧から衣類を始め、全てが不自由な世の中。さらには父親まで戦争に行っていて、働き手はいない。そうしたひどい難儀の中で、ようやく成長した人々が、また次々と兵隊に取られて行ったのでした。

そうした親の苦勞を見て、さらには学校でも繰り返し「国のため」という教育があったために、自ら「少年兵」を希望する人も少なくありませんでした。これらは十四歳（現在の中学二年生）から志願することが出来たからです。即ち、陸軍では、「陸軍少年飛行兵」

・以下（陸軍少年を省略）戦車兵・野砲兵・重砲兵・高射砲兵・通信兵・工科兵。

海軍では、乙種予科練生・水測兵・電信兵・一般水兵・整備兵・機関兵・工作兵・衛生兵・主計兵など。

戦時中に人吉でも見かけた高平原の「予科練」は、このような人たちだったのでしよう。故郷を遠く離れ、全く知らない土地に来て、少年兵士としての厳しい訓練の明け暮れ。そうした内情を知らない子どもたちには、ただ「武者ん良か」姿ばかりしか見えませんでした。

○ムラサキケムル

「朕惟フニ我力皇祖皇宗国ヲ肇ルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ我力臣民克ク忠ニ克

ク孝二億兆心ヲ一ニシテ云々」、このような難しい文言を、やっとカタカナの読み書きを覚えた程度の一年生も書写しなければなりませんでした。読み方はどうにか鸚鵡返しに覚えていたものの、一体何のことやらさっぱり分かりません。それでもせっせと書き写しました。これが『教育勅語』の書き出しです。

国語のヨミカタでは、「ヘイタイサンゲン、キデスカ、ボクモ、オゲン、キデス」などと、戦地の兵士によく慰問の手紙を書きました。図工の時間には、ほとんど戦争の絵描きです。日の丸をつけた飛行機が敵の軍艦に爆弾を落とす、大きな水柱が立つ。あるいは戦車に続いて歩兵が突進する、女子の絵にはそれに従軍看護婦も加わっていました。こうした作品を『慰問袋』に入れ戦地へ送ったのです。

音楽は大声で、♪肩を並べて兄さんと今日も学校に行けるのも兵隊さんのお陰です♪とか、♪勝って来るぞと勇ましく♪などの唱歌や軍歌。あるいは「紫煙る鞍岳に朝茜の雲消えて」という『菊池盡忠之歌』のような、忠君愛国を賛美したものが、まだ十歳にもならない子ども達に教え込まれていました。

それでは、♪ハハニホホニ・ホホトイト♪これは一体何でしょう。ハをド、ニをレ、

ホをミに直してみると、唱歌の「日の丸」の音階だと分かりますね。このように、音楽の世界も様相を変えていったのです。

極め付けは修身、「忠君愛国」とその精神を中心に、幼い戦力、あるいは未来の兵隊として軍国少年少女を着実に育てていきました。その第一歩が、「日本ヨイ國、キヨイ國、世界ニツノ神ノ國。日本ヨイ國、強イ國、世界ニカガヤクエライ國」との文句でした。

このような教育が繰り返し施されていきましたので、わが国の子どもたちは、紛れもない「軍国」の少年少女として育っていき、「早く兵隊さんになりたい」「お國のためならいつ死んでもよい」と思うようになりました。

○遊びも戦争ごっこ

運動会や学芸会は、子どもばかりでなく家族にとっても大きな楽しみです。親兄弟と一緒に食べられる弁当にも、この日ばかりは、卵焼きが入っていたからです。そして、会場の近くには「ひなた店」が何軒も出て、子どもが喜ぶおもちゃやお菓子を売っていました。

運動会では大原女や遊戯など、学芸会では童話劇や踊りなど、見ている家族はもちろん子どもにとっても、楽しいものばかりでした。それが時代が降るにつれ、その主題もほとんど

が軍国モノ戦争モノに移っていききました。遠足もまた同じで、戦争の場を模したものへと。

遊びの世界でも、戦争ごっこや看護婦ごっこ。兵隊ごっこや軍艦遊戯などと、「大きくなったら、強い兵隊さんになります」「立派な軍人さんになります」「僕はお國のために喜んで死にます」などを目指すものばかり。そうした軍国主義、戦争への協力体制は、子ども達の本や遊び道具にも色濃く出てきました。

幼児の七五三などの祝いにも、その服装は、陸軍や海軍の大將、あるいは鉄兜に鉄砲を担いだ兵隊さん。男の子が大好きなウッチョコシ（ぱっちゃん）の図柄も、歴史上の人物や人気俳優、相撲取りなどから、軍人さんへ。そして、空への憧れを煽るかのように、模型飛行機作りや、競技大会が行われました。なかなか手に入らないプロペラやゴム、ニューム管など、方々探し回って作るのです。

人吉東校や人吉中学校などには、本物のグライダーがあり、訓練が行われていました。中学校には同窓会や新聞社、あるいは婦人会などからの寄贈がありましたし、女学校の生徒も高ノ原で飛行練習を繰り返していました。

○フスマの焼きだご

戦時中の子どもたちが、最も飢えていたのは飴玉やお菓子などの「甘かもん」。戦争が始まった頃までは、家庭用の砂糖も配給で少しずつながらありました。また店にもゲンコツ玉やニッケ玉なども売っており、良いことをした褒美に、缶に入ったドロップスを買ってもらったこともありました。しかし昭和十九年頃からは、家庭の砂糖さえ貴重品となってしまう。店に行っても、お菓子など何ひとつ売ってはありません。輸送船団が次々に沈められて、台湾方面から砂糖の輸入がほとんど出来なくなったからです。そこで子どもたちは、自分で「焼きだご」というおやつを作って食べました。ムギの粉、それがない時にはフスマ（小麦粉のヌカ）に水を加えてどろどろに練る。それをフライパンに種油をひいて焼くだけ。しかも調味料が塩ばかりでしたので、あまりうまいものではありませんでした。やがてその食塩まで入手困難となりましたので、葦北の海岸に出掛けて行き、海水を煮詰めて作る人もいるほどでした。

ただ秋になると柿が熟れるので、子どもたちは大喜び。渋柿は干したりアオしたりして、最高の取り物（おやつ）です。むいた渋柿の皮まで干しておやつにしました。休日には高ノ原の少年兵たちが、「ひもじくてなりませんので、吊るし柿を分けて下さいますか。」そう言っ

て農家を回っておられたようです。

物がなければ無いで、子どもは知恵を働かせました。馬の尻尾しっぽを何本も抜いて、田の粉穀もみがらにスズメのわなを仕掛けます。それを焼き鳥にしたり、野いちごでジャムやジュースを作ったり、ツバナやクズ根も食べていました。

男の子には、強い味方がありました。「肥後之守ひごのかみ」という小刀。これで、突き鉄砲も作れば、川で獲とった魚の料理もします。さらにメジロかごを作ったり、カエルの解剖かいぼうをした後、それで柿をむいて食べたりして。

女の子たちは、小さい頃にも買ってもらった「紅太郎さん」人形を大切に持っていて、茶碗わんの欠けや木の葉を上手に使って、ママンゴ(ままご)遊び。そんな時にも、たいていの子どもが、赤ん坊をおんぶしていました。誠に苛酷まこと かくくな時代ながらも、子どもはそれぞれに知恵を働かせ遊びも作り出しました。

○カライモのつるを

軍服や学童服の原料になるといので、ラミーの採集をさせられました。ラミーとは、ポツポ草とかカラホなどとも呼ばれ、道端や荒地に生えている雑草。この皮を剥はいで、繊維せんいを取

れば、織物の原料になりました。現に、昭和十五年度は学童によって採集された野生ラミーから四千着、十六年度分からは、一万着の学童服が作られて配給されました。あるいは、ミノ虫、これは牛皮などの代用品として戦地で使われたのでしょうか。また、寒い北の戦地での防寒用に、ウサギの飼育が奨励しょうれいされ、家庭や学校でも養われました。ヤギもその乳が栄養に富むことから飼われました。

食糧といえば、イナゴまで捕つかまえて食べさせられたものです。これは稲葉を食い荒らす害虫で、バッタの一種。捕まえると糞ふんを出させるため、一晚一升瓶ひとばいしやうびんや袋に入れておきます。その後で羽や足をむしり取ってしまい、鍋なべであぶって食べるのです。味付けが調味料もなく岩塩がんえんだけだったからでしょう、生臭なまぐさくて到底食たうていえた物ではありませんでした。

米の配給も、その量が減るばかりでなく、後では玄米げんまいだけとなりました。精米機を動かす電気も油もなくなってきたからです。そのため家庭では玄米を一升瓶に入れ、竹や木の棒ぼうで何百回となく搗たいて使うのです。こうした作業は、もっぱら子どもたちの役目。ちっとも面白くない作業でしたが、食べるために必死で取り組みました。

そして、その米の中に麦や唐芋、さらにはコウリヤンとかトウキビ、炒いり大豆まで混ぜて

食べていました。そうした穀物も「欠配」が続き、ついにはカライモやカボチャのくきばかりか、あらゆる雑草までカユのようなご飯に混ぜた「おじや（雑炊）」にして食べました。それは、まるで家畜のエサ同然。しかし「蛇やトカゲを食いながら戦っている戦地の兵隊さんのことを思って我慢しなさい」と言われ、小さい子どもは涙をうかべながら箸をつけていました。

○親元を離れて

年令も同じような子どもでありながら、さらに大きな苦難を背負わされていたのが、都会地や沖縄などからの「学童疎開」の子どもたちでした。親元を離れ、全く知らない土地で集団生活をしなければならなかったのです。

米軍の空襲が厳しくなると、その被害は全国に及びました。このため、小学生に都市から離れるよう指示されました。これが「学童疎開」と呼ばれたものです。今でこそ子どもではあるが、やがて兵隊や労働力となって国家に尽くさせることになる。そんな者を戦災で死なせてはいけないという目的のためです。

まだ、ゆとりがあった頃には、「縁故疎開」が勧められました。つまり田舎の親類縁者を頼っ

ての疎開です。これなどまあ良い方でしたが、やがて「集団疎開」が始まりました。田舎を持たない子供たちを、学校ぐるみで移住させるのです。その行く先は寺や公会堂、大きな農家や宿屋など。全く縁のない場所での共同生活は、なんとも心細いものでした。

田舎とはいえ、そうした時代ですから食物がそう潤沢にあるわけではありません。ひもじい上にノミやシラミが遠慮なく喰います。そして最も彼らを困らせたのが、言葉や生活習慣などの違いからくる偏見。幼い子どもたちには、どうしていいかわかりませんでした。

疎開児童のことで、最も悲惨であったのが、「津島丸事件」でした。沖縄から九州へ向かっていたこの商船が、アメリカ潜水艦の魚雷を受け、トカラ列島の近海で沈没。疎開児童を含め引率の先生や一般の人々千四百八十四人が亡くなりました。その中には、人吉を目指していた子供たちも少なくなかったことでしょう。昭和十九年八月二十二日のことでした。

○お寺の吊り鐘まで

人吉城内グラウンドには、大きな大砲がありました。日露戦争での戦利品で、「御館の大砲」と呼ばれ、人吉名所の一つともなっていました。「とっぱ先（先端）のタンギリまで、つっこけん」として登っける」というのが、子どもの自慢にもなっていました。その大砲が、いつ

の間にか姿を消してしまったのです。そればかりではなく、あちこちのお寺で時を告げていた梵鐘も、檀家の人々に見送られ、大砲の弾にするため人吉駅に運ばれて行きました。

また、当時の「大橋」や「水の手橋」はまことに気品があつて、観光都市人吉のシンボルともなっていました。鉄製の欄干や照明灯、それらが朝霧夕霧に霞んでいる情景は、どれほど多くの旅人の心を癒してくれたかしれません。ところが、これらもすっかり撤去されて、杉の丸太がその代用品になってしまいました。

こうした金属類の「強制供出命令」が出されたのが、人吉市が誕生した昭和十七（一九四二）年一月から、しばらく経った五月のことでした。そのために学校を始め、公園や広場あるいは、公会堂などにあつた記念物、銅像なども次々と出征して行きました。人吉中学校の越替中佐の胸像、東間校の二宮金次郎の銅像や水雷像などもそのころで、校区あげての誇りであつた中原校の飛行機も、ただの金属となつて回収されて行きました。

その強制供出の範囲はさらに拡大されて、子どもたちが学校に持つて行く弁当箱から、個人が大切にしていた時計や指輪などの貴金属や宝石類までが、その対象となりました。例えば結婚指輪など、女性にしてみれば命の次に大事な物だったのでしょう。それでも外見は喜

んで供出しなければなりませんでした。

次いでのことながら、女性のパーマネントも禁止されます。その理由がまことにバカげたもので、日本女性に相応しくない髪形だからというのでした。

○重労働だった松根掘り

証言の中に、よく「松根油」というのが出てきていますが、あれは一体何のことでしょう。元々、石油の産出がほとんど無い日本では、戦争が長引くと飛行機用のガソリンが極度に不足。その代用燃料としたのが松根油でした。本来は殺虫剤原料や溶剤として使われていたもの。野山から松の根を掘り起こし、釜で熱を加えて樹脂を抽出。さらにそれを精製して得た燃料。オクタン価は高いのだが、それを得るまでの労働力は大変なもの。戦時中は、児童生徒を始め多くの勤労働員の人々によって採掘されました。

人吉地方は、炭坑の支柱に使われる坑木の産地で、特に戦時中は乱伐に近い伐採が行われました。そのため松根油の原料となる松根はふんだんにありました。それで「勤労奉仕」の人々は、指定された場所にツルハシや山鋏、ロープやモッコ、ノコギリやナタやオノなどを用意して出掛けました。

まず松根の周囲を覆っている雑草や雑木などを除きます。それから次第に掘り下げていくのですが、大きな石があったり、他の木の根が絡んだりしています。一本ずつの条件が違いため掘り上げるまで相当難儀しました。最後は、ロープを掛けて大勢で引き起こし、役に立つ部分だけに整える。それらをモッコや天秤で運び出し、道路からは馬車や荷車で松根油工場に運び込みました。食糧の乏しい中での作業、その苦勞も一入でした。

松根油と同様、ガソリンの代用燃料で走っていたのが、「木炭自動車」です。これの出現は意外と早く、既に昭和十三（一九三八）年には熊本県の公用車に採用されました、太平洋戦争が始まる四年近くも前のことになります。この時期から戦争に最も必要な石油がすでに不足していたのでした。

○ヤミ米ヤミ酒ヤミ煙草

戦争のために人も物も、すべて動員するという法律「国家総動員法」が公布されたのが、昭和十三年のこと。それ以降、国民生活への締め付けが一層厳しくなりました。早速この年の七月には、綿製品の輸出が禁止されます。原料の総てが民間には回されず、軍服や兵器などの製造に使われるようになったのです。代わって人造纖維が開発されましたが、それは質

が極端に悪くて不評でした。

いよいよ太平洋戦争に突入し、物資が乏しくなってきましたと、食糧から衣類まで「配給」や「切符」制度となりました。例えば昭和十七年一月に出た「衣料切符」では、一人一年分の割当てが、郡市では百点。人吉のような郡部では八十点でした。

オーバーや背広は五十点。ワイシャツ、長袖シャツ、ズボン下が十二点という具合に。持ち点を超えたら、何も買えませんでした。

翌十八年には品物の点数が二十五パーセント引き上げになり、入手がますます困難になりました。それでも物があるうちは良かったのですが、切符はあっても物が全く無いという状態に。食糧の配給制度も、昭和十五年頃から始まりました。木炭・薬品・マッチ・砂糖・油・塩・味噌・醤油から始まり、米・魚・肉・野菜と続きました。しかもその量は次第に少なくなっていく、砂糖などのように「配給停止」になる物品も出てきました。また、米や麦がジャガイモやカライモに代わりました。

こうした切符や配給では、どうてい生活は出来ません。ことに育ち盛りの子どもがいる家庭では、「欲しがりません勝つまでは」という規制にも、自ずから限度があります。そこで

行われたのが「ヤミ取引」です。法外な金額を払ったり、直接農家や漁村に出掛けたりして買うのです。しかし、「星（陸軍）に碇（いかり）（海軍）に闇（やみ）に顔（特権階級）、馬鹿（正直）者のみが行列に立つ」と言われていたように、社会的な立場や地位をうまく使って、また、裏の人脈を上手に利用して、法の目をかいくぐりながら、裏で取引をする人もいたようです。

○建物の間引き

昭和十九年頃になると、村山台地の西校から時々、「警戒警報」のサイレンが鳴るようになります。（県の通達は、昭和十八年四月九日）これを受け、火の見やぐらの半鐘（はんしょう）が鳴らされ、町内の担当の人がメガホンで、「警戒警報発令、退避（たいひ）退避ッ」と叫びます。そうすると、防空壕に大急ぎで逃げ込まなければなりません。ラジオでも敵機の接近状態が報道されました。

敵機の接近を報せる「警戒警報」の上が「空襲警報」。これはB29を始め敵機が、その区域に侵入してきた合図です。熊本県内で最初に「空襲警報」が発令されたのは、昭和十九年十月二十三日のこと。B29の編隊が、天草方面に現われました。幸い人吉には来ませんでしたが、空襲が近づいたのを実感したことでした。

ところで、その防空壕ですが、軍用のは、頑丈（がんじょう）に作ってあったのですが、民間の防空壕は至って貧弱なものでした。家屋（かおく）から少し離れた場所に、畳が一枚か二枚敷ける広さの堅穴（たてあな）を二メートルばかりの深さに掘ります。その上にトタンや厚い板や丸太などを敷き並べて、土や石などをかぶせて固めただけのもの。直撃（ちよくげき）弾（だん）どころか、至近（しきん）弾（だん）が落ちても恐らく一たまりもないという程度のものでした。現に昭和十九年八月に県が検査をしたところ、かなりの数の防空壕が不合格となっています。

しかし無理ありません。どこを探してもセメントを始め、あらゆる物資が売られていなかったのですから。空爆に耐えるような丈夫なシェルターなど、到底出来るはずがありませんでした。それでも「空襲警報」が発令されたら、息をこらして、じっとそこにうずくまっている外に方法はなかったのです。

また、学校、会社、工場、倉庫さらには民家の天井板のはぎ取りが行われました。「焼夷弾（しょういうだん）」が落ちて来た時、その初期消火を容易にするためです。もしも天井板があると、そこに焼夷弾が引っ掛かり火災が拡大します。

こうした作業は、個人の立場や意見などは全く無視され、強制的に行われました。焼夷弾

というのは、火災による被害を増大させる目的で使われる爆弾。筒状の容器に油脂を詰め、それを束にして飛行機から落とすのです。それが空中で発火し、バラバラになって建物を襲う。ことに日本家屋の場合はその被害が大きくて、都市の空襲には多用されました。

これを消すため、各家々の庭先には防火用水の水槽や、火消し用のはたき、はしご、あるいはリレー消火用のバケツなどが備えられ、消火訓練が頻繁に行われていました。

家の窓ガラスは爆風で破れるために、和紙を細長く切って×字型に貼りました。さらに、家々の白壁や土蔵は、敵の飛行機から目立つというので、ススで真っ黒に塗られてしまいました。

そのおかげで、球磨川の川面に写っていたあの美しかった白壁の土蔵や家並びも、沈んだような情景になりました。

また、夜の明かりも、「灯火管制」といって、家の外に明かりが漏れないようにしなければなりません。そのため電灯に黒い覆いを被せたり、それ専用の暗い電球を使ったり夏の暑い夜でも雨戸を全部閉めて、明かりが外にもれないようにさせられました。

さらに大がかりな「防空」措置がとられたのが、「建物間引き疎開」です。これは町屋の

延焼を防ぐために、ある区画の家屋をこっそり壊してしまうのです。例えば現在九日町札の辻から紺屋町に抜けている道路、そこは元々三叉路になっていて、あの道はありませんでした。つまり商店や住まいだったところ。それが建物間引き疎開によって、あのようになつたのでした。この他にも、五日町や出町などでも同じような家屋の間引きが行われました。

こうした「防空演習」は、隣保班を単位として徹底に行われました。これらの行事や物品の配給などに関することは、定期的に開かれる「常会」で町内会長から提案され、そのとおり決められました。もちろん異議を唱えることなど全く出来ませんでした。

○機銃掃射におびえる

「警戒警報発令」、やがて「解除」が度々ですと、いつしか慢性になり、誤報のように受け取ってしまいがちです。ところが、とうとう実際にその時が来てしまったのでした。

人吉盆地には、米軍機による空襲が三回ほどありました。何れも戦争末期の昭和二十年のことで、子どもたちにもいよいよ戦争の恐ろしさが、実感を伴って迫ってくるのでした。

第一回目は三月十八日の昼下がり、西校のサイレンが「警戒警報」に続き、「空襲警報」

に変わりました。まさかと思っていた子どもたちも、今回ばかりは本能的に異様なものを感じたのでしよう、防空壕に走りました。それらは庭先に作られた堅穴であり、また黒岩の崖面に掘られた横穴であったりでした。消防小屋の脇にある火の見やぐらの半鐘も乱打されています。サイレンとその半鐘の合間を縫うかのように、まことに重苦しいエンジンの響きが伝わってきます。方角は人吉の南東部のようです。そして果たせるかな、高シ原のあたりから黒煙が立ち上りはじめたではありませんか。少し遅れて腹に響くような爆発音が。

高シ原「人吉海軍航空隊」が標的でした。白髪岳方面に姿を現わした艦載（航空母艦から発進する飛行機）のグラマン戦闘機二十三機が、編隊を組んで襲来。飛行場の上で旋回すると急降下、次々と爆弾を投下しました。その結果、海軍航空隊の指揮所、飛行機の格納庫が二棟、車庫や兵舎などが被弾炎上。この空爆で軍人九人が死亡、一人が重傷を負いました。そればかりでなく、近くの民間人も四人が犠牲となり、その中の一人は小学生でした。建物をはじめ、燃料用のドラム缶にも引火。それらが次々と爆発する炎や黒い煙は、人吉からもよく見えました。

ちなみにこの日には、熊本市健軍にあった「三菱航空機工場」も爆撃され、死者が十九名。

九州を約千四百機もの艦載機が襲ったと、記録されております。

○校長室にも銃弾

二回目は五月十四日。同じく艦載戦闘機が高シ原の飛行場を襲った後、人吉の市内を機銃掃射で襲撃しました。この機銃掃射というのは、飛行機に備えて付けられた機関砲で低空から撃ちまくるのです。幸い被弾はしませんでした、川で遊んでいた子どもまで狙われませんでした。人吉駅や人吉中学校（現在の人吉高校）、人吉貯木場炭倉庫なども銃撃されています。

人吉中学校の「空襲被害報告書」（『人吉高校四十年史』）には、学校長から熊本県知事宛て次のように報告されています。

「昭和二十拾年五月一日、午前六時六分空襲警報発令。午後四時一四分被空襲（機銃掃射）」。

一、御真影安泰ナリ

二、被弾校舎左ノ如シ

校長室一発（会議室トノ壁ニ止マル）二ノ三教室一発（校長室ニ抜ク） 生物教室屋根一発貫通（床ニ抜ク） 四年教室ノ右隣空室二発貫通（床ニ抜ク） 四年教室三発貫通（床ニ抜ク） 旧一ノ一教室一発（床ニ抜ク） 計十八発（猶校庭ニ多数、防空壕ニモ被弾セルモ貫通

セズ)。

三、死傷者ナシ。

四、尚^{なお}授業等ニ支障ナシ。

五、現状 生徒ハ分散勤労作業(分団別)中ニテ本日ハ防護隊員ノミ在校シタリ。

この時、人吉中学校一年生であった土屋重房さんの日記には次のように記されています。

五月十四日 月曜 晴 空襲警報のため学校集合は中止。

一、六時二十分空襲警報が発令された。

一、十七時敵艦上機が来襲した。自分は上野君の家に行っていたので、その防空壕に入った。自分は生まれて初めて人吉上空で、敵艦上機の機銃の音を聞いた。

(『城田次郎エッセー集』より)

最後は、七月三十一日。この時は、B 29爆撃機から焼夷弾が落とされたのです。場所は現在のあさぎり町上の薬師堂近くの農家。牛小屋が被爆し全焼、住まいも焼けてしまいました。さらには牛は焼け死に、娘さんが火傷を負いました。おそらく敵機はこの農家を狙ったものではなく、都市空爆の残りの爆弾を処分したのでしょうか、何とも気の毒なことでした。

このことは『戦後65年熊本空襲を語り継ぐ』の中で、山下完二さんが次のように記録していらっしやいます。

一九四五年七月三十一日(火)、真夏のとても暑い日だった。中学(旧制人吉中学)一年生だった。「月火水木金」で夏休みもなく、水田の草取りであった。丁度正午頃、空襲警報がかかり、間もなく北西の空からB 29のエンジン音が聞こえてきた。

近づいたら用水路に隠^{かく}れるつもりで、足は用水路に入れて、B 29の動きを見つめていた。B 29爆撃機はいつもなら数十機で編隊を組み、一万メートルもの上空を飛んで来るのが普通だった。それが、その日はたった一機。しかも五千メートルほどの低空飛行だ。

熊本市と福岡市などを爆撃しての帰りの爆撃機ではないかと思われた。白髪岳^{こうしゃぼく}に高射砲^{こうしゃぱう}を据^すえておけば、あれは撃ち落とされる等^{など}と話していた。

B 29の向きが、我々^{われわれ}よりもちよつとずれていたの、安心して見ていた。誰^{だれ}かが「B 29が糞^{くそ}ひった」と言ったので笑った。その後、B 29の直下あたりで爆発音がして黒煙^{こくえん}が噴^ふき上げてきた。我々が居る所からは2キロメートルくらいのところだ。みんな駈^かけて行こうかとしたが、青年学校教官に止められて、仕方なく留^{とど}まって燃え上がる黒煙を眺^{なが}めていた。B 29爆

撃機は何事もなかったように、白髪岳の南に飛び去って行った。

その日は上村（現あさぎり町）の谷水薬師のお祭りの日であった。その頃は、歩いて参詣（さんけい）に行くしか方法はなく、免田、錦、人吉方面から日傘をさしたりすげ笠や麦わら帽子、或（ある）いは手拭（てぬぐ）などを頭にのせて、そろそろと歩いていった。それを軍隊の行進とでも見たのではないだろうか。そして、都会を爆撃した爆弾が一、二発残っていたのではないだろうか。

爆弾は谷水薬師の西、数百メートルの所にある豊永泉さん宅の牛小屋に命中し、牛が一頭焼死した。焼夷弾であった。豊永宅では丁度（ちやうど）昼食中であった。飛び散った焼夷弾の油が娘さんの頭にかかり火傷（やけど）は負ったが、命は取り留めた。住宅は全焼した。

豊永宅から数十メートル離れた畑には炸裂弾（さくれつだん）が落とされて穴があき、近くで農作業をしていた親子（父と娘）の娘さんの左手指に爆弾の破片が飛んできて負傷した。

ところで、そうした敵機の襲来に対して、高シ原の航空隊からは一度の迎撃（げいげき）（相手を迎え撃つ）もなかったようです。関係者の証言によりますと、その頃はもう、人吉海軍航空隊には、飛行機がなかったということです。

また鬼木町にあった高射砲からは、確か一度二度、敵機を撃った事がありました。しかし

高度一万メートル前後の上空のためか弾丸はそこまで届かなかったらしく、ちょうど爆竹のように音と煙だけが見えました。

○わずかに赤トンボが

当時の軍歌であり、流行歌でもあった「若い血潮（ちしお）の予科練の、七つボタンは桜（いかり）に」は、まさに少年たちの大きな憧れでした。その「むしゃんよか」「七つボタン」が、人吉にも姿を現わしはじめたのが、昭和十九年の五月頃からでした。同じ頃、「球磨航空機会社」というのが人吉に設立され、また「菊池勤皇農兵隊（きんのうのうへいたい）」の入所式も人吉で行われました。

予科練というのは、「海軍飛行予科練習生」の略称。昭和五年に新設された少年飛行兵の養成機関。甲乙丙（こうおつへい）の三種がありました。戦争末期「特攻隊（とっこうたい）」として出撃した人たちのほとんどが、この予科練の出身者。当時人吉市の隣村である木上村の高シ原に、「人吉海軍航空隊」が開設され、多くの乙種予科練生が、全国（主に北海道、東北、関東、甲信越、北陸）から集まってきたのです。

それに先立ち、この人吉海軍航空隊と飛行場は、昭和十八年初頭に着工されました。工事には郡内の住民や人吉中学校の生徒たちが動員され、昭和十九年二月に竣工。通称「井沢の

権現さん」が飛行機の発着に邪魔だといので、球磨川べりに移されたのもその時です。海軍航空隊があった場所は、現在の農芸学院の一带。ここに兵舎や練兵場などがあり、昭和十九年二月一日に開設、五月十五日に第一期生七百五十人が入隊しました。以降二十年三月一日に解隊となるまで、八期約六千人の若者が、訓練に勤しみました。本来は航空学校を卒業した予科練生が、実戦の訓練をするための施設として設けられていたものです。しかし、もうその頃この人吉航空隊には、練習用の飛行機がほとんどありませんでした。そのため飛行機の機体やエンジンなどの整備訓練、後にはガソリン代用燃料の松根油製造作業等が行われていました。また高し原台地に、ようやく出来上がった幅五十メートル、長さ千三百五十メートルの滑走路。これも通称「赤トンボ」の飛行訓練がしばらく行われたばかりで、ほとんど使われることはありませんでした。計画によれば、この滑走路と交差するような形で、もう一本長大なものが作られるようになっていたことが記録されています。

人吉海軍航空隊の予科練生の年令は、十四歳から十九歳。現在の中学二年から高校三年生の少年たちです。そうした人たちが親元を離れ、集団生活をしながら軍人になるための厳しい教育と訓練を受けていたのです。

○十四歳の少年兵

七つボタンは桜に錨の予科練生、確かにムシャんよか制服制帽、今流に言えばカッコいい姿でした。そのため少年たちは勿論のこと、たまの外出許可日に会合う町の人たちもそれぞれ振り返って見惚れるほどでした。しかし予科練生に課せられた目的は、飛行機を完全に整備し、その飛行機を駆使して実戦に役立てるという大任を果たすこと。そのためにこうした超人的な知識や技術を、わずか半年の期間で習得しなければならない。それで一人前になるための課程は、それこそぎつしりでした。参考までに、「整備教程」をご覧いただきましょう。精神教育から始まり、国語・数学・物理化学。航空工学、飛行機の構造や名称、エンジンの原理や構造名称。電気や磁気の原理や理論。燃料や潤滑油の基礎。製図などの学科。徒手教練、海軍体操などの体育。航海や運用の基礎、軍制、軍歌、気象、保健衛生や救急法等を前期、つまり三ヶ月で習得しました。

続いて後期には、航空機やエンジンの分解組立調整。プロペラの取扱や調整。航空計器や電気系統の取扱分解組立。兵器の取扱。落下傘の分解組立法。結索（ロープの結び方）短艇の操方。工作、手旗信号、基礎作業、行軍、野外演習、羽布塗装という具合でした。

こうした課程を全うするため、その日課は午前六時の起床から二十時の就寝まで、それこそ分刻み。そして、すべての生活や活動は分隊、さらに各班ごとに分かれて行われました。従って、諸活動の中で成績が芳しくなかったり、失敗等があったりした場合には、体罰を伴った「連帯責任」が課せられました。表向き、暴力による制裁は禁止されていましたが、「精神バツ」を始めとする、いろんな刑罰がありました。

少年航空隊の名のとおりに、わずか十四歳くらいで「お國のため」と、こうした厳しい訓練にも耐えていたのですね。

ちなみに川辺川に架かる柳瀬橋のことを、予科練生たちは「なみだ橋」と呼んでいたそうです。それは、たまの休日を入吉の町で楽しく過ごしたのに、また厳しい兵舎に戻って行かなければならない、そういった少年らしい純な気持ちのあらわれだったのでしょうか。

参考までに、そうした予科練生の一日を、「課業日誌」からうかがってみましょう。六期生、当時十四歳と七ヶ月の鈴木勇さんが、昭和十九年に記されたものです。(原文のカタカナは平仮名になおしました)。

十一月一日(水) 晴

今朝おきると、足首とひざがとても痛むのは、誰も同じと頑張ったが、どうしてもかけ足が出来ぬので、歩いて朝礼に出た。

一、二(時間目)精教(精神教育)、今朝は非常に寒くて、教務を受けておる間、ふるえて困った。六十一分隊長尾崎中尉が講義される。今日、軍人勅諭中の質素と最後のまとめをやった。

三、航海 航海とは手旗の事で、原姿より第五原画まで進んだ。

四、五、陸戦 第一時間目は頑張ったが、二時間目はどうしても痛いので、見学をしてしまった。自分の意志はまだまだだめだ。

六、軍制 第六十一分隊士阿部兵曹長に軍制学の海軍旗抜粋を習った。

七、諸点 明治節に備えて身の回り整理、散髪洗濯等した。

今夜の入浴は湯かげんがとてもよいので、久しぶり手足をのばした。ああ、今夜も家の事が思い出される。家を出てから早や二十一日間。これもみな皇國の御為、大東亜戦争完遂のために頑張るものだ。

十二月一日(金) 雨時々曇

一、精教 百二頁第四章大東亜戦争の意義第三節大東亜戦争と我等の覚悟。

二三四五、図面 第一時限図面の見方見取り法の説明。第一項線の種類及び用法。第二項寸法の記入法。第三項寸法線の矢符記入法と見取り図の書き方。第一時限よりボルト及びナットの見取り図を書いた。

六七、陸戦 第三練兵場にて分散教練。今日はとても楽な陸戦であった。

人のうわさによれば、東京付近は大空襲に合い、大火災を生じたそうだ。神様なにとぞ家の方をお守りください。皆は元氣であろうか、けがはないだろうか。(以下略)

二十年一月一日(月)晴

朝礼の代わり総員五区の飛行場まで駆け足を行った。朝食には、雑煮餅ぞうにもちが出た、とてもうまかった。朝食後、一種軍装(いわゆる七つボタンは)に着替え遙拝式に臨んだ。

昼食も手荒くよいおかずがついた。食事後間食に出たみかんを食べながら、演芸会を開いた後、軍歌練習。夕食は皆どんなものが出るかと期待していたが、平常通りだった。温習は自由温習で、父上母上に一通と皆に一通手紙を書いた。釣床つりどこ(ハンモックのこと)降ろせば七時四十五分。

二月一日(木)晴後雨

一〇七 発整(エンジンの整備)組立調整上部思案点計測法。

今日の温習時間停電したため、前半はテンプラ(業務をこまかすこと)してしまった。今朝の駆け足はきつかった。

二月十七日(土)晴

今日は当直練習生だ、朝食後中根練習生より申し継ぎを受け交代。朝食を早く終わり、二班の香取練習生の遺骨いこつを見送りに、五区隊門へ行って見送った。家族を思うと感無量かんむりよう。

一〇三 発整 発動機運搬うんぱん

四〇七 甲板士官作業かんぱんで、各烹ほうすい所の薪運びたきぎを行った。

日誌はここで終了、その後「人吉海軍航空隊」は昭和二十年三月一日を以て解隊。わずかに、十三ヶ月間の歴史を閉じたのでした。

○先生までもが代用

太平洋戦争が始まりますと、学校から若い男の先生が次々と姿を消していかれました。軍隊にとられ、戦地へ行ってしまわれるためです。それでも曲がりなりにも、昭和十九年度までは、各学校で授業も行われていました。

ところが昭和二十年の新学期から、「分散教育」というのが始まりました。学校が爆撃されると、一度に多くの犠牲が出る。そうした被害を防ぐため、あちこちに分けて教育しようというのです。しかしそれは表向きの理由であり、実際には校舎に兵隊が駐屯したり、兵器の格納庫として利用されていたからでした。

そのため子どもたちは、集落ごとに分かれ、そのお堂や公会堂（現在の公民館）や民家。そのようなところで、しかも一年生から六年生まで全学年一緒に授業です。おまけに先生は正規な方ではなく、女学校の生徒さんでした。まだ三ツ編のお下げをしておられ、今ならさしずめ高校の一年生か二年生だったでしょう。このような先生を「代用教員」と言っていました。当時流行していた代用食とか、代用品にあやかった名称で、なんとも失礼な呼び名でした。

堅い板敷きの間に正座して、粗末な裁縫台で勉強する生徒も大変でしたが、その子どもたちに教える先生も本当のところ、どうしていいのやら分からなかったのかもしれない。

思えばあの分散教育の期間中、勉強をした覚えはほとんどないような気がいたします。

それもそのはずで、登校しても朝のうちから「出征軍人の家」への「勤労奉仕」、あるいは

は防空壕掘りなどと作業ばかりでした。出征軍人の家というのは、そのご主人が兵隊になって、戦地へ行っておられる家庭のこと。働き手がないので、地域の子どもたちや婦人会の人たちが農作業の手伝いをしていたのでした。そうした家の方々にあったため、勉強などしている時間はなかったはずです。

作業は田植えや田の草取り、カライモ畑の手入れ。勤労作業がない時には、山へ行って防空壕掘りです。堅い黒岩の崖を、ツルハシで掘っていくのです。掘った土砂はモッコに入れて凹地などに運びます。食物もまことに厳しい状態で、昼食はせいぜいイモが一つ二つでしたので、それこそヘトヘトになって働いたものです。

○父親にも赤紙

民間の人が「志願」や「徴兵」により兵隊になって戦地に行くことを、「出征」と言いました。それはまさに、戦死を前提とした悲壮なものでしたが、おもて向きは名誉なこととされ、盛大なお祝いをしたものです。これを「兵隊見立て」と言っていました。祝出征、武運長久等と寄せ書きをした日の丸や軍艦旗、豪華な花輪、あるいは出征軍人の名前を書いたのぼりなどを立てて励まします。また、壮行の宴会も盛大に開かれました。

出征をするためには、「召集令状」というのが送られてきます。それに赤色の紙が貼ってあったので、通称「赤紙」とも言われました。さらにその郵送代金が一銭五厘であったことから「一銭五厘の赤紙」とも呼ばれ、まさに生命の軽さを象徴する言葉として使われました。

兵隊見立てには親類縁者ばかりではなく、地域の主だった人なども招いて、盛大に行われました。万歳の「歓呼の声」に送られ、それはまことに勇ましいものでした。しかし、二度と生きて会えない可能性が高い人を送る者として、これが本当の気持ちであったかどうか。今にして思えば、判断に苦しむところですよ。

ことに人吉駅では、出征軍人を見送る人々が日の丸の小旗を振り、列車が見えなくなるまで「万歳、万歳」と叫びました。しかし、戦争の激化に伴い、そうしたお祝いをしてあげることさえ困難になり、ついには別れの盃を交わすお酒さえ買えない状態になったのでした。

○農村に買い出し

配給で来ていた食糧も次第に少なくなり、とうとう「欠配」の連続になりました。食糧を探すと言っても、生易しいことではありません。泣き付くようにして、米や麦あるいはカライモなどを分けてもらうのです。こうしたことを、「買い出し」と言っていました。ときには、

集団で「買い出し部隊」に出掛けたこともありました。しかし農家でも厳しい供出のため、ほとんど余裕がなく分けてやろうとはしません。そんな時には、一張羅の晴れ着などを持って行き交換して貰いました。

ところが、まだ安心は出来ません。食糧のすべてが自由に売買が出来ない「統制品」であったため、駅には警官の目が光っています。見つかったら即没収です。育ち盛りの子を持つ母親はどんなにか辛かったことでしょう。

○戦地の便りも途絶え

まだ日本軍が勝ち戦であった頃までは、戦地からの「軍事郵便」も届いていました。それには一家の主人としての、切々たる家族への想いや気遣いなども書かれていました。しかし、所属する部隊や所在地などは記されていませんでした、軍の秘密だったからです。年老いた親、そして妻や子を残して戦地に行っている人にとっては、このハガキ一枚が唯一の生きる喜びであったことでしょう。

また家族たちも「慰問袋」に託し、家庭の様子を書いた手紙や日用品、炒大豆や煎餅などの好物を送りました。ところが、こうした心の通いも途絶えがちになり、いつしか届かなく

なりました。そして、まさかと思っていたものが。それが「戦死の公報」でした。「陸軍上等兵〇〇はビルマの〇〇方面にて戦死」という報せ。これも最初のうちは、「名誉の戦死」ということで、村や町をあげての葬儀が行われておりました。いわゆる「村葬」や「町葬」などと呼ばれる儀式です。そして戦争初期の頃までは、兵隊さんの石像を刻んで建てたり、立派な墓も造られました。

しかし兵隊見立てと同様に、敗色が濃くなるにつれ、まことにひっそりとしたものになっていきました。名誉の戦死なのに、「警戒警報」や「空襲警報」、「防空演習」「勤労奉仕」などのため、それこそ満足な葬式さえ出来ない状態になっていったのです。

それから後の、家族の生活は推して知るべしです。母親は「戦争未亡人」となります。子どもたちは、抱いていた将来への夢も希望もすっかり諦めてしまわねばなりませんでした。

○小作料の上に供出まで

戦時中の人吉地方の主な職業は、市街地の商業や職人を除くとその大半が農業でした。作物類は米と麦、副業として苧麻の栽培、カイコを育てていました。

ところで、その農家のうち、かなりの数が自分の耕地を持たない「小作人」で、広い土地

のある「地主」から田畑を借りての耕作でした。そのため収穫の中から、耕地の借り賃「小作料」の米を納めなければなりません。それは収穫量の半分以上という、大変な負担でした。さらに厳しい「米穀検査」というのが行われて、政府が強制的に買い上げる「供出」までしなければなりませんでした。

このため小作農家では、米のご飯を食べることはほとんどなく、麦や粟ばかり。それに三度三度、味噌汁と漬物だけというありさまでした。それで子どもは、栄養失調同然。鼻炎や眼疾、皮膚病などに悩まされ続けました。

そうしたひどい生活の中から、馬は「軍馬」として徴用されて行きます。さらには、一家の働き手である主人や息子たちが、「赤紙」一枚で軍隊にとられて行きました。

このように小作農家の人たちは、社会の仕組みと戦争という二重の苦しみを味わわされたのでした。

そして、戦争末期になりますと、わずかな現金収入源であった麻畑や桑畑も、カライモなど食料生産用の耕地にされてしまいました。アンモニア等の化学肥料も来なくなり、肥料はもっぱら人糞や堆肥でした。

歳の暮れになりますと小作米の納入です。なけなしの米俵を荷車に載せ、地主さんの蔵に納めなければなりません。父親が出征している家では、母親が荷車をひき、子どもがその後押しをする姿も見られました。北風の吹きすさぶ夕暮れ、素足に草履の母と「戦争遺児」が上納に行く姿は、何とも気の毒でした。

○柳の小枝に託して

出征に際して、人吉地方ではタチワケという豆を植えました。蔓の先端まで実が成る、すると今度は上の方から実が成り下がってくる。それにあやかり、戦地から生きて戻ってほしいという願いを込めていたのでしょう。

また柳の枝を庭先に挿し木しました。これもよく活着するところから、「武運長久」を願ったものです。そして、「千人針」をお願いしたり、お百度を踏んだりして、主人や息子たちが無事帰還するのを願ったものでした。

こうした行為は迷信なのかもしれませんが、しかし、敵や味方の弾丸が飛び交う戦場です。いつ敵弾に見舞われるやしません。全く生命の保障がないのが戦場であってみれば、神頼みをするより外は無かったのでしょう。

しかしその悲願もむなしく、人吉駅に遺骨の入った「白木の箱」を迎えに行く遺族が増えてきました。あるいは役場の庭に積まれていて、それを受け取って帰ることもありました。そして箱に遺骨の一片でも入っていればまだしも、土塊や石ころ、中にはお位牌ばかりということも多くなってきました。

若くして戦争未亡人になった母親、そして残された子どもたち、それにわずかな親類で葬式をする。幼い長男が白木の箱を胸に抱き、うつむきながら墓場へ向かう。そうした情景に、農作業をする人たちもつい涙を流すのでした。まさに他人事ではなく、明日は我が身でしたから。

○たとえ生きて帰っても

戦地に出征された兵隊さんの中には、戦場であるいは抑留地で、戦友を亡くされた方も少なくありませんでした。しかも激戦地では遺体を焼いてあげることも出来ません。そうした場合は、ただ遺体の手首を切って焼き遺骨にしなければなりませんでした。

また、満洲やシベリアなどのように、極寒の戦地では、大地が岩のように固く凍っている。そこをツルハシで掘って、雪と氷をかぶせ、異国の土に埋めたままにしてきたという人。あ

るいは目の前で、敵を殺してしまった。そのために心の平衡を失い、止むなく帰還する人もおられました。戦時中は、そうした心の障害者への気遣いはいたって冷たく、「兵隊じんけい（気遣い）」などと呼び、その家庭までもが馬鹿にされ、さげすまれました。

○戦争こそ最大の人災

これまで長々と戦時中の様子を述べてきましたが、よくぞ最後までお読み頂きました。もしかしたら、ああイヤだと途中で読むのを投げ出したいと思われた方も、きっと少なくともかったに違いありません。私自身、同じ思いにかられながら書き続けたのですから。

その理由は至って明瞭。心が弾むような嬉しい事、子どもらしい陽気な場面、明日への希望につながる楽しい夢、そうした明るい内容が、ほとんど出てこなかったからです。

それもそのはずで、三年ハケ月にも及んだ太平洋戦争、その間中、国民は全く外に出ることのできないオりに閉じこめられたまま、毎日毎日ひどい災難に苦しめられていたのです。当然なことに子どもたちも、大人と全く同じ災難に襲われ続けていたのです。

ところで人々を苦しめる「災難」、それには二通りのものがあります。一つは地震や風水害などのような「天災」。これはある程度予知をしたり、防災策を講じて予防はできても、

その被害から完全に逃れることはできません。天災の場合は自然現象だからです。

もう一つは「人災」です。そしてその最たるものが戦争ではないでしょうか。国民や為政者の誤った考えや政策によって引き起こされるのが戦争であり、場合によっては、天災をはるかに上回る災害をもたらし、人類の滅亡さらには地球の破滅さえ招きかねません。

広島に原爆を投下したB29の搭乗員が、その所感を聞かれ、何と答えたと思いますか。

「戦争に道徳はありません」、わずかにその一言だったのです。十六万人もの市民を焼き殺し都市を全滅させてしまったのにですよ。まことに恐ろしい発言ですが、裏を返すと、戦争の本質を指摘したものかもしれません。

ところがこのB29の搭乗員も、もし戦争中でなかったなら、人一人殺せるどころか、花や音楽を愛し家庭ではやさしい父親であったに違いありません。同じように戦地で戦った兵士たちも、みんな善良な市民であったはずです。例え相手が敵だとしても、だれが好んで人に鉄砲を向けたり、刀で切り付けたりしたのですかね。そうした行為が人間性にもとるということは、どこの国でも小さいうちから十分に教えてきたのですから。

ところが戦争という人災は、そうした道徳も文化も全てを焼き尽くしてしまう魔物です。

長い歴史の中で培^{つちか}われてきた人間性も、みんな「勝つため」という目標のために失われ、人が人でなくなってしまう地獄と化すのです。

しかしその魔物は同じ人間が生み出す結果であってみれば、人間の叡知^{えいち}と努力によって「平和の鳩」に変えることも可能なのではないでしょうか。その結晶が、『日本国憲法^{けんぽう}』です。今から六十四年前、つまり皆さんのおじいさんおばあさんの時代に、国民の血と生命とに引き替え、ようやく出来上がった世界に冠^{かん}たる平和憲法です。どうか皆さんも、この憲法の価値をぜひ確かめておいて下さい。

「一億総玉碎^{ぎよくぐさい}」つまり、国民が一人も生き残らないまで戦う。これが戦争末期に軍部が考えていたことです。もし、昭和二十年八月十五日の「終戦」を迎えていなかったなら、全くその通りになっていたかもしれません。

戦争という行為が、いかに悲惨^{ひさん}なものか、また愚^{おろ}かなことか。それに対する平和がどんなに尊いものであるか、少しでもご理解いただけたら、貴重な証言をして下さった方々のご期待にこたえることにもなります。これから先は皆さんの時代です、どうか悲惨で愚かな戦争を繰り返さないでください、これが戦争を身をもって体験した者たちの願いです。

最後になりましたが、終戦工作のために身命^{しんめい}を捧げられた高木惣吉海軍少将は、人吉市のご出身。「石亭の館」内に、その資料館もありますので、ぜひ見学しておきましょう。

(参考文献)

- 『戦後65年熊本の戦争遺跡』（熊本の戦争遺跡研修会編・創思社）
- 『戦後65年熊本空襲を語り継ぐ』（平和憲法を活かす熊本県民の会編・発行）
- 『子どもと歩く戦争遺跡ⅠⅡⅢ』（熊本の戦争遺跡研修会編）
- 『十月二十日 われら語りべ 人吉中学十八、十九回生の記録』『喜寿記念文集世紀を超えて』（熊本県人吉中学校 人吉高等女学校昭和二十年度入学生 熊本県立人吉高等学校第三回卒業生どうしとる会編）
- 『城田次郎エッセー集 二度と通るまいあの道を』（人吉中央出版社）
- 『本田寿男著 高原の予科練』（人吉図書館蔵）
- 『東間校百年史』（東間小学校発行）
- 『人吉高校四十年史』（人吉高等学校編）
- 『思ひ出づるままに』（川辺みち著）
- 『温故知新』（川邊龍一著）

『沖縄の家族』（浅川純著）
『救国・聖断の史』（川越重男著）
『かくて、太平洋戦争は終わった』（川越重男著）
『積乱雲』（渋谷敦著）
『新・熊本の歴史8』（熊日新聞社）
『世相くまもと 昭和編』（熊日新聞社）
『熊本の昭和史 年表』（熊日新聞社）
『明治・大正・昭和世相史』（社会思想社）
『子どもたちの昭和史』（大月書店）
『太陽こどもの遊び集』（平凡）
『読める 日本史』（自由国民社）ほか
『世界大百科事典』（平凡社）

戦争体験と平和への想い

「小学校高学年版」

－ 戦争体験と平和への想い緊急調査事業 －

発行日 平成23年3月31日

編集発行 人吉市福祉課

印刷製本 (株)協和印刷